熊本県文化財調査報告　　第98集

竜田陳内遺跡

一般国道３号熊本北バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1988．3

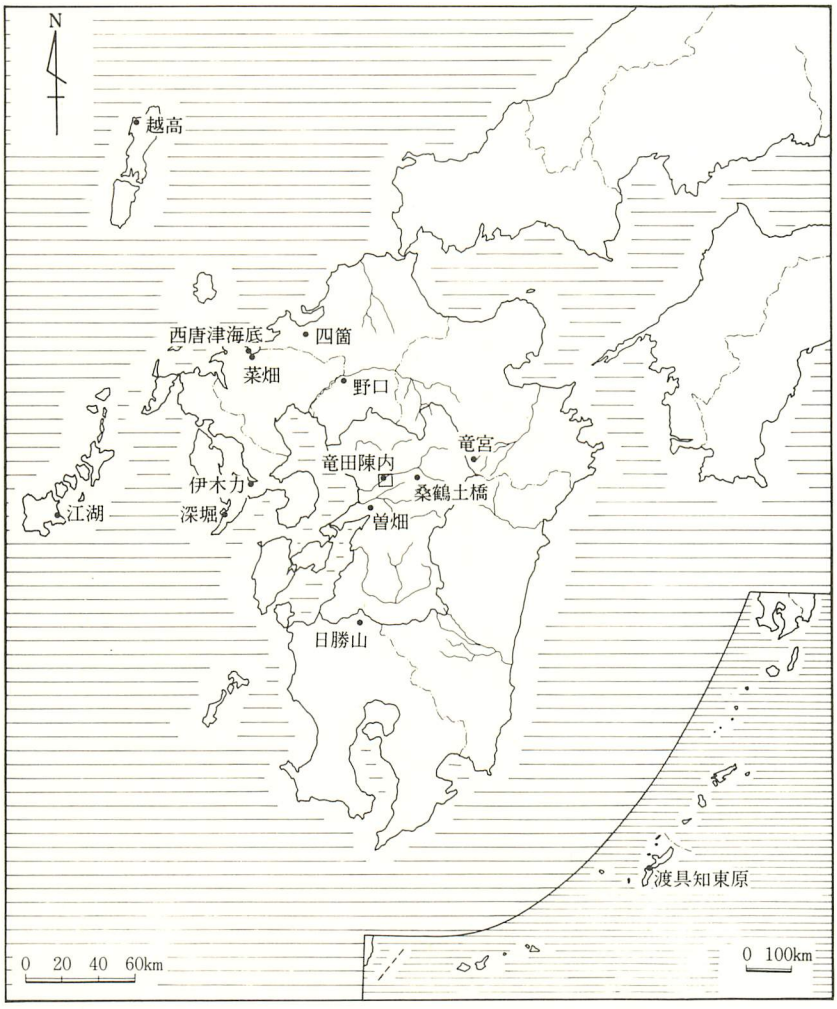
熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　　第98集

竜田陳内遺跡

（たつだじんない）

一般国道３号熊本北バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



１９８８．３

熊本県教育委員会

竜田陳内遺跡空中写真（調査地は写真中央）

序　　文

熊本県教育委員会では、建設省の委託を受け、一般国道３号熊本北バイパスの建設事業にともなう埋蔵文化財の発掘調査を実施いたしました。

これは前年度までの西谷・新南部両遺跡の調査に続くものですが、白川対岸にあたるこの竜田陳内遺跡の調査でも同様に、数多くの新しい資料を加えることができました。

白川流域には数多くの遺跡が集中しており、太古の昔より人々が生活を営んでいたことが知られます。今回の調査ではそれを裏付けるように、古くは旧石器時代の三稜尖頭器をはじめ、曽畑式土器を中心とする縄文時代の土器、古墳時代のカマド付き住居址など貴重な遺構や遺物を確認いたしました。

これら掘り出された遺物から往時の我々の祖先の生活ぶりを偲ぶ時、また感慨深いものがあります。

このたび、竜田陳内遺跡の発掘調査の報告書を刊行することになりましたが、本報告書が埋蔵文化財に対する認識と理解を深め、さらには学術研究の進展にいささかでも寄与するところがあれば、誠に喜びに堪えません。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大の御協力を惜しまれなかった九州地方建設局、ならびに、御指導御助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げたいと思います。

昭和63年３月31日

熊本県教育委員会

教育長　田　嶋　喜　一

例　言

1．本書は、一般国道３号熊本北バイパスの建設事業に関連して、昭和61年度に発掘調査を実施した、熊本市竜田町「竜田陳内遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は、建設省九州地方建設局熊本工事事務所の委託を受けて、熊本県教育委員会が実施した。

3．現地での調査は、平岡勝昭を中心に浦田信智、平井浩一、住田幸恵がこれを行った。

4．遺物の整理、実測および写真撮影は熊本県文化財収蔵庫で実施し、平井、丸山伸治がこれにあたった。

5．整理後の遺物は、熊本県文化財収蔵庫（熊本市千葉城町２―16）に保管している。

6．調査区の地名は、「陳内」および「陣内」の二通りの表記があり統一されていないが、本報告書では便宜的に「陳内」の表記に拠ることとした。

7．本書の執筆および編集は、隈昭志の指揮のもと平井、丸山を中心として、江本直、浦田の協力を得てこれを行なった。なお執筆分担は、各文章の末尾に記した。

本文目次

序文
例言
第Ⅰ章　序説…… 1
第1節　調査に到る経緯と経過…… 1
1．調査に到る経緯…… 1
2．調査組織…… 2
3．調査の経過（調査日誌抄録）…… 2
第2節　遺跡の位置と環境…… 4
1．遺跡の位置…… 4
2．周辺の地形…… 4
3．調査区の地形…… 4
4．遺跡の歴史的環境…… 5
第3節　発掘調査の概要…… 9
1．調査方法および調査区の設定…… 9
2．遺跡の基本層位…… 11
3．出土状況…… 12
第Ⅱ章　遺構・遺物…… 14
第1節　旧石器時代…… 14
第2節　縄文時代…… 15
1．早期…… 15
2．前期…… 16
(1)遺構…… 16
(2)遺物…… 17
1)轟式土器…… 17
2)曽畑式土器…… 18
3．後・晩期…… 47
4．石器…… 53
5．その他の遺物…… 63
第3節　弥生時代…… 64
第4節　古墳時代…… 65
1．第1号住居址…… 65

２．第２号住居址……69
第５節　その他の時代……73
１．近世土壙……73
２．その他の遺物……74
第Ⅲ章　総論……75

図版目次

第1図　竜田陳内遺跡周辺遺跡分布図…… 6
第2図　遺跡図・グリッド図…… 10
第3図　基本層位図…… 11
第4図　遺構配置図…… 13
第5図　旧石器実測図…… 14
第6図　縄文早期土器実測図…… 15
第7図　集石遺構図…… 16
第8図　轟式土器実測図…… 17
第9図　縄文時代遺物調査区域図及び層位図…… 19
第10図　縄文時代遺物平面分布図（1）…… 20
第11図　縄文時代遺物平面分布図（2）…… 21
第12図　縄文時代遺物平面分布図（3）…… 22
第13図　縄文時代遺物平面分布図（4）…… 23
第14図　縄文時代遺物断面分布図（1）…… 24
第15図　縄文時代遺物断面分布図（2）…… 25
第16図　曽畑式土器実測図（1）…… 27
第17図　曽畑式土器実測図（2）…… 28
第18図　曽畑式土器実測図（3）…… 30
第19図　曽畑式土器実測図（4）…… 31
第20図　曽畑式土器実測図（5）…… 33
第21図　曽畑式土器実測図（6）…… 34
第22図　曽畑式土器実測図（7）…… 39
第23図　曽畑式土器実測図（8）…… 40
第24図　曽畑式土器実測図（9）…… 41
第25図　曽畑式土器実測図（10）…… 42
第26図　曽畑式土器実測図（11）…… 43
第27図　後・晩期土器実測図（1）…… 48
第28図　後・晩期土器実測図（2）…… 49
第29図　後・晩期土器実測図（3）…… 50

第30図　後・晩期土器実測図（４）……51
第31図　出土石器実測図（１）……54
第32図　出土石器実測図（２）……55
第33図　出土石器実測図（３）……57
第34図　出土石器実測図（４）……58
第35図　出土石器実測図（５）……59
第36図　その他の遺物実測図……63
第37図　弥生時代遺物実測図……64
第38図　第１号住居址実測図……65
第39図　第１号住居址内カマド実測図……66
第40図　第１号住居址内出土遺物実測図……67
第41図　第２号住居址実測図……70
第42図　第２号住居址内カマド実測図……71
第43図　第２号住居址内出土遺物実測図……72
第44図　近世土壙実測図……73

表　目　次

第１表　竜田陳内遺跡周辺遺跡一覧……7
第２表　曽畑式土器観察表（１）……44
第３表　曽畑式土器観察表（２）……45
第４表　曽畑式土器観察表（３）……46
第５表　出土石器一覧表（１）……61
第６表　出土石器一覧表（２）……62

写真図版目次

1　調査区全景…… 83
2　縄文前期遺構・遺物検出状況…… 84
3　住居址検出状況…… 85
4　近世土壙検出状況…… 86
5　旧石器・縄文時代早・前期土器…… 87
6　曽畑式土器…… 88
7　曽畑式土器…… 89
8　曽畑式土器…… 90
9　曽畑式土器…… 91
10　曽畑式土器…… 92
11　曽畑式土器…… 93
12　曽畑式土器…… 94
13　曽畑式土器…… 95
14　曽畑式土器…… 96
15　曽畑式土器…… 97
16　曽畑式土器…… 98
17　曽畑式土器…… 99
18　縄文時代後・晩期土器……100
19　縄文時代後・晩期土器　土製品・玉類……101
20　縄文時代石器……102
21　縄文時代石器……103
22　縄文時代石器　弥生時代出土遺物……104
23　住居址内出土遺物……105

第Ⅰ章　序　　説

第１節．調査に到る経緯と経過

１．調査に到る経緯

昭和47年度、建設省九州地方建設局熊本工事事務所から、松橋バイパスや玉名バイパスと共に、熊本北バイパスの路線について、分布調査の依頼があった。依頼を受けた熊本県教育庁文化課では３路線の踏査を行い、松橋バイパス９ケ所、玉名バイパス12ケ所、熊本北バイパスについては下記の12ケ所を確認して、熊本工事事務所に報告した。

国道バイパス関係埋蔵文化財一覧　　(熊本北バイパス)

遺跡名	面積	所在地	時代	内容等
四方寄御馬下遺跡	㎡ 17,500	北部町四方寄御馬下	縄文，古墳	縄文時代，古墳時代の住居跡
鶴羽田横穴群	3,600	〃　鶴羽田	古墳	古墳時代後期の横穴群
須屋城跡	11,500	西合志町須屋	中世	天正年間，菊池氏一族の須屋市蔵の居館跡と伝えられる。 濠，土塁に囲まれた要害である。
新地包含地	19,400	熊本市清水町新池	弥生，古代，中世	弥生，古代，中世の集落跡
麻生田包含地	6,100	〃　〃　麻生田	弥生，古墳	弥生，古墳時代の集落跡，甕棺遺跡
楡木庵ノ前遺跡	10,900	〃　〃　楡ノ木	縄文，弥生	縄文時代の集落跡， 弥生時代の甕棺遺跡
迫の上遺跡	18,500	〃　竜田町迫	縄文，弥生	縄文時代の集落跡，弥生時代の集落 甕棺遺跡
緑ケ丘山の神遺跡	5,400	〃　〃　緑ケ丘	縄文	縄文時代の集落跡
緑ケ丘遺跡	14,000	〃　〃　緑ケ丘	縄文，古墳，古代	縄文時代，古墳時代の集落跡， 古代の窯跡群
竜田陳内北遺跡	6,600	〃　〃　陳内	縄文，古墳	縄文時代，古墳時代の集落跡
竜田陳内南遺跡	10,500	〃　〃　陳内	縄文，古墳	同上
新南部遺跡	9,200	〃　新南部町	縄文～奈良	縄文，弥生，古墳時代の集落跡，弥生時代の甕棺遺跡の他，奈良時代の寺院跡

このうち新南部遺跡については、昭和58～59年度に試掘調査、59年度に発掘調査（担当者文化課参事　平岡勝昭）を実施した。本報告書で取り扱った陳内遺跡は白川右岸の竜田陳内南遺跡にあたる。

発掘調査は、昭和61年度の建設省九州地方建設局熊本工事事務所からの委託事業によって実施することになり、文化課参事平岡勝昭、嘱託平井浩一が担当した。

なお、文化財保護法による手続きは、熊本工事事務所長（林田彪）から昭和61年３月５日付け建九熊調第32号で、「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事について（通知）」が、熊本市教育委員会（昭和61年３月７日付け教文発104号）を経由して県教育委員会に提出された。県教育委員会からは昭和61年３月11日付け教文761号で「事前の発掘調査を実施して下さい」との旨の通知書を送付した。

また竜田陳内北遺跡については、熊本工事事務所（昭和61年８月４日付け建九熊二調第30号）からの依頼によって、同年９月１日～10月31日試掘調査を実施したが、遺構等は検出できなかった。

（隈昭志）

2．調査組織

調査主体	熊本県教育委員会		
調査責任者	丸木　保賢	文化課課長	
調査総括	隈　　昭志	課長補佐兼文化財調査係長	
調査事務局	紫田　和馬	主幹兼経理係長	(昭和61年度)
同	松崎　厚生	同	(昭和62年度)
同	森　　貴史	参事	(昭和61年度)
同	谷　貴美子	主任主事	
同	上村　祐司	主事	(昭和62年度)
調査主査	平岡　勝昭	参事	(昭和61年度)
同	江本　　直	主任学芸員	(昭和62年度)
調査員	丸山　伸治	文化財保護主事	(昭和62年度)
同	浦田　信智	嘱託	
同	平井　浩一	嘱託	
同	住田　幸恵	嘱託	(昭和61年度)
調査協力者	朴　　廣春	熊本大院生	
同	村上　恭通	広島大院生	
同	水ノ江和同	同志社大院生	
遺物整理	小山正子　小佐井恵理子　渕上慶子　前田志磨江　水上寿美子　村上法子		
調査作業	今村あさえ	岩崎サユリ	上田義明　梅本清子　梅本節子
	小山正子	河合勇一	川口時子　川端　武　川端文江
	川端ヤヨイ	北嶋スミ子	金　亨得　坂本年子　坂本マツコ
	塩田喜美子	白石絹子	立川愛子　田本泰子　塚本博子
	中川敏博	中野実子	中峯邦子　村上貴志　(五十音順)

(付記) 発掘調査の実施に際しては、諸先生方より貴重な御指導御助言をいただいた。また、地元の皆様からも、多大の御協力を得た。ここに記して、深く感謝申し上げたい。

3．調査の経過 (調査日誌抄録)

5／15（水）　調査初日。準備のため、測量用の杭打ちや、草刈りなどを行う。
5／16（金）　作業用の物資を搬入する。
5／19（月）　表土剥ぎ開始。6月2日まで断続的に行う。
5／20（火）　現場にプレハブの調査事務所を建設する。

6／4（水）　B—5区遺構確認作業ならびに写真撮影を行う。下の畑で麦の収納と芋苗植えが行われる。

6／12（木）　グリッド杭打ち作業を実施する。→（6／13）

7／4（金）　国鉄線路に隣接する調査区北側の路肩が崩れた件で、保線区員が来跡。対策を協議した結果、土嚢を積むことで合意する。

7／10（木）　住居址の遺構確認作業。

7／16（水）　1号住居址調査開始。→（7／29調査終了）
甕、カマド、台石等が出土。古墳時代の住居址と推定される。

7／17（木）　2号住居址調査開始。→（8／20調査終了）
カマド、完形の壺等が出土。炭化物の量から火災をうけた住居と推定される。
古墳時代のものか。

7／23（水）　6—G，7—G区の曽畑式土器集中地点の調査を開始する。→（10／3）

7／24（木）　1．2号住居址付近のｐｉｔ群の調査を行う。

7／28（月）　1．2—B．C区の遺構検出作業および、調査開始。

8／20（水）　3—C区「塚」調査開始。→（8／29）
約1m四方の土壙墓で屈葬人骨1体が出土。なお8／29出土人骨の件で熊本北署より刑事、鑑識課員が来跡。人骨の処理は文化課にまかせるとのこと。

8／25（月）　1—A区調査。縄文晩期の土器片多数検出される。

9／1（月）　曽畑式土器片10点ほどが、盗難にあう。

9／4（木）　6箇所の試掘調査開始。

9／30（火）　6—G区中央から西寄り地点で集石が出る。

10／2（木）　三稜尖頭器取り上げ。

10／3（金）　6—D区調査開始。

10／6（月）　4～5日にかけて現場が荒らされる。

10／8（水）　B地区掘り下げ。

10／14（火）　6—D，6—G区にて旧石器調査。

10／17（金）　3号住居址調査。遺物および発掘関係用具を収蔵庫へ。

10／31（金）　4—G区ブルにより表土剥ぎ。

11／11（火）　4—C区内旧石器調査。

12／3（水）　水糸、釘撤去。

12／4（火）　埋め戻し地点を中心とする表面採集を行う。

12／5（金）　資材、遺物の撤収作業を行う。

12／25（水）　埋め戻し作業実施。作業終了。

第２節　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置

所在地　熊本市竜田町大字陳内字戸ノ上

工　区　一般国道３号熊本北バイパス第４工区

（調査地は、白川大橋の一方の橋脚部分にあたる）

２．周辺の地形

阿蘇火山の噴出物によって、外輪山西側斜面から熊本平野にかけて緩やかに広がる台地を、熊本台地（肥後台地）と呼ぶ。台地は、菊池川から木山川流域にかけての、いくつかの小台地から構成されており、そのほぼ中央に位置するのが、熊本市の東部を占める託麻台地である。

託麻台地は、およそ150～20m程の標高を持ち、外輪山の裾から熊本市方向へ約10kmにわたってなだらかな傾斜を見せている。地層は表層からローム質の火山灰土（黒色ローム層）・砂礫層（託麻砂礫層）・新期阿蘇火山噴出物からなる。土壌は、一般に保水力に乏しく水田には適さないが、台地縁辺には、八景水谷・水前寺・江津湖などの水量豊富な湧水地帯を有し、遺跡の立地には恰好の条件を備えていると言えよう。

この台地に谷を刻みつつ東西に流れるのが、阿蘇南郷谷を水源として有明海に注ぐ白川である。白川は、大津町付近から熊本市にかけて蛇行を繰り返し、台地の側面に河岸段丘を形成しながら熊本市へ流れ込む。熊本市の中心部は、白川の運ぶ多量の砂泥により発達した扇状地状の堆積物の上に立地していることになる。

さて、この白川が託麻台地を抜け平野部へと進む部分に、ほぼ東西になだらかにのびる丘陵が立田山（152m）である。この立田山の東麓の端から、白川右岸の河岸段丘面にかけて当竜田陳内遺跡は位置している。

３．調査区の地形

当遺跡の調査区域は、立田山と白川とに挟まれた白川右岸の河岸段丘の上位面に位置する。地形を概観すると、調査区のすぐ西側には、豊肥本線と国道５７号線が遺跡を区切るように平行して走り、その先に立田山の裾野が広がっている。東側および南側には急傾斜の崖面があり、蛇行する白川の流れを見下ろしている。

調査地の標高はおよそ36～38m程度で、おおまかには白川側から線路側へとゆるやかな勾配を見せている。これは、耕作の際の削平にもよるが、一部の遺物の出土状態から判断すると、原地形もおおむね同様の勾配を持っていたらしい。なお、調査地と崖下の白川の現水面との比高は、約16～18mを測る。出土遺物中の石錘や土錘の存在は、当遺跡と白川とのつながりを示唆しており、興味深い。

また遺跡の広がりは、調査地の外へも延びるものとみられるが、西側部分は鉄道線路および道路の建設の際削られ現在にいたっている。

4．遺跡の歴史的環境

竜田陳内遺跡の周辺には、各時代の遺跡が集中的に分布しており、熊本市内でも有数の遺跡群地帯を成している。詳しくは「周辺遺跡分布図」および「周辺遺跡一覧」に譲り、ここでは白川周辺の遺跡を簡単にまとめてみたい。

先ず、「旧石器時代」の遺物の発見は、数例が報告されている。立田山麓の天拝山A遺跡(註1)からはサヌカイト製のポイント、楡木遺跡(註2)の黒曜石製の細石核、そして当遺跡からも三稜尖頭器が出土するなど、旧石器時代に遡る人々の活動を、わずかながらも窺うことができる。

次に、「縄文時代」であるが、白川沿岸の河岸段丘上に遺跡が点在している。右岸では、縄文早～晩期にわたる各種の土器を出土したカブト山遺跡A，B(註3)や、縄文晩期の土器、土偶、配石遺構などが確認された竹ノ後遺跡(註4)が著名である。

一方左岸では、当遺跡のちょうど対岸にあたる位置に、縄文早～晩期にわたる多量の土器が採集された新南部遺跡群(註5)がある。そのうち、当遺跡と同じ北バイパス建設事業に関連して、すでに調査が行われた上西原遺跡(註6)では、押型文土器・塞ノ神式土器・曽畑式土器など、縄文早・前期の土器を確認している。そのほか、縄文後期の土器や、多量の土偶が出土した上南部遺跡(註7)、白川沿岸では唯一の貝塚で鐘崎式土器などを中心に出土した渡鹿貝塚(註8)、後期中葉の北久根山式土器を出土し、その標識遺跡ともなっている北久根山遺跡(註9)などが、代表的な遺跡として挙げられよう。

一般に、当遺跡周辺の白川の右岸は、立田山がすぐそばに迫り、狭隘かつ傾斜のある地形が多い。そのため、この時代の遺跡の広がりは、むしろ平坦な地形を持つ白川左岸の側に数多く認められる。

「弥生時代」の遺跡は、この白川中流域には多数分布する。周辺遺跡分布図からも分かるように、一帯は熊本市内でも有数の甕棺が集中している地帯である。例を挙げると、右岸では、人骨の残る須玖式の合口甕棺が出土した迫ノ上甕棺遺跡(註10)をはじめとして、竹ノ後甕棺群(註11)、牧鶴甕棺群(註12)などがあり、左岸でも下流の小関原遺跡(註13)、北久根山遺跡(註14)などで甕棺が出土している。また、これら中期の甕棺群に直接は対応しないが、左岸の西谷遺跡(註15)では中・後期の住居址や磨製石鏃、鉄器などが、同じく下南部遺跡(註16)では後期の住居址や磨製石鏃、石包丁などがそれぞれ出土している。

第１図　竜田陳内遺跡周辺遺跡分布図

第1表　竜田陳内遺跡周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	備考（主な出土及び採集遺物）
1	竜田陳内遺跡	熊本市竜田町陳内戸ノ上	旧石器（三稜尖頭器）縄文早前後晩期土器、古墳時代住居址等
2	下南部遺跡	熊本市下南部町下山・前畑	縄文後晩期土器、弥生～古墳時代の集落址、石包丁、磨製石鏃
3	八反田遺跡	熊本市長嶺町八反田	縄文後晩期土器、石器
4	乾原遺跡	熊本市長嶺町乾原	縄文晩期土器（御領式、黒川式）
5	迎八反田遺跡	熊本市長嶺町迎八反田居屋敷	縄文早～晩期土器（押型、曽畑、条痕ほか）
6	健軍新外遺跡	熊本市健軍町新外	縄文土器（御領式）
7	田ノ迎遺跡	熊本市保田窪本町	縄文土器
8	西原遺跡	熊本市新南部町西原	縄文土器（押型文）
9	新南部A遺跡	熊本市新南部町	縄文早～晩期土器、石器、弥生土器、須恵器、土師器、布目瓦
10	新南部B遺跡	熊本市新南部町	縄文早～奈良期の遺物
11	新南部C遺跡	熊本市新南部町	土師器、須恵器
12	新南部D遺跡	熊本市新南部町	縄文（三万田式）、弥生（黒髪式）、土師器、須恵器
13	立田口A遺跡	熊本市竜田町陳内女瀬	縄文（三万田式、御手洗式）、弥生式土器、土師器、須恵器
14	立田口B遺跡	熊本市宇留毛女瀬平	縄文後期土器
15	長興寺古墳	熊本市黒髪町上宇留毛浦山	円墳？横穴式石室
16	長興寺横穴群	熊本市黒髪町上宇留毛浦山	内部はコの字型屍床
17	宇留毛浦山第一横穴群	熊本市黒髪町上宇留毛浦山	A，B二群、Aは四基、Bは三基
18	宇留毛浦山第二横穴群	熊本市黒髪町上宇留毛浦山	基数不明、消滅
19	三ツ石遺跡	熊本市新南部町三ツ石	弥生（黒髪式）、縄文後晩・弥生の住居群
20	西谷遺跡	熊本市新南部町西谷	住居址(弥生中後期、平安)、弥生中後期土器、磨製石鏃、土師器、須恵器、刀子
21	新南部（上西原）遺跡	熊本市新南部町上西原	縄文土器、(押型文, 塞ノ神, 曽畑式)、弥生土器、土師器、須恵器、カマド付き住居址
22	宇留毛小頃橋際横穴群	熊本市黒髪町宇留毛上屋敷	玉類、直刀、刀子、馬具、鉄斧、金環、土師器、須恵器
23	宇留毛浦山火葬墓	熊本市黒髪町上宇留毛浦山	須恵壺一個、火葬骨、灰
24	つつじヶ丘横穴群	熊本市黒髪町上宇留毛浦山	土師器、須恵器、人骨
25	立田城址	熊本市黒髪町宇留毛上屋敷	中世城（立田氏居城）
26	陳内上ノ園古墳参考地	熊本市竜田町陳内上ノ園	
27	宇留毛神社内古墳	熊本市黒髪町宇留毛城床	円墳
28	立田山南麓古墳　上	熊本市黒髪町下立田	円墳、横穴式石室、石室内部に敷き石、金環、鉄鏃
29	立田山南麓古墳　下	熊本市黒髪町下立田	小型横穴式石室、須恵器、鉄鏃
30	白石古墳	熊本市黒髪町下立田白石	小型横穴式石室、須恵器、鉄片
31	カブト山A遺跡	熊本市黒髪町下立田カブト山	縄文早～前期土器（押型文中心）、石鏃、石斧、磨り石
32	カブト山B遺跡	熊本市黒髪町下立田カブト山	縄文後～晩期土器（御領式）、弥生土器、須恵器
33	宇留毛A遺跡	熊本市黒髪町宇留毛上屋敷	縄文後～晩期土器、石器
34	宇留毛B遺跡	熊本市黒髪町宇留毛浦山鶴畑・道尻	縄文晩期土器、土師器
35	小関小松山遺跡	熊本市大江町渡鹿小関原	弥生甕棺
36	小松原遺跡	熊本市大江町渡鹿小頃	縄文早前後晩期土器、弥生甕棺
37	北久根山遺跡	熊本市大江町渡鹿北久根山	縄文後晩期土器（北久根山式）、石器、弥生土器、須恵器、布目瓦
38	渡鹿貝塚	熊本市大江町渡鹿北原	縄文後期前半土器
39	辻遺跡	熊本市大江町渡鹿辻	須恵器、土師器、布目瓦
40	帯山遺跡	熊本市保田窪下山	縄文土器、石器、土師器
41	保田窪遺跡	熊本市保田窪蛇平	須恵器、土師器、布目瓦
42	南平上遺跡	熊本市大江町南平上	須恵器、土師器、布目瓦
43	大江新町遺跡	熊本市新大江一丁目	須恵器、土師器、布目瓦
44	大江背葉遺跡	熊本市大江二丁目	奈良～平安期住居址群、須恵器、土師器
45	熊高敷地遺跡	熊本市新大江一丁目	須恵器、土師器、一部縄文土器（押型文、鐘ヶ崎式、並木式）、布目瓦
46	大江東原遺跡	熊本市大江六丁目東原	須恵器、土師器
47	大江遺跡	熊本市大江三丁目	須恵器、土師器
48	大江白川遺跡	熊本市大江一丁目	縄文早～前期土器、弥生甕棺
49	子飼遺跡	熊本市東子飼町	縄文後期土器
50	上河原遺跡	熊本市黒髪町上河原	須玖式甕棺
51	渡鹿北原遺跡	熊本市大江町渡鹿北原	弥生甕棺、須恵器
52	桜山中学校遺跡	熊本市下立田	須恵器
53	小峰遺跡	熊本市黒髪町小峰	縄文後晩期土器（御領式）、須恵器、土師器、布目瓦
54	黒髪町遺跡	熊本市黒髪町坪井	弥生甕棺、石器、須恵器、土師器
55	立田山南中腹遺跡	熊本市黒髪町下立田	土師器
56	立田山山頂遺跡	熊本市黒髪町下立田	須恵器、土師器
57	松崎遺跡	熊本市清水町松橋屋敷上	弥生甕館
58	亀井遺跡	熊本市清水町亀井天神上	縄文土器
59	万石遺跡	熊本市清水町万石茶屋原	縄文土器
60	万石茶山古墳	熊本市清水町万石茶山	横穴式石室
61	万石茶山遺跡	熊本市清水町万石茶山	夜臼式、弥生土器
62	秣野遺跡	熊本市上立田秣野	縄文土器、須恵器片、土師器
63	緑ヶ丘遺跡	熊本市竜田町陳内緑ケ丘	縄文早前期土器、石器（磨製、打製石斧、石鏃）
64	上ノ園A遺跡	熊本市竜田町陳内上ノ園	縄文後期土器（御手洗A式）、弥生土器、方形周溝墓
65	上ノ園B遺跡	熊本市竜田町陳内上ノ園	縄文土器（押型）及び晩期土期、弥生中後期土器、土師器、須恵器
66	長遥寺窯跡	熊本市竜田町陳内長遥寺	須恵器窯跡
67	三ノ宮遺跡	熊本市竜田町上立田宮脇	縄文晩期土器
68	牧鶴古墳群	熊本市竜田町上立田中牧霊	数基の小円墳
69	牧鶴甕棺群	熊本市竜田町上立田中牧霊	
70	牧鶴石棺	熊本市竜田町上立田牧鶴	弥生土器、須恵器混入
71	王田遺跡	熊本市上南部町王田	縄文後晩期土器、須恵器、土師器、石器
72	神園遺跡	熊本市長嶺町神西原	縄文晩期土器、須恵器、土師器、石鏃
73	上南部遺跡	熊本市上南部町	縄文後晩期土器（烏井原式、御領式）多量の打製石斧、土偶
74	芭蕉遺跡	熊本市竜田町上立田芭蕉鶴	
75	竹ノ後甕棺群	熊本市竜田町上立田竹ノ後	合口甕棺、土偶、配石
76	竹ノ後遺跡	熊本市竜田町上立田竹ノ後	縄文後期土器、石器
77	北上A遺跡	熊本市石原町平	縄文晩期土器、打製石器、土師器
78	北上B遺跡	熊本市石原町平	縄文晩期土器、打製石器、土師器
79	堂ノ前屋敷窯跡	熊本市竜田町上立田堂ノ前屋敷	須恵器窯跡？
80	緑ケ丘・山ノ神遺跡	熊本市竜田町上立田緑ケ丘	縄文土器、石器
81	迫ノ上甕棺	熊本市竜田町上立田迫ノ上	甕棺、人骨
82	迫ノ上遺跡	熊本市竜田町上立田迫ノ上	甕棺、人骨
83	天拝山A遺跡	熊本市清水町楡木天拝山	サヌカイト製ポイント、縄文早前期土器、石器、弥生土器片
84	天拝山B遺跡	熊本市清水町楡木天拝山	同上
85	庵ノ前遺跡	熊本市清水町楡木庵ノ前	縄文土器（押型文）、甕棺（須玖式）
86	堂ノ前遺跡	熊本市清水町楡木堂ノ前	須恵器窯跡
87	一丁歪遺跡	熊本市清水町楡木楠一丁目	縄文晩期土器、石器
88	岩倉山中腹遺跡	熊本市清水町鬼谷岩倉山	散布地
89	楡木遺跡	熊本市清水町楡木堂ノ前	黒曜石製細石核、縄文早前晩期土器、弥生甕棺
90	八景水谷甕棺群	熊本市清水町八景水谷窟	人骨
91	八景水谷遺跡	熊本市清水町八景水谷窟	甕棺群、古塔碑
92	鶴羽田遺跡	飽託郡北部町鶴羽田一の口・鶴羽田	縄文後晩期土器、須恵器、土師器
93	向島遺跡	菊池群西合志町須屋下屋敷	甕棺
94	梨の木遺跡	菊池郡西合志町須屋梨の木	甕棺
95	宿の山遺跡	菊池群西合志町須屋宿の山	合口甕棺、土師器

第２節　遺跡の位置と環境

「古墳時代」になると周辺の遺跡は減少するが、後期頃より立田山麓から白川右岸にかけて、膨大な数の横穴群が築かれるようになる。これは、比較的に加工のしやすい凝灰岩の崖面が立田山の周辺に多く存在するためで、現在でも道路沿いの崖面に、これらの横穴の開口部分をしばしばみかけることがある。白川へ向けて口を開く宇留毛小碩橋際横穴群(註17)を始め、宇留毛浦山横穴群(註18)、つつじケ丘横穴群(註19)など、周辺一帯が一大横穴群地帯を形成している。ただ、これらの古墳に対応する住居址群は現在まではあまり検出されておらず、わずかに下南部遺跡(註20)や当竜田陳内遺跡の調査などで、カマド付き住居址を確認している程度にすぎない。

以上簡単にまとめてみたが、時代がくだって平安・奈良期においても布目瓦などの遺物が周辺の遺跡からしばしば出土するし、前述の西谷遺跡などでは平安期の住居址も確認されている。また中世には、立田山の一角に中世城が築かれ、さらに近世にも「二里木」などの地名が示すように、豊後へ抜ける往還である豊後街道が通るなど、各時代において人々の生活の痕跡を残している。

現在の遺跡周辺の様子は、立田山との境をなすかのように、西側を豊肥本線と国道57号線とが平行して走り、特に国道57号線では交通量の増加にともなう交通混雑が問題となっている。またそれと同時に、この周辺では、熊本市の発展に伴う宅地化が進み、畑作中心の農業は駆逐され、急速に昔の面影を失いつつあるのが現状である。　（丸山）

註1.2.平岡勝昭「熊本県発見の無土器文化の一例」『熊本史学第19・20号』昭和35年

註3.4.10.11.12.17.18.19.『熊本市北部地区文化財調査報告書』昭和44年

註5.13.『熊本市東部地区文化財調査報告書』昭和46年

註6.平岡勝昭ほか『新南部・潤野遺跡』昭和61年

註7.富田紘一「上南部Ａ地点発掘報告」『熊本市内埋蔵文化財発掘調査報告書』昭和54年

註8.9.14.　富田紘一ほか『渡鹿遺跡群発掘調査概報』昭和48年

註15.21.　浦田信智ほか『西谷遺跡』昭和60年

註16.20.　大城康雄・廣瀬正照『下南部遺跡発掘調査報告書』昭和53年

第３節　発掘調査の概要

１．調査方法および調査区の設定

本調査に先立ち、昭和61年３月１日から同31日まで、予定路線内に合計13本のトレンチ（溝）を設定して行った試掘調査では、住居址の一部、押型文土器や曽畑式土器を中心とする縄文式土器、各種の石器などの遺構・遺物を確認した。本調査ではこの試掘調査の結果を踏まえ、調査区の設定を行った。（第４図）その結果、遺跡に該当する工事予定地約6,380㎡の内、調査対象面積は、約3,550㎡となる。

本調査では、最初に重機で表土（第Ⅰ層）を剥いだあと、調査区全体を道路建設の中心線（建設省道路杭）を基準として、10m四方のグリッド（調査区画）に分割した。グリッドの名称に関しては、道路の中心線に沿う側を数字で、直交する側をアルファベットで表している。

さて発掘調査に際しては、ブリッジ（土層観察用畦）を適宜残しながら、グリッド毎に一層ずつ分層し、掘り下げて行く方法をとった。具体的には、包含層に達したところで清掃を行い、遺構を確認しながら土層を剥ぐのを繰り返すという手順となる。なおブリッジは、土層断面を実測した後で取り外した。

調査を行った層位は、全調査区を、第Ⅲ層ないし第Ⅳ層（縄文前期）まで下げたほか、包含層の残りが良く、遺物の出土が予想された次のグリッドの一部では、第Ⅳないし第Ⅴ層(縄文早期)まで掘り下げた。（１－Ａ，５－Ｃ，６－Ｂ，６－Ｃ，７－Ｂ，７－Ｃ，８－Ｃ）

また調査途中の10月２日、旧石器時代の三稜尖頭器が一点出土したことから、次のグリッドの一部にはトレンチを入れ、旧石器調査を行うこととし、第Ⅶ層（旧石期時代）までを調査の対象とした。（２－Ａ，６－Ｄ，６－Ｇ，７－Ｂ，７－Ｃ）ただし、これらのトレンチからは、遺物は確認されなかった。

発掘調査は、昭和61年５月15日から同12月25日までの約８ケ月間にわたって行われ、出土した遺物の整理および報告書の作成は、昭和62年度に、熊本県文化財収蔵庫において実施した。

（丸山）

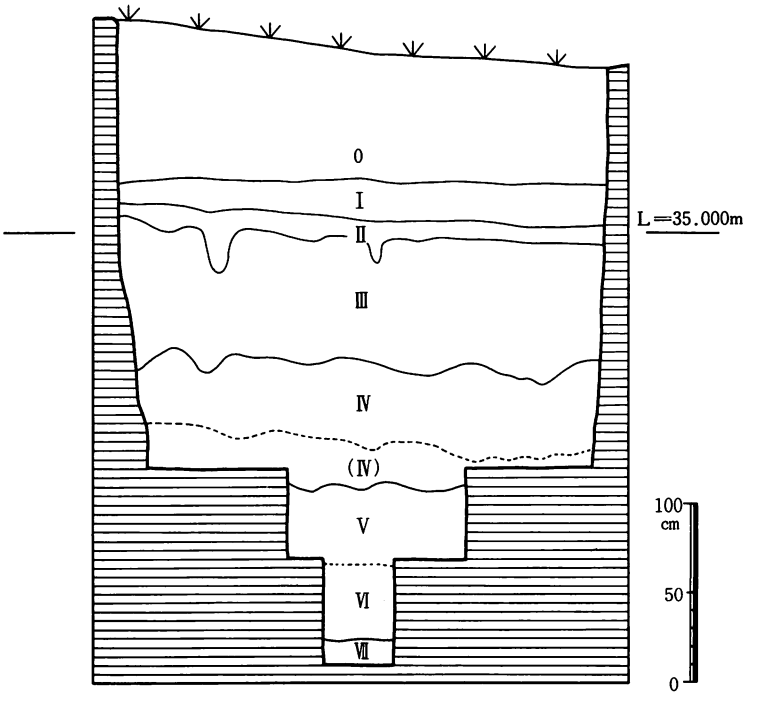
第２図　遺跡図・グリッド図

2．遺跡の基本層位

熊本市周辺の発掘調査での遺構検出作業は、黒色や黒褐色の表土を排土し、あらわれてくる黄褐色の面を清掃して行うことが多い。自然的であれ、人為的であれ色調の変化を観察し易いことがその理由とできる。そしてこの層は近年「アカホヤ」及び土壌化されたものと認識されてきている。これは阿蘇外輪山一帯では10cm内外で整然とした帯状のオレンジ層で見ることができる。この地域での最も良い堆積状態と見え、本来的な姿を示しているものと理解しているものであるが、熊本市周辺ではその姿が消えてしまい汚れ、乱れた状態を示している。この遺跡では第Ⅲ層がそれに当たるものであるが、約30cmと厚く、汚れた黄褐色と表現できようか。「土壌化の進んだアカホヤ」とも呼べようか。第Ⅳ層はやや粘質を有する黒褐色土層であり、その分離は容易であるが、その境目付近は第Ⅲ層の輝きが強く見れる。4～5cmぐらいの逆に濁りの少ない土塊を認めることができるが、これが熊本市周辺で僅かに止まる「アカホヤ」の純な状況である。そうすれば、この部分以外の第Ⅲ層は「土壌化」の進んだところの土層であろうか。特に阿蘇南郷谷地域を歩くと、「アカホヤ」の上に「汚れ・乱れ」の少ない黄褐色の厚い土層に出会うことが多い。「アカホヤ」の直後かに堆積した阿蘇火山起源の黄褐色をした火山灰が存在するのではとの疑問を持っている。究明を待ちたい。

第Ⅳ層が本来的には「黒ニガ」とされるもの。第Ⅳ'層は漸移層で、第Ⅴ層～Ⅶ層が「ニガシロ」と呼ぶ土で、中途に「AT火山ガラス」を含む層で、「ソフト・ハードローム」に相当する。そして第Ⅷ層が「トスローム」にあたるものと判断できる。やがては、礫層も現れてくるものと予想される。

（江本）



第3図　基本層位図

３．出土状況

竜田陳内遺跡で出土した、時代毎の主要な遺物・遺構及び、それぞれの出土地点は、概略次の通りである。出土地点については、第４図「遺構配置図」に示している。

「旧石器時代」の遺物は、２点が出土している。そのうち、三稜尖頭器は、調査区西側の６―Ｇグリッド・Ⅲ層からの出土である。このため、その後旧石器調査トレンチ（Ｐ．Ｔ）を設定し、調査を行っている。もう１点の黒曜石製のスクレーパーは表採である。

「縄文時代早期」の遺物は、調査区の東側に沿った部分を中心に、20点ほどが出土している。押型文や撚糸文土器を中心とした出土である。

「縄文時代前期」の遺構としては、調査区西側の６―Ｇグリッド・Ⅲ層下部から集石遺構が確認された。拳や人頭大の円礫で構成された、100㎝×55㎝程度の規模の集石で、いかなる意図で製作・使用されたものか不明な遺構である。

次に遺物では、轟Ｂ式土器が６―Ｂグリッド・Ⅲ層下層～Ⅳ層上層で、早期や後・晩期土器と混在するかたちで、３点出土した。また、これら土器とは出土地点が異なり、層位的な前後関係は不明であるが、約850点にのぼる曽畑式土器が、調査区西側の６―Ｇグリッド・Ⅲ層から集中的に出土している。これは、調査区が全体的に削平を受けている中で、６―Ｇグリッドが、縄文期の包含層であるⅢ層の残りが比較的に良かったためと考えられる。この曽畑式土器の分布は、更に西側に広がるものと思われるが、調査区域外のため調査は行っていない。

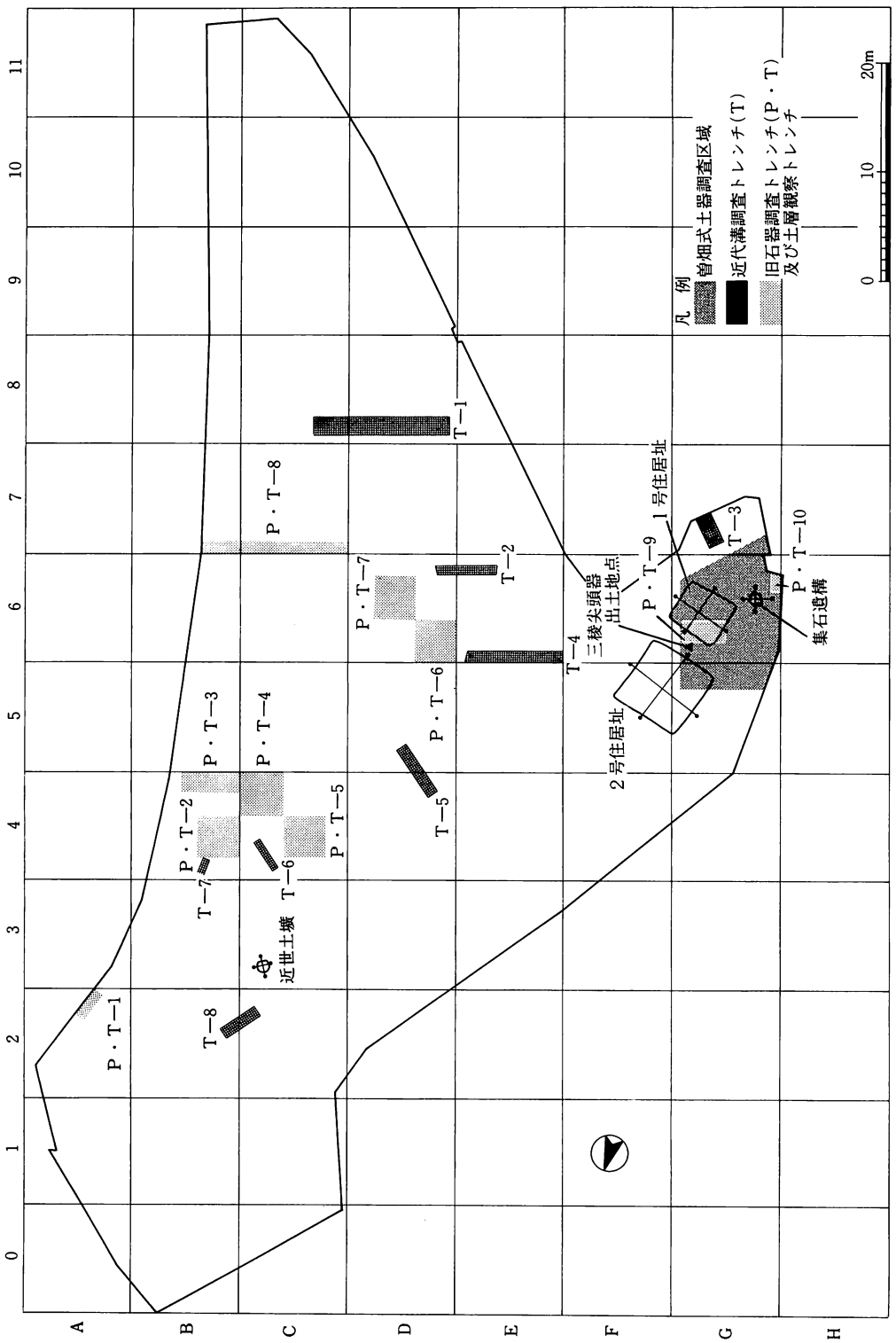
「縄文時代後・晩期」に相当する遺物は、土器を中心に細片を含めて500点以上が出土し、当遺跡を性格付けている。検出された土器は、御領式土器を中心に、山の寺式、夜臼式土器が挙げられる。出土地点は、１―Ａ・２―Ａ・５―Ｃ・６―Ｃグリッドの調査区東側に沿った地域と、前述の曽畑式土器が集中的に検出された６―Ｇグリッド付近であり、層位的にはⅡ層及び、Ⅲ層最上部が該当する。土器以外の遺物としては、石器が石斧20点（打製16，磨製4）、石鏃20点などを中心に、石匙、石錘、摺り石などが数点ずつ出土しているほか、時期は特定できないが玉類、土製品なども数点ずつ確認されている。

「弥生時代」の遺物は、２点のみの出土である。弥生式土器片が１点、磨製石鏃が１点であり、遺構の存在は確認されていない。

「古墳時代」の遺構は、方形の竈付き竪穴住居址が大小２基検出されている。検出地点は、それぞれ調査区西側の５―Ｆ・Ｇグリッド、６―Ｇグリッドであり、１号住居址は先の曽畑式土器の集中地点の包含層の上位に位置する。住居址からは、完形の壺などが出土した。

「近世」のものと推定される遺構は、土壙が一基確認された。土壙内には、副葬品は伴わなかったものの、一体分の人骨が出土した。遺物は、江戸時代の銭貨が２枚出土したのみである。

その他、調査区の中程を南北に縦断するかたちで、溝の存在が確認されたが、トレンチ（Ｔ）による調査の結果、「近代」から遡らない程度の年代の溝と判明した。　　（丸山）

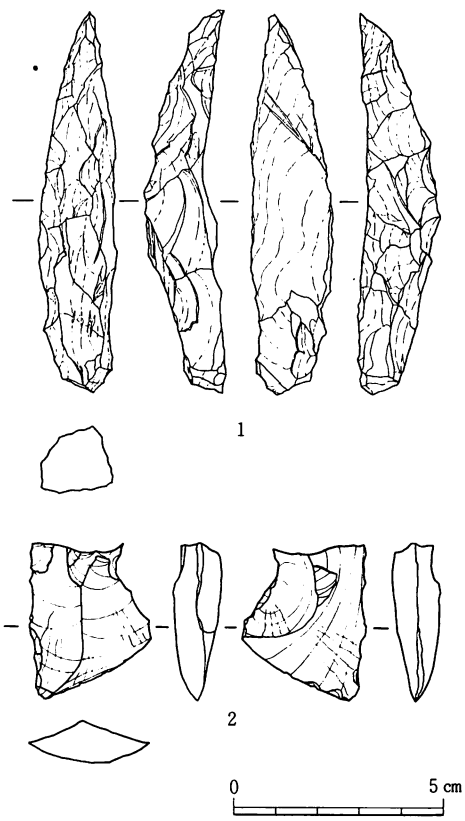

凡　例
曽畑式土器調査区域
近代溝調査トレンチ(T)
旧石器調査トレンチ(P・T)
及び土層観察トレンチ
0
10
20m
A
B
C
D
E
F
G
H
0
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
P・T—1
T—8
P・T—2
T—7
P・T—3
T—6
近世土壙
P・T—4
P・T—5
T—5
P・T—6
P・T—7
T—1
P・T—8
T—2
T—4
三稜尖頭器
出土地点
2号住居址
P・T—9
1号住居址
T—3
P・T—10
集石遺構

第4図　遺構配置図

第Ⅱ章　遺構・遺物

第１節　旧石器時代

熊本県地域においては最近、旧石器時代の遺跡発見や発掘調査が多くなり、編年作業や各時期の石器群様相の追求が行われている。遺跡の分布を地域的に見ると、阿蘇や球磨地方に遺跡が集中する傾向が高く、平野部への分布の拡がりを把握することや、菊池川、白川、緑川、球磨川などの大きな河川流域ごとの内容把握が望まれている。本遺跡の発掘調査では縄文前・後・晩期や古墳時代の遺構・遺物を主に調査が進められてきたが、途中三稜尖頭器の出土があり、白川流域における貴重な遺跡となるに違いなく、急遽、包含層の探査を行っている。熊本市地域は阿蘇火口からの距離が遠くなり、火山灰層も薄くなるが、後期旧石器時代の包含層は第Ⅴ～Ⅶ層に想定される。県内での三稜尖頭器の出土は10カ所程が数えられ、阿蘇郡小国町下城遺跡が最も著名でその関連も問われるものである。しかし、トレンチ調査の結果、明確に石器と見れる遺物の出土はなく、包含層も確認ができていない。将来の調査を待たねばならないこととなったが、以下、報告する２点の石器はこの地域に恵まれた遺跡が確実に所在することを述べてくれよう。さて、三稜尖頭器（１）は第Ⅲ層からの出土で本来的でない。断口はほぼ三角形で、二面に加工を施している。主要剥離面は素材が横長剥片であることを示している。二面の加工は主要剥離面からや、加工面からと規則性に乏しい。明らかな基部調整は主要剥離面に及び、鋭い先端の形成とともに端正な形状に仕上げている。なお、石材は青白褐色を呈するチャートと見れる。（２）は一部に二次加工や使用痕の見れる石器である。表採されたものであるが、三稜尖頭器と時期を同じくするものと思える。石材は良質の黒曜石で鈍い光沢である。計測値は以下の通り（１．長さ89.3㎜幅19.0㎜厚さ19.8㎜重量25.32ｇ）（２．長さ37.0㎜幅29.6㎜厚さ11.3㎜重量8.95ｇ）



第５図　旧石器実測図

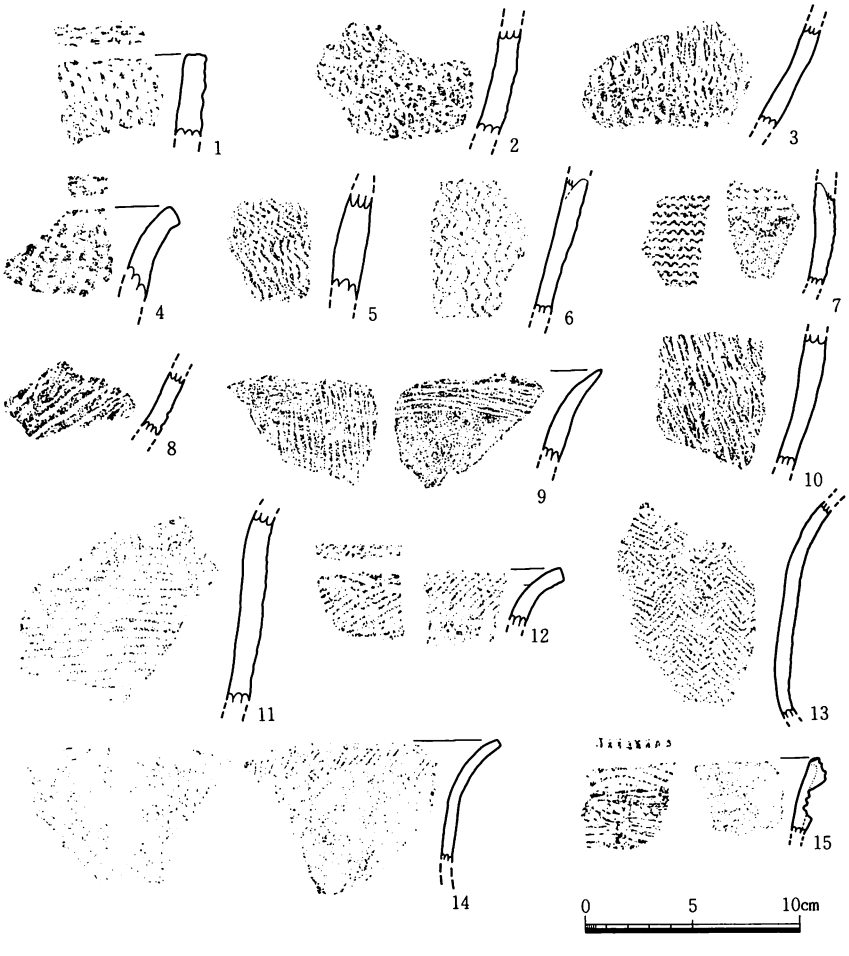
（江本）

第２節　縄文時代

１．早期（第６図）

本遺跡から出土した、縄文時代早期とされる土器は20点を数える。楕円押型文土器（１～３）、山形押型文土器（４～７）、撚糸文土器（８～10）、条痕土器(11)、縄文土器(12)、山形押型文の手向山式土器(13, 14)、所属不明土器(15)、の口縁部・胴部片である。分布を見ると、調査区の東側に沿った地域に集中している。さらに、幾分か削平の少ない東側の調査区域外に分布が広がると思われる。これらの土器は、（７）を除き深鉢型の器形であろう。いずれも外傾し、直口・外反する口縁部を持つ。（７）は内弯気味に立ち上がり直口する口縁を持つ浅鉢型の器形であろう。(13, 14)は胴部が強く屈曲した後、内弯しながら外反する口縁部を持つ典型的な手向山式土器である。胎土は似かよい、長石、石英、角閃石が含まれる。色調は、(13, 14)が灰黄色で、あとは黄褐色ないし明黄褐色を呈している。そして、内器面はすべてナデ調整を施している。(15)は平拵式に類似する。

（平井）



第６図　縄文早期土器実測図

２．前期

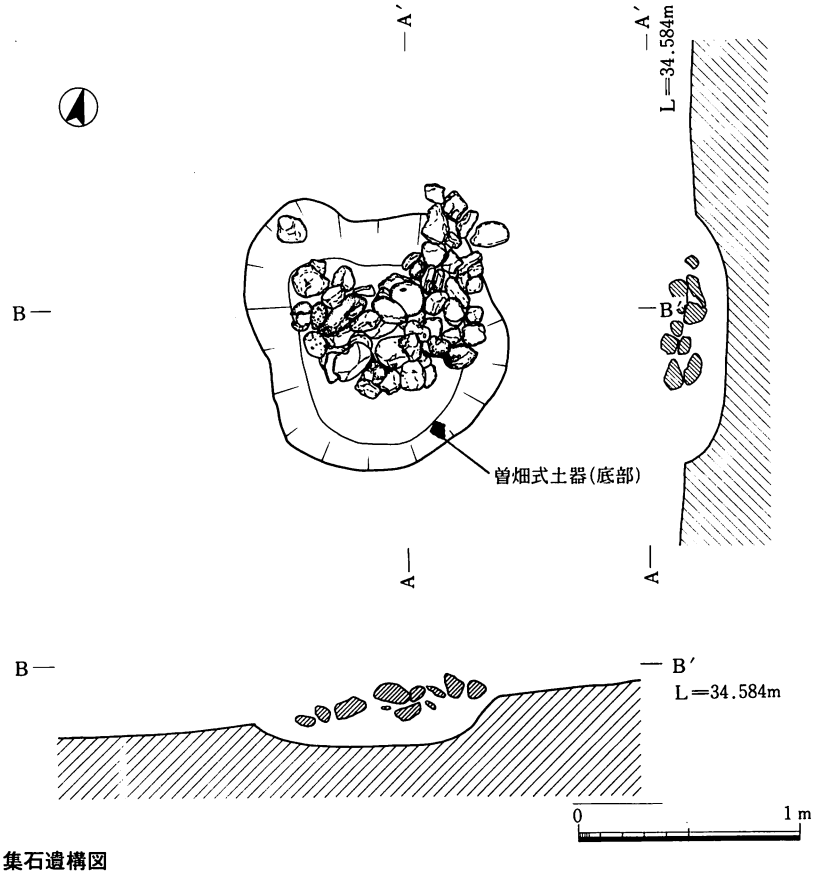
(1)遺構（集石遺構第７図）

集石遺構が６－ＧグリッドのⅢ層下部で１基検出された。皿状土壙の中に熱を受けて、赤変したりヒビの入った、拳大や人頭大の円礫やその破砕礫で構成され、三日月状(長軸100cm，短軸55cm）を呈する。この形状は本来的な、北四半部を欠くものか不明である。集石遺構内の断面形態は平らで、凹みが見られず、配石も不明である。石の配列については、何ら規則的なものは見出せなかった。

土壙の埋土は分層できず、褐色土であった。遺構を構成する石材には加熱を受けた痕跡が見られるが、焼土・炭化物は認められなかった。

また、土壙の東南部で、曽畑式土器の底部片１点（第26図154)が出土している。

この集石のある６－Ｇグリッド一帯の第Ⅲ層には、集石と同じ赤変や破砕した礫が多量に分布し、遺物（土器・石器）と同じ分布を示した。(第10～15図）熱を受けない自然石も幾分含まれるが、殆んどが集石を構成するものと同質で、大きさも似かよい、大きなものは丸い河原石が多い。同じような集石を構成した礫と思われ、他に遺構が存在した可能性がある。　　（平井）



第７図　集石遺構図

⑵遺物

1）轟式土器　（第8図）

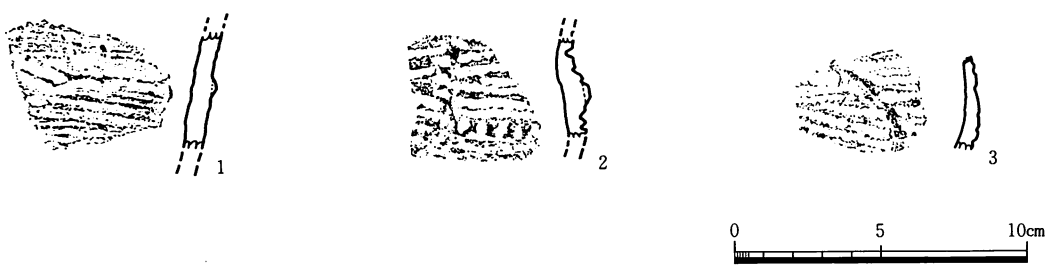
轟式土器が3点出土した。縄文時代前期の前半に位置づけられる、轟B式の範疇に入るものである。これら土器の分布は、調査区東側の6－Bグリット出土であり、出土層位はⅢ層下層とⅣ層上層であり、前述の縄文時代早期の土器と縄文時代後･晩期の細片と混在するかたちで出土した。

（1）は口縁部に貼付隆帯を巡らした､口唇部を欠く轟B－1式の口縁部片と思われる。一条の隆帯しか窺えないが、おそらく隆帯間隔が広く隆帯数の少ないものであろう。隆帯は外面に粘土帯を貼り付け、指でつまみ隆帯をつくっている。隆帯の断面は山形を呈する。内外器面ともハイガイによると思われる条痕が窺える。胎土には砂粒や角閃石を多く含み、色調は外面が灰褐色、内器面黄褐色を呈し、器壁厚は7㎜を測る。

（2）はB－3類①に相当すると判断した。胴部が張り､一旦頸部でしまって、外開きになる大きな口縁部の付く器形を持つ胴上部片と思われる。つくり出し隆帯のモチーフは曲線を描き、その隆帯には刻目を施し、隆帯のあいだを押引き刺突で充填している。内面にハイガイによる条痕が残る。器壁は4㎜と薄い。胎土は長石・石英・角閃石を多く含み、やや粗めだが焼成は良好である。色調は暗黄褐色を呈している。

（3）も（2）と同じ胴張の器形の胴部片であろう。孤状にモチーフされ、強調された貼付隆帯の間を先端の鋭い棒状工具で強く押引刺突を施している。内面には横位の貝殻条痕調整がみられ、その後で弱いナデを施している。胎土は長石等の砂粒を含み、（2）に比べ緻密である。焼成は良好で、色調は黒褐色を呈する。

本調査で、遺物の中心となる曽畑式土器に先行すると言われる轟B式系土器がわずかながら出土した。層序的には、後・晩期土器の層位分布より下部で、密度は薄いが早期土器と混在する形で出土している。しかし、曽畑式土器の分布が調査区西端に限られるため、曽畑式土器との層位的な前後関係は判断できなかった。　（平井）



第8図　轟式土器実測図

２）曽畑式土器　（第16図～26図）

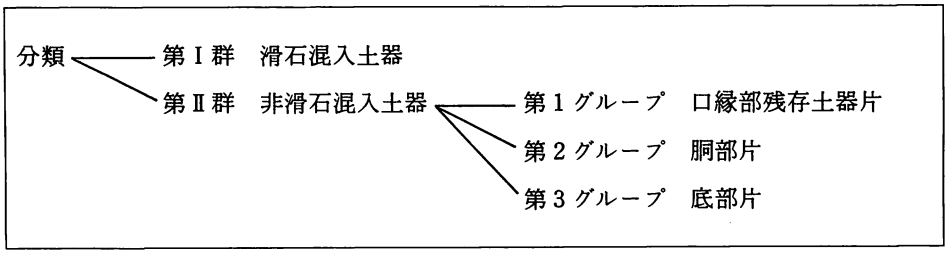
〔曽畑式土器の検出状況〕

当遺跡の調査において検出した、沈線文を特徴とする曽畑式土器は、細片も含めると850 点を数える。この土器群の分布のおおまかな特徴は、⑴調査区西端の６―G，７―Gグリッド一帯（検出面積約110㎡）に集中し、他の調査区域には全く認められないこと、⑵遺跡の基本層位で示す第Ⅲ層（アカホヤ土壌化層）に集中しており、最下部からは全く出土していないことなどが挙げられる。

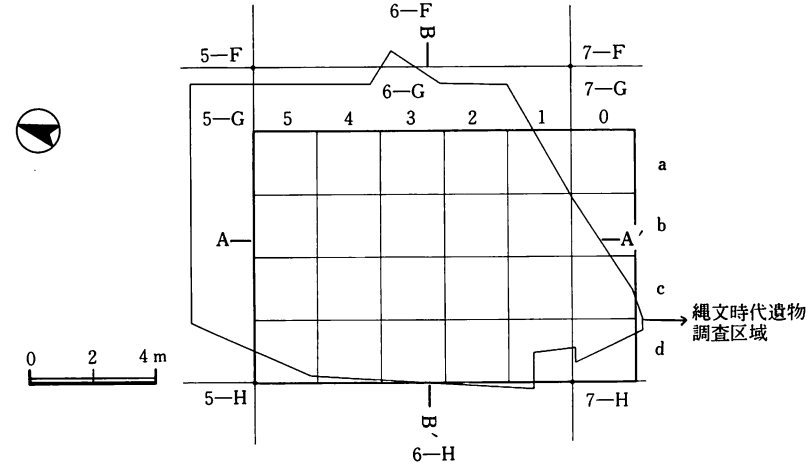
この第Ⅲ層は、第９図の土層断面図（A―A’断面，B―B’断面）で示されるように、北西側に緩やかな傾斜があり、西側の調査区境界線では厚さ60～80㎝を測る。第Ⅲ層自体の分層は行っていない。第10～15図に曽畑式土器を中心とする縄文時代遺物の平面分布図および、断面分布図を示した。それによると、第Ⅲ層の傾斜に沿った遺物の分布が見られ、６―G区の東側地区では、後世の住居址等による削平があり、曽畑式土器は出土していない。一方、調査区西側は遺物の分布密度が高い。ここでの第Ⅲ層は北西に傾斜し、次第に厚さを増しており、本来的である。この傾斜に沿って、西側の調査区域外にも遺物の分布が広がると思われる。多量の礫群も曽畑式土器と同じ分布傾向を示した。また６―G区北西部では、後・晩期土器を主に含む第Ⅱ層を確認できた。これらの土器は、第Ⅲ層にもかなり含まれるが、細片が多く、本来的には曽畑式土器群より上層に位置すると判断できる。またこの第Ⅱ層からは、石鏃・石斧・摺り石などの石器も出土している。

〔曽畑式土器の分類〕

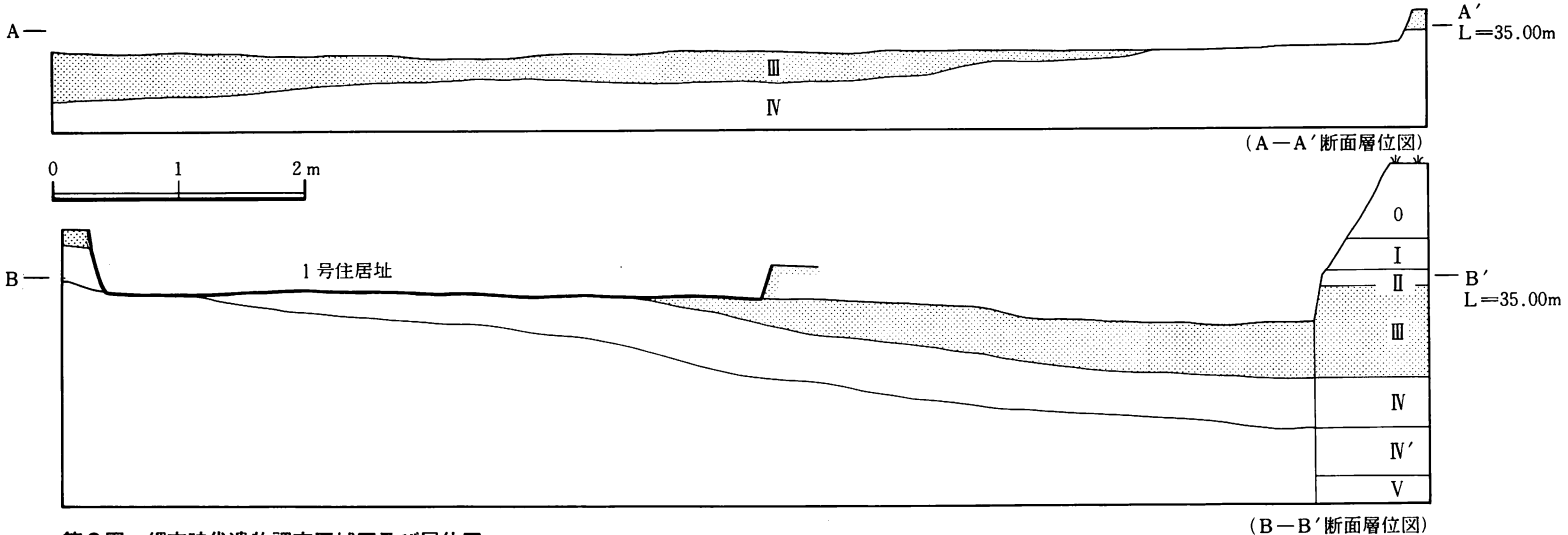
次に土器の分類であるが、調査で得られた土器のうち、文様・器種・部位の判別が可能なものの中から160点を、滑石の混入の有無により２群に大別した。さらに第２群においては、土器の残存部位毎に便宜的に３グループに分け、それぞれのグループごとに、文様構成や施文技法の違いをもとに細分し、当遺跡出土の曽畑式土器の位置づけを試みることにした。分類は次の通りである。



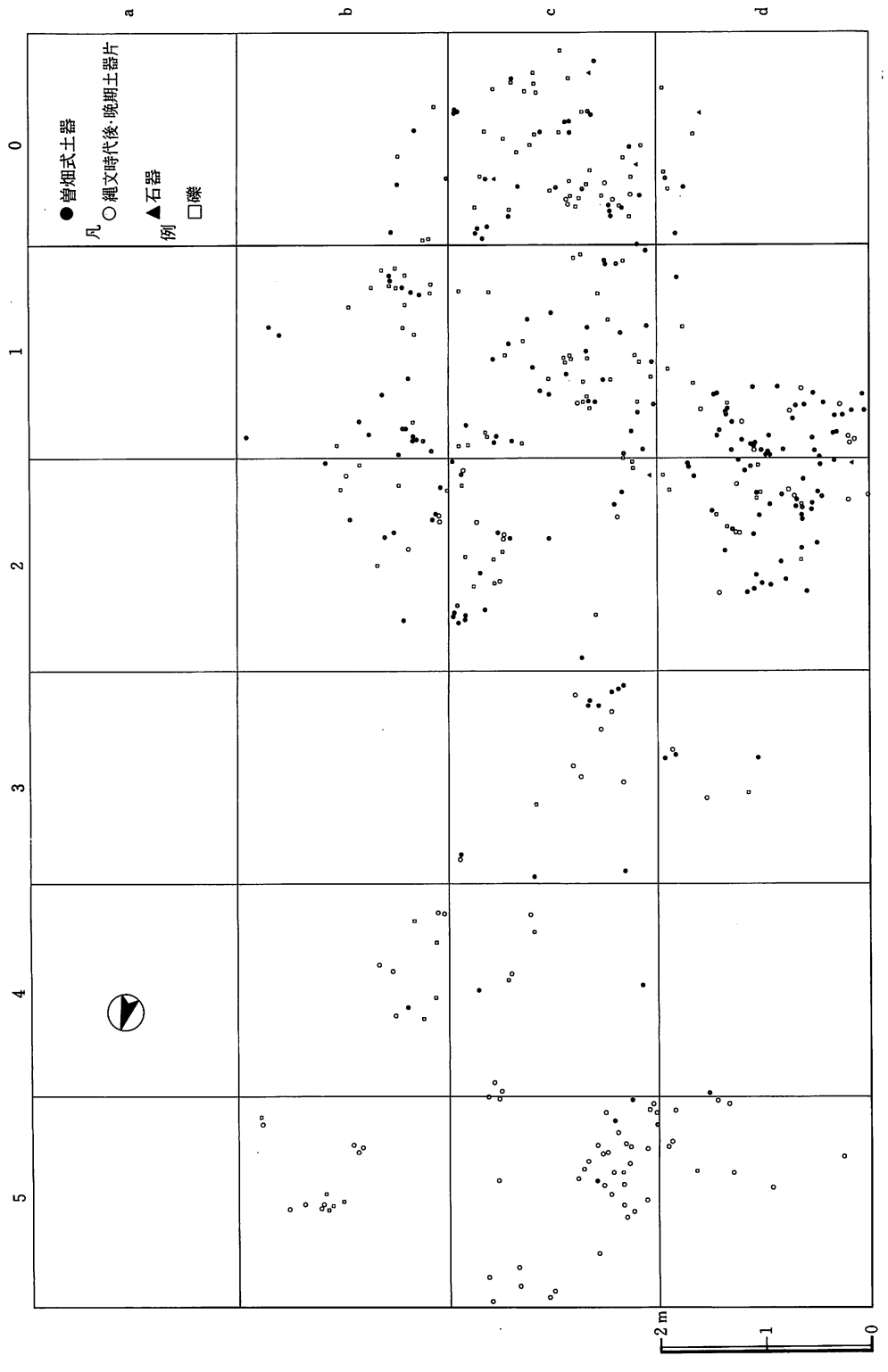
なお、出土した850点の土器のうち、図版（第16～26図）及び観察表（第２～４表）には160点を掲載した。



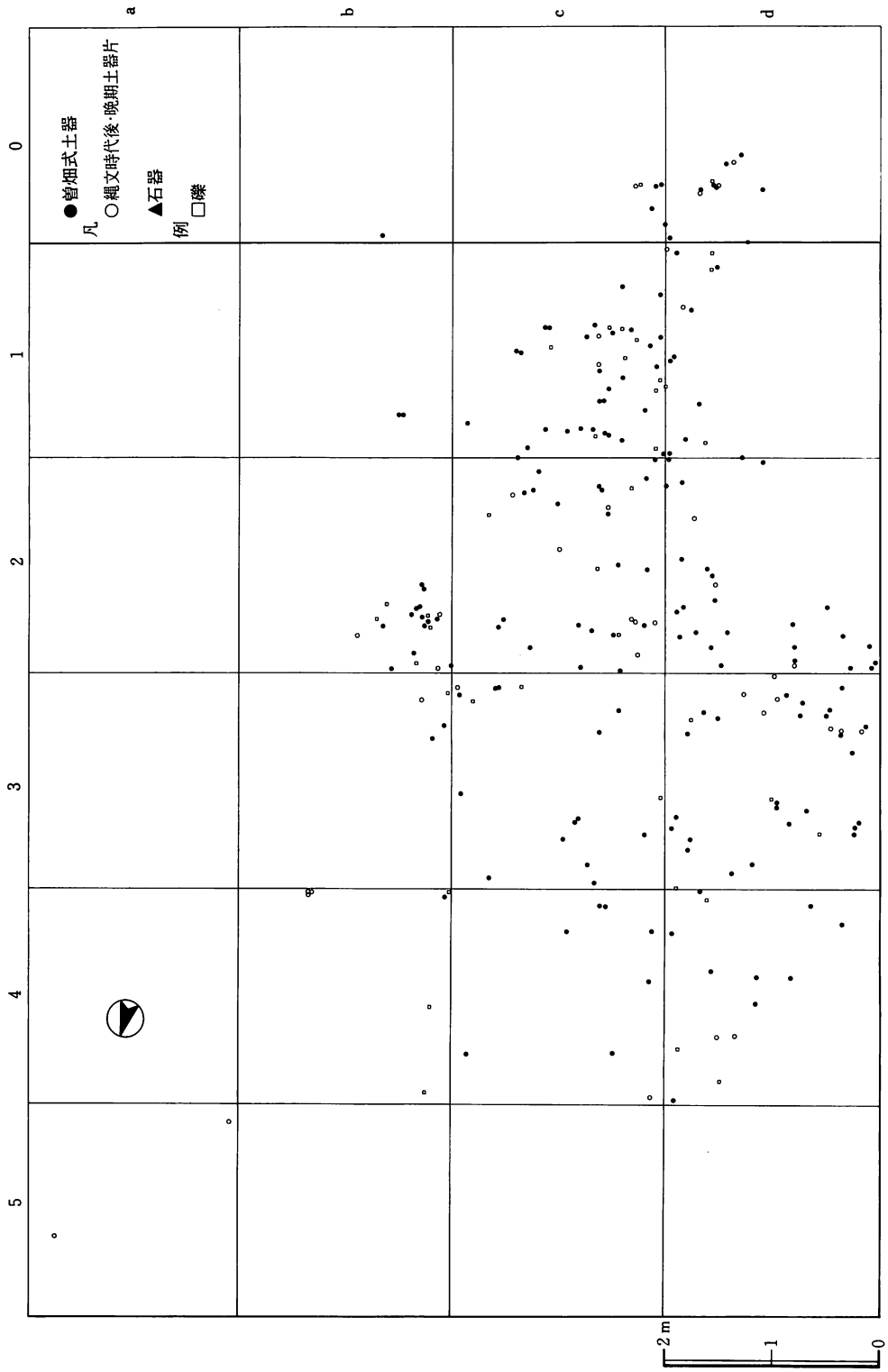
注．第10図～第15図は、縄文時代遺物の平面分布図（第10図～第13図）、断面分布図（第14図・第15図）である。
縄文時代の遺物包含層（第Ⅲ層）は、(1)上位、(2)中位、(3)下位に分けて調査しており、上位から順に分布図①、②、③にそれぞれ示している。



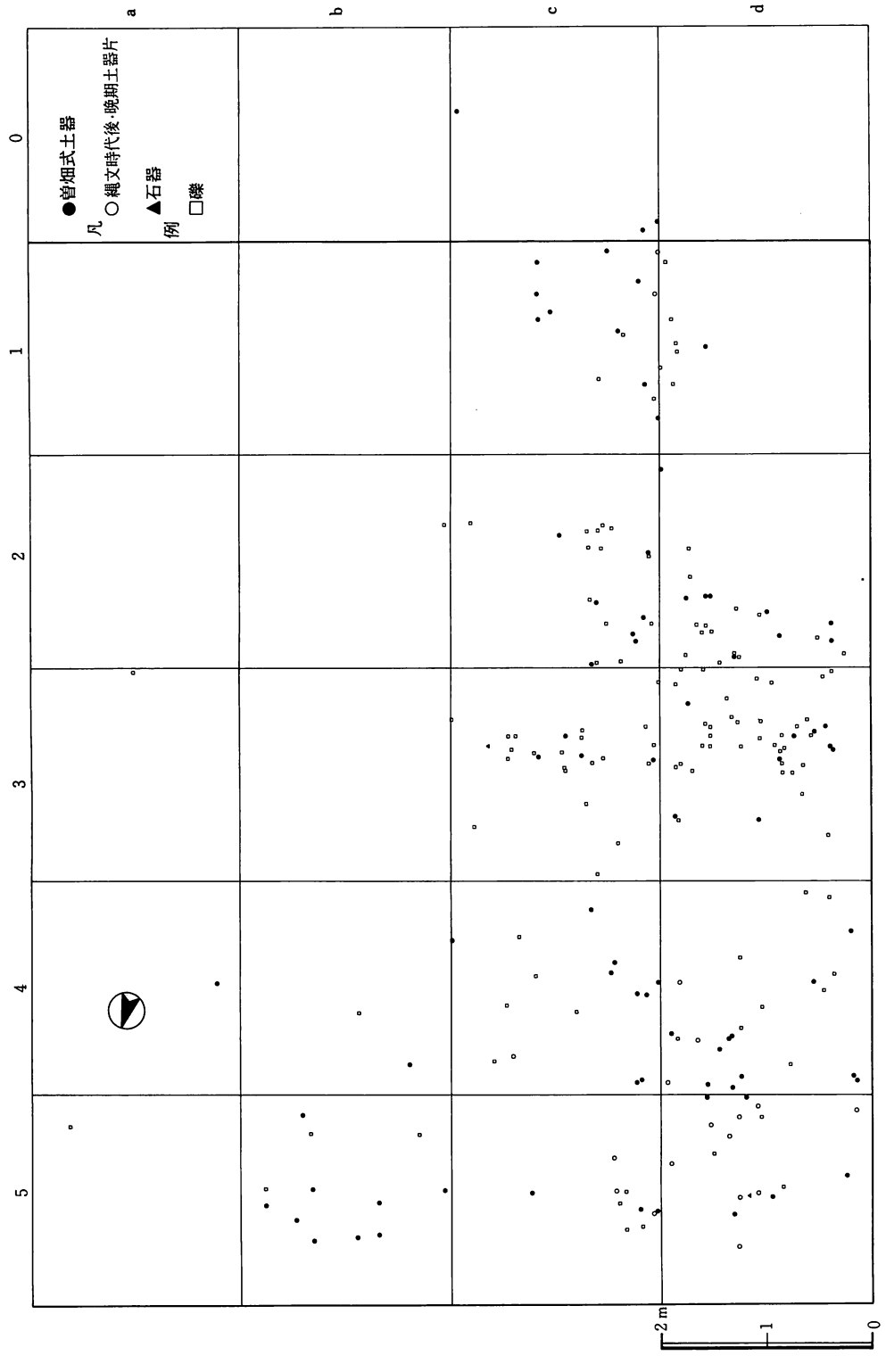
第９図　縄文時代遺物調査区域図及び層位図



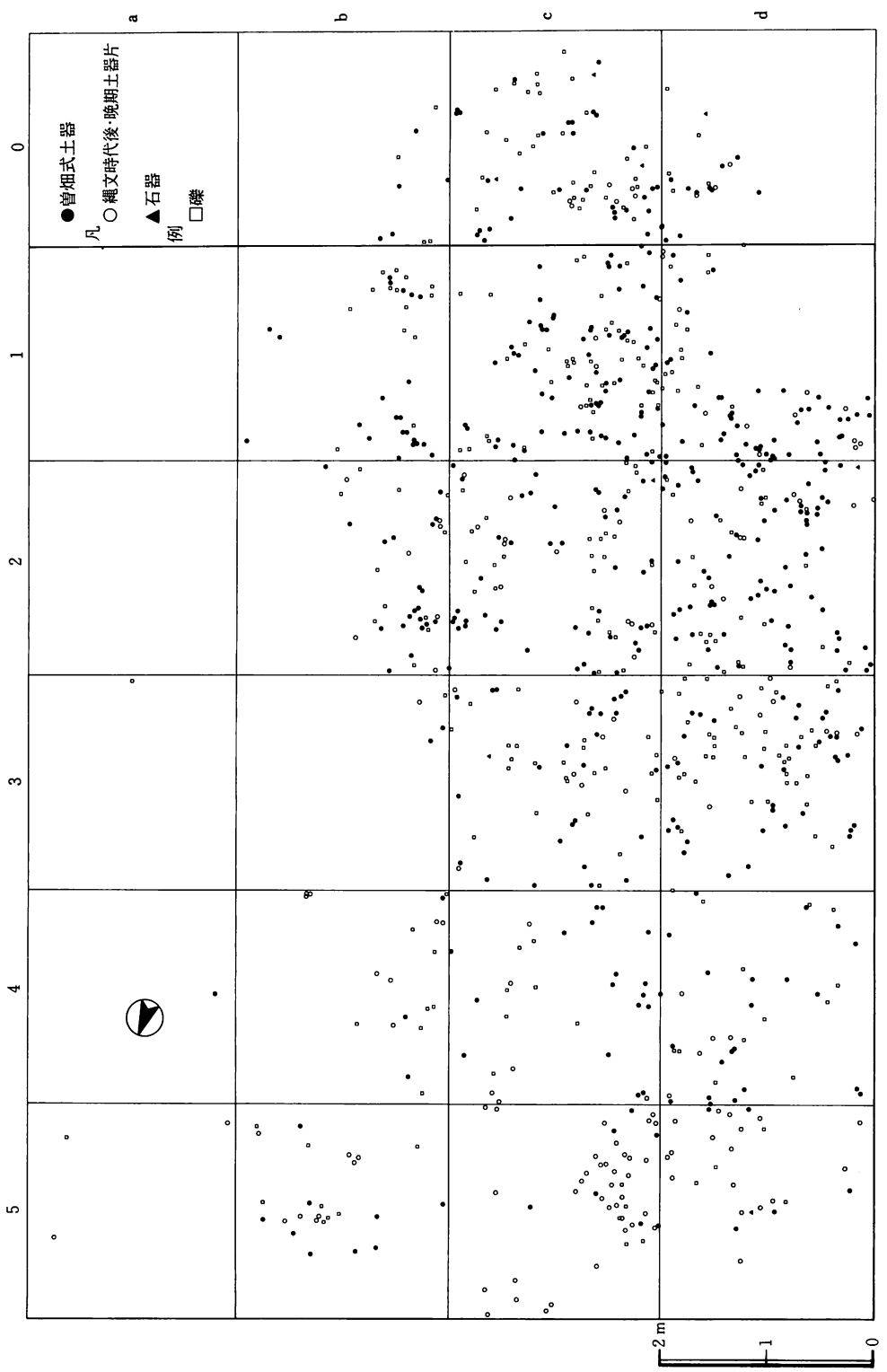
第10図　縄文時代遺物平面分布図(1)(6・7—Gグリッド)(上)



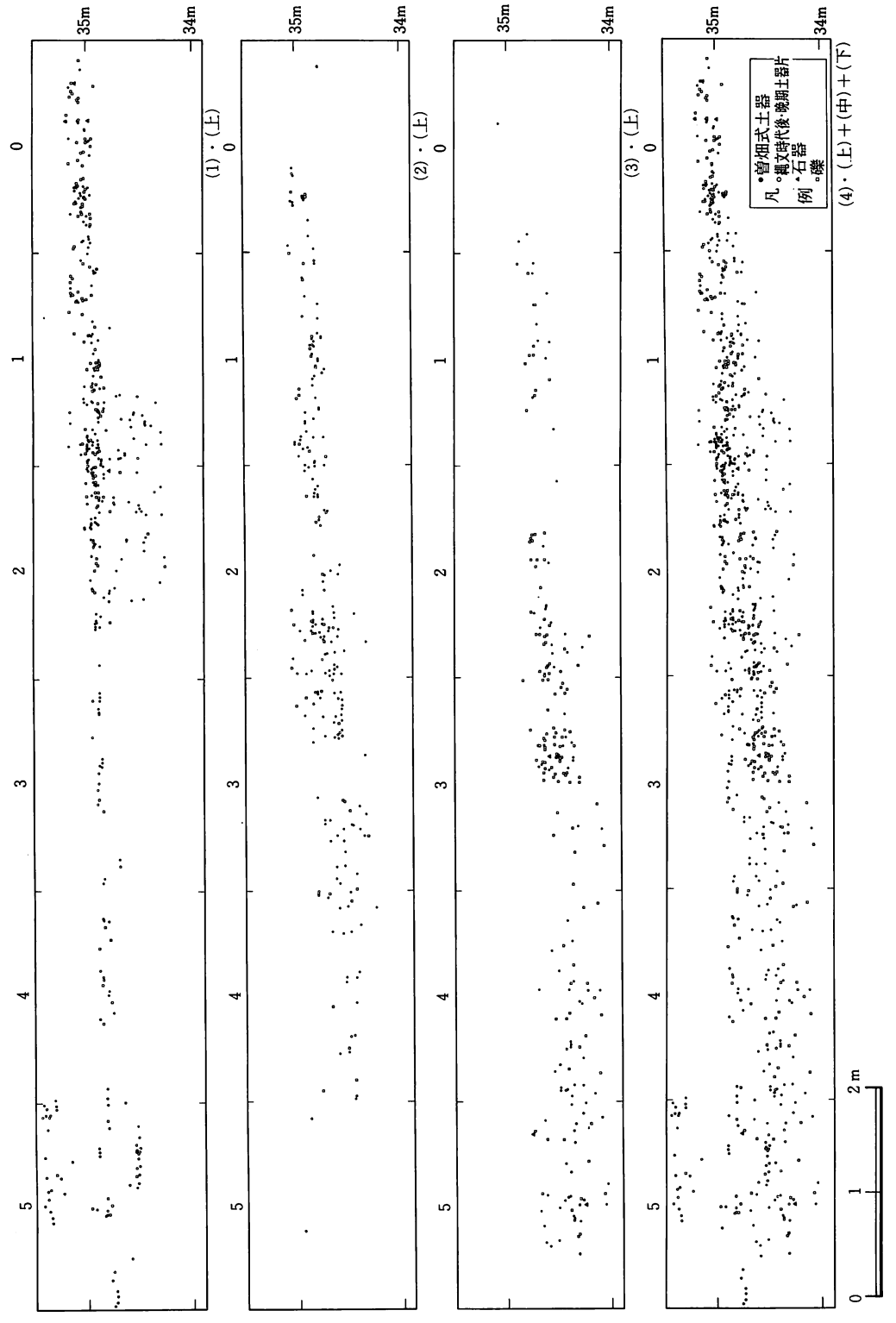
第11図　縄文時代遺物平面分布図(2)(6・7—Gグリッド)(中)



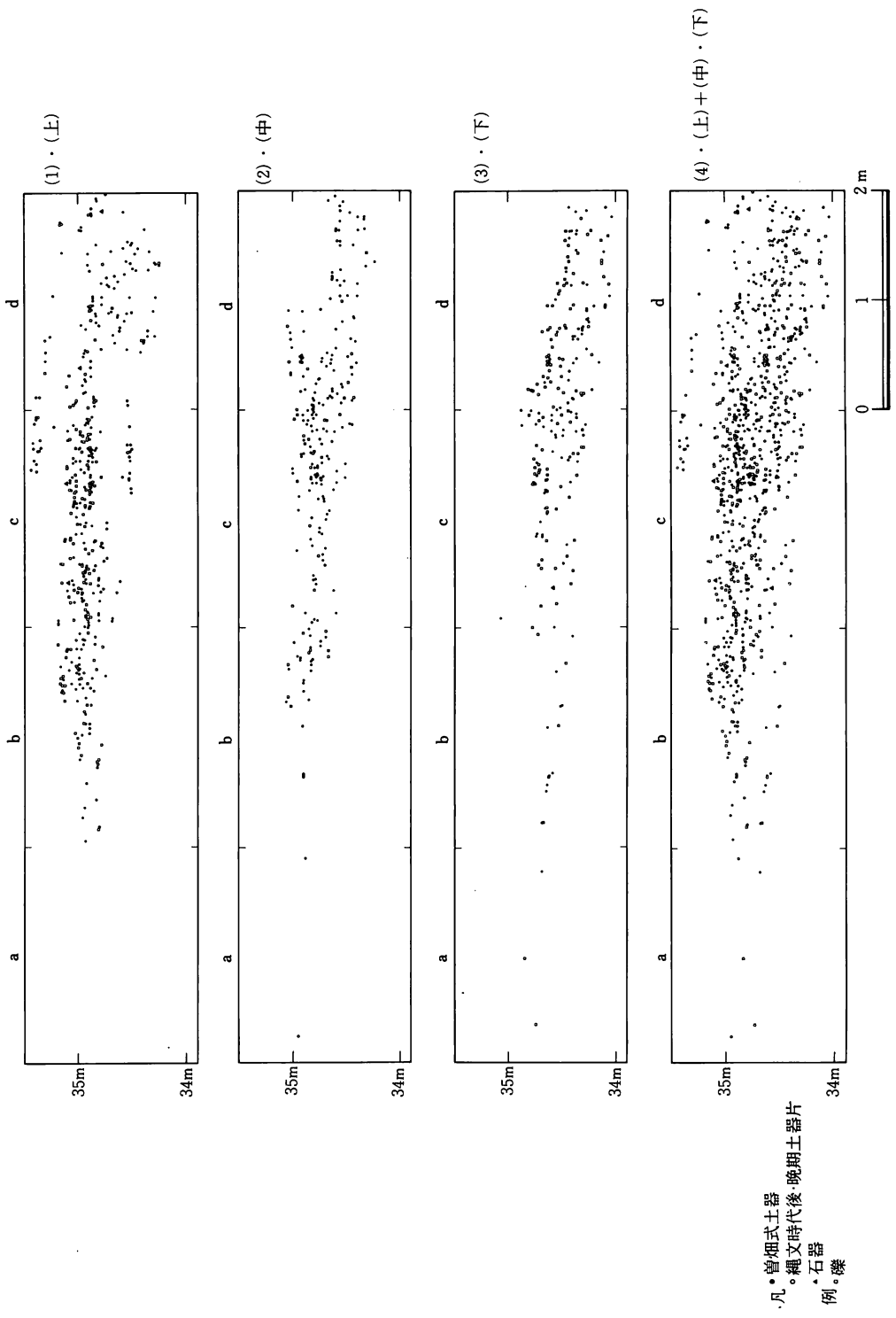
第12図　縄文時代遺物平面分布図(3)(6・7—Gグリッド)(下)



第13図　縄文時代遺物平面分布図(4)(6・7—Gグリッド)(上)＋(中)＋(下)



第14図　縄文時代遺物断面分布図(1)(６・７—Ｇグリッド西側断面投影)



第15図　縄文時代遺物断面分布図(2)(6・7—Gグリッド北側断面投影)

＜第Ⅰ群土器＞（滑石混入土器）（18～27）

胎土に多量の滑石の混入が認められるグループである。口縁部片1点、胴部片12点（うち3点が接合）の出土で、全体の遺物点数との比は、1.5%と少ない。滑石の混入は西北九州地域の曽畑式土器では多く見られる現象であるが、中九州地域では一般的に量的に少ない。今回の調査でも同様の状況を示しており、特徴的であるので、非混入土器と分類して作業を進めることにした。

本群の(18～27)を見ると、深鉢形・鉢形の器形を持つ土器片と推測される。全体的に器壁は5㎜前後と薄く、一様に茶褐色から暗褐色を呈する。器面の調整は、丁寧なナデが全体に施され、器面の滑らかさが特徴的である。施文技法としては、沈線文(18～27)と刺突文・口唇刻目文(18)が見られる。

文様構成は、(18)は外反する口縁部の外面に数条の平行沈線文を、内面に太めの刺突文を連ねて、さらに平坦な口唇部に刻目を施している。(19)は上位に、平行沈線文の上に2条の連続山形文を付加している。この文様が口縁部外面文様と判断する。さらにその下位の胴部上半文様帯に、いわゆる複合鋸歯文が配される。(20)は残存する胴部全体に、平行沈線文を巡らしている。ミニチュア型の器形を持ち、器壁厚は3.5㎜と極めて薄手である。(21～24・27)は縦位・横位の沈線文や短沈線文により、四角形や市松文様的に組み合わせる文様構成と考えられる。(25)は平行沈線文に山形文を重ねた文様構成の一部であろうか。

以上、文様構成について簡単に触れたが、使用した文様の名称は、次の第Ⅱ群土器での文様分類と同じくして進めている。

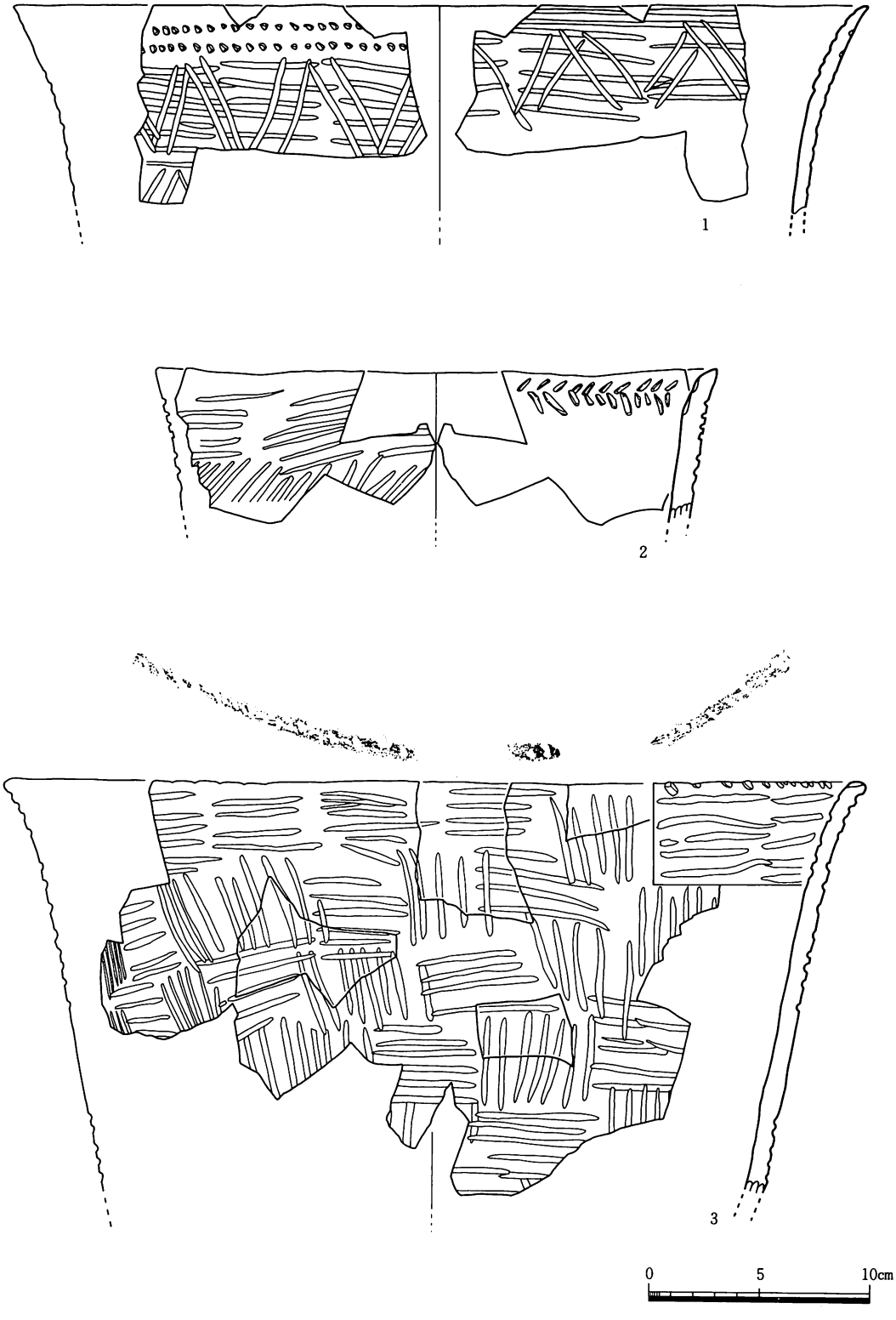
＜第Ⅱ群土器＞（非滑石混入土器）（1～17，28～160）

滑石が混入されていない土器を一括して、第2群土器としている。以下、第1～3グループに分けて報告を行う。

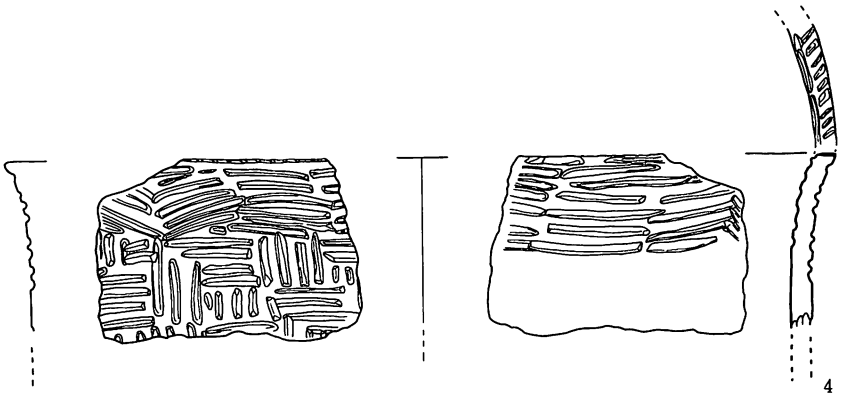
第1グループ（口縁部残存土器片）

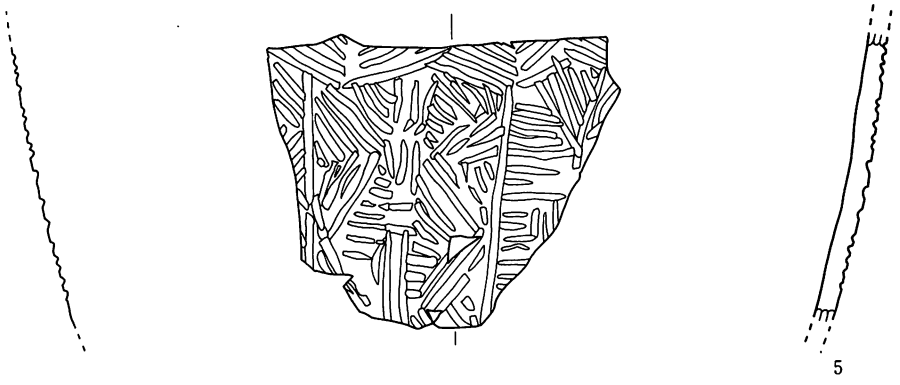
口縁部は小片を含め72点の出土であり、全体の遺物点数との比は8.5%になる。（同一個体、口唇部を欠く口縁部を含む　図掲載分は53点）

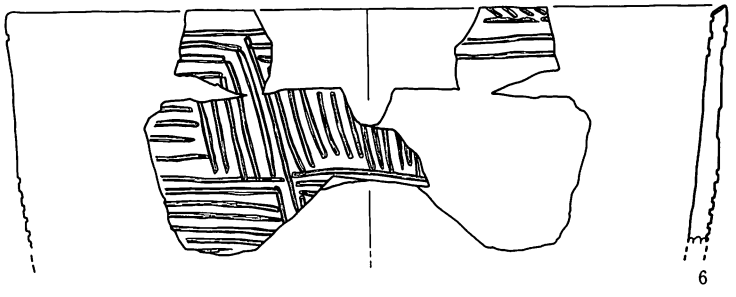
器形について見ると、大型の深鉢形土器を中心に、小型の深鉢形、鉢形土器などが想定され、浅鉢形の器形を持つ土器は見当たらなかった。口縁部・口唇部の形態は、曲線的に外反するものが多数を占めるほか、直口するもの、やや内弯するもの、内傾するものなども認められた。これに加えて、口縁部の断面形態について観察し、5形態の分類を試みた。①平坦形②片刃形③片丸刃形④両刃形⑤丸形である。さらに口唇部については、口唇部外端を小さく外折りにしたり、つまみ出したり、屈曲したりして、誇張する例が見られ、また全体の6割に刻目や刺突文を見ることができる。観察表では、便宜的に口唇部の施文を口縁部内外文様帯と切り離して、口唇部文様と

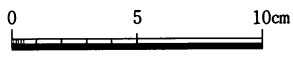


第16図　曽畑式土器実測図(1)









第17図　曽畑式土器実測図(2)

した。口縁部内面文様は、口縁部外面文様と対応する場合と、異なる場合、無文の場合をそれぞれ分けて示している。

以下、口縁部の文様構成・施文部位・施文技法・内面文様等の相違により、第１～６類に分類を試みた。

第１類（刺突文）　（１，２，16，28，29）

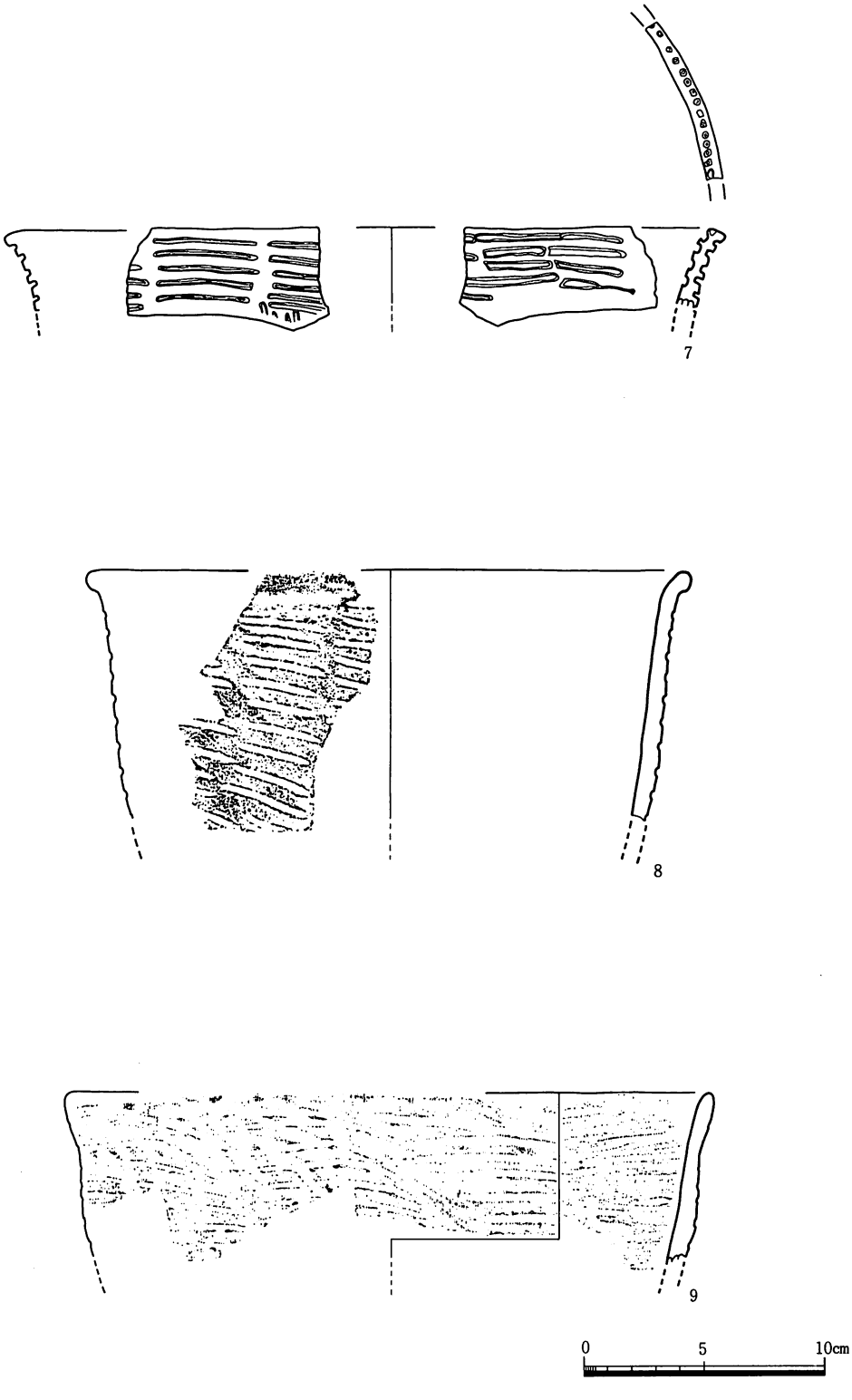
口縁部内外面のいずれかに、刺突文が施されるもの、斜位の短沈線で「く」の字状に施文されるものを本類とする。（口唇部の刺突文を除く）わずか５点（２例は内面のみの施文）を数えるのみであるが、このことは当遺跡の曽畑式土器文化期の時期想定の上で主要な材料となろう。（１，16，29）は外面のみ、（２，28）は内面のみに刺突文が施されていて、内外面ともに施文されるものは認められない。それぞれについて見ると、（１）は恐らく大型の深鉢形を呈すると考えられ、やや外反する口縁部は、先端が尖る。復原口径39.0cmを測る。刺突文と沈線文により施文される文様は、まず口縁上部に２連の連続刺突文を巡らしている。器面に対してほぼ垂直に刺突されており、丁寧かつ刺突文全体に均一性が見られる。出土土器の中で唯一の純然たる刺突文である。連続刺突文の下段には、数条の平行沈線文に２条の連続山形文を重ねているが、内面にも同様の文様が配されている。さらにその下には、別の文様要素（複合鋸歯文）がわずかに窺える。口唇部への施文は見られない。（16）に見られる文様は、従来より「羽状文」と呼ばれているものである。口唇部に斜位の短沈線を「く」の字状に連続して施文している。当遺跡では、この文様要素が胴部文様として拡大展開したものがある。（第２群土器第２グループ第２類）復原口径7.4cmを測るミニチュア型の特異な器形を持つ。内面は無文で、口唇部に刺突文を施している。（29）は小片であるが、口縁部外面に刺突文、内面に平行沈線文が窺える。（１）に比べやや長めの刺突を、上→右斜め下方向に施文している。やはり均一性を持つ連続刺突文である。

次は、内面に刺突文が施されるもので、（２）は口縁部内面に切れ長の刺突文で「く」の字連続文（羽状文）を配している。やや短沈線化するものもあり、多少均一性に欠ける。（２）の場合、口縁部外面に平行沈線文を、その下の胴部文様に左斜め下方向に平行斜線文を施している。

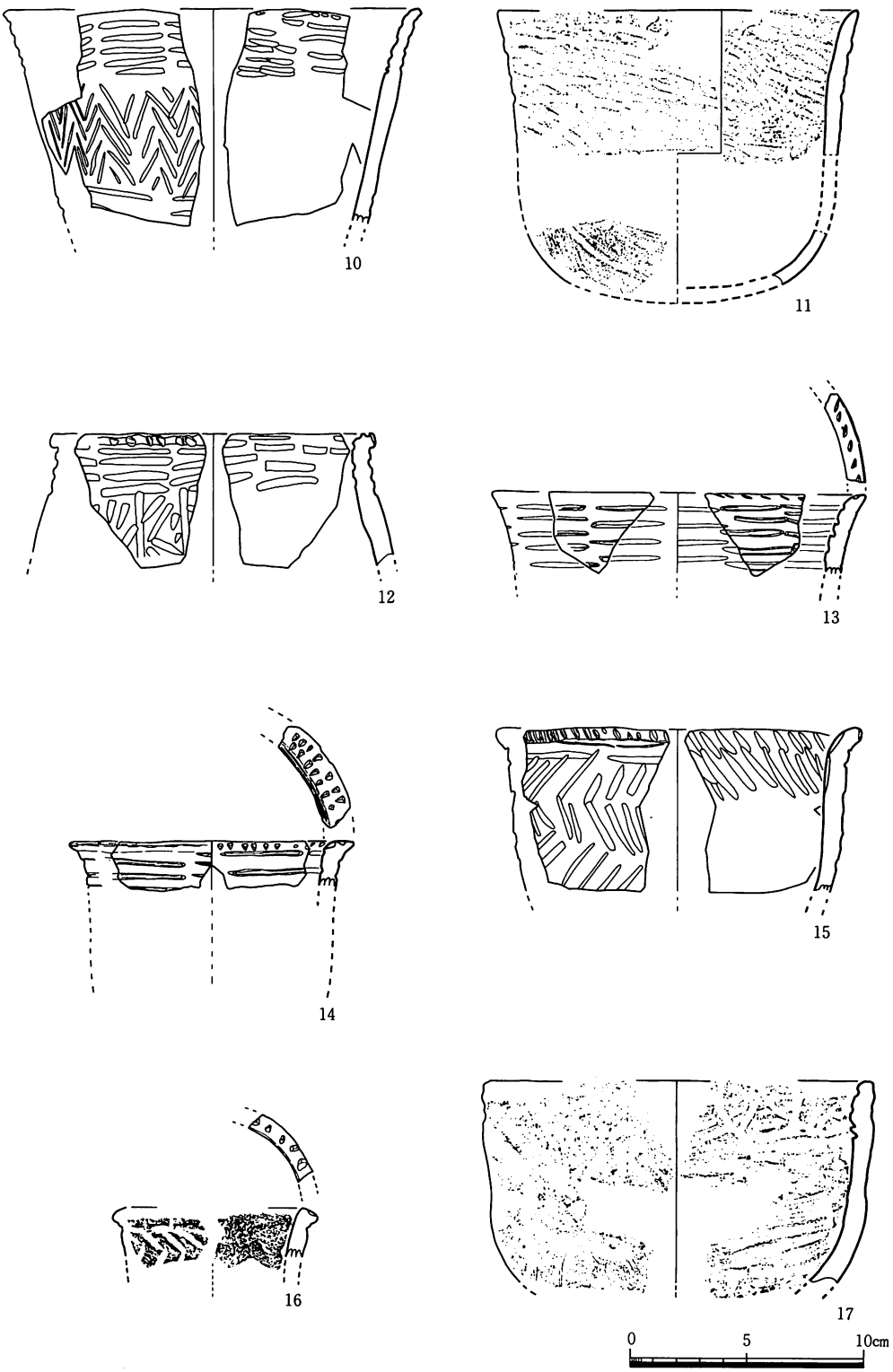
（28）は他に比べ特異である。小型の器形で器壁が薄く、器面調整も雑である。口縁部外面に平行沈線文を配し、内面に切れ長の刺突文を上→下方向に施文している。この刺突文は、長さ５～10㎜と一定しておらず均一性に欠ける。刺突文というより、縦位の短沈線文と呼んだほうが妥当であろう。

第２類（平行短沈線文）　（３，４，５，７～14，30～50，64，65）

口縁部外面に、数条の横位の平行沈線文を配するものを本類とし、さらに同じ平行短沈線文による内面文様の有無、他文様との対応、口唇部の施文の有無、沈線文の変化等により、Ａ～Ｆに



第18図　曽畑式土器実測図(3)



第19図　曽畑式土器実測図(4)

分類した。なお、このうちA及びBで口縁部の約1/3 を占めている。

A．口縁部の内外面ともに平行短沈線文を配するもので、口唇部に施文のあるもの

A1．短沈線が水平になるもの（3，7，10，12，13，14，30～42，65）

A2．短沈線が斜行するもの　（5）

A3．短沈線が曲線のもの　（4，65）

B．口縁部の内外面ともに平行短沈線文を配するもので、口唇部に施文の無いもの（43）

C．内面が無文のもので、口唇部に施文のあるもの（44，45，46）

D．内面が無文のもので、口唇部にも施文の無いもの（8，11，47，48，49）

E．短沈線が条痕状に浅くなるもの（9，49）

F．内面に、2段に斜位の短沈線文が施されるもの（15）

これらは、器形が大型と小型の深鉢形土器に二分されるようである。口縁部形態に関して見ると、ほぼ次の特徴が挙げられる。A．E．Fは、(12)を除き、やや外反する。B．C．Dは、(46)を除き、直立または内弯気味に立ち上がる。次に口唇部に関しては、平坦面や丸みを持つものが多く、先端が尖るものは(40，41)のみである。A．C（46のみ）．Fになると、つまみ出し、外折れが見られ、刻目や突帯文が施されるなど、やや誇張気味である。

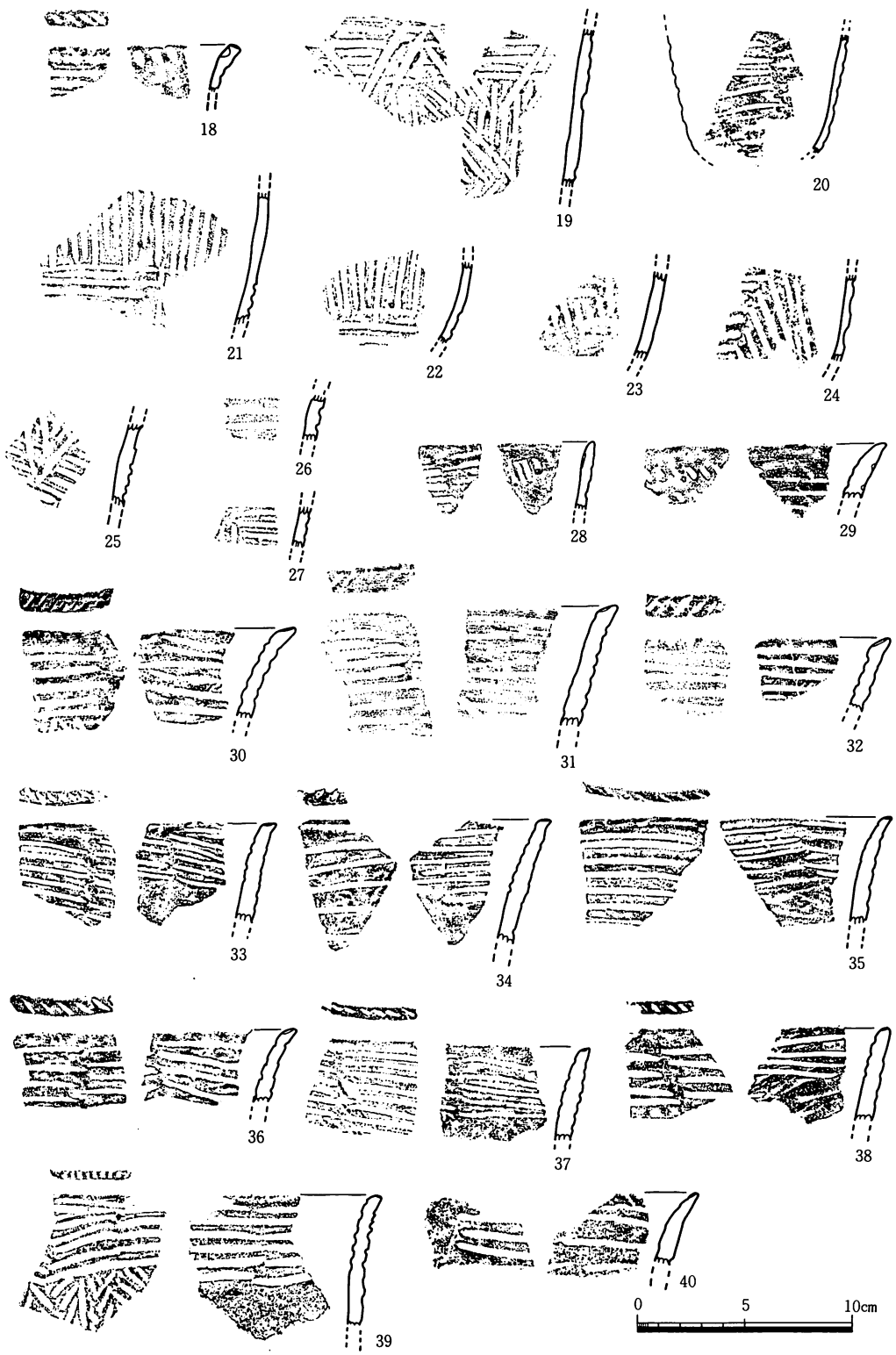
第2類土器の中で、(3，4，5，8，10，12，15，39，44，45)には下位の胴部文様が窺える。このことは土器全体の文様構成を知る貴重な資料である。それは、第2類の口縁部外面文様の下位に続く胴部文様として、短沈線文による綾杉文（10，44，45）、網代文（3，4）、縦位の区画線を持つ複合鋸歯文（5，12）、平行短沈線文（8）、羽状文（15）、胴部文様が施されないもの（11）などが見られ、他の口縁部の場合もこれらの文様に対応してくると考える。(8)のように、胴部に口縁部文様と同じ平行短沈線文が引き続き施文されたり、(11)のように胴部文様が施文されず、口縁部文様に集約されるものは、特に留意すべきであろう。

第3類（山形文）

口縁部の外面、あるいは内面文様帯に、数条の平行短沈線文を施文した上に1～3条の連続山形文を重ねる文様が配されているものがある。

この文様構成は、当遺跡の場合胴部上半文様とされているが、(1)のように口縁部外面の連続刺突文の下位と、内面文様帯に配される例は一例のみであり、ほとんどは、上位にくるはずの刺突文が省かれた形で口縁部文様として固定されている。さらに、必ずしも内外面文様帯の両方に第3類文様が配されるのではなく、平行短沈線文や無文との対応もあり、多様性に富んでいる。これらの文様構成は、内外面の対応関係や、他文様（平行短沈線文・無文）との関係により、A．B．Cの3つのパターンが考えられる。

A．第3類文様を、口縁部内外面双方に配するもの（1，50，51，52）



第20図　曽畑式土器実測図(5)

第21図　曽畑式土器実測図(6)

B．外面文様帯のみに、第3類文様を持ち、内面には平行短沈線文を施すもの（53，54）

C．内面文様帯のみに、第3類文様を持ち、外面には平行短沈線を施すもの（55，56）

C'．内面文様帯のみに、第3類文様を持ち、外面は無文のもの（17）

本類の器形は、小型の浅鉢形土器に近い(17)以外は、大型の器形を持つものと思われる。口縁形態は、(52)の内弯気味の口縁部を除いては、外反あるいは直口する。口唇部については、残存する土器片の断面形を見ると、①先が尖るもの（両刃形，片刃形）、②丸形になるものに限られ、平坦面を持たないようである。(52，55，56)の口唇部に刻目が見られるが、さほど口唇部に誇張は窺えない。

次に、A，Bに限られるが、第3類文様を口縁部外面に持つもので、(1，19，51)などからは下位の胴部文様が窺える。この場合いずれも複合鋸歯文が配される。

第4類（四角組合せ文、網代文ほか）（6，57～62）

第1～3類の口縁部文様に見られるような、連続刺突文、数条の平行沈線文、連続山形文が施文されずに、いきなり胴部文様とされる、四角組合せ文、網代文が施文されるものを本類とする。

本類の器形は、すべて大型の器形を持つものと考えられる。口縁部形態は、外反気味のもの(59，60)、外傾気味のもの（57，58，61，62）となる。口縁部断面形を見ると、片刃形（6，61，62，63，64)、両刃形（59，60）の両方がある。内面文様は、すべて数条の平行沈線文を施す。口唇部には、(59)に刺突文、(60，61，62)に刻目が施文される。

本類については、引き続き下位に口縁部文様と同じ文様が施文される可能性が高い。

第5類（押し引き文ほか）（64，65）

特異な口縁部形態を持つもの（65)、押引き沈線文が見られるもの（64）を、他と区別して本類に一括した。(65)はやや外反する口縁部が波状を呈し、肥厚気味で丸みを持つ口唇部に刻目を施文している。文様分類から言えば、第1グループの第2類のA3に相当する。(64)は口縁部が「く」の字に大きく外折れするもので、内外面に平行短沈線文を施し、平坦な口唇部には、刻目を施文している。第1グループ第2類のA1に属する。この(64)は、内外面の最上段に押引きによる沈線文を施している。この押し引きによる施文は当遺跡出土の土器の中で、この一例を見るのみである。

第6類（17）

(17)は、器面全体に文様がなく、従来の曽畑式土器に見られない資料である。口縁部内面に、第3類文様に相当する4条の平行短沈線文に、連続山形文を重ねるだけにとどめた文様である。この特異な土器は、器形や器面調整についても他と異なった特徴を持つ。小型の鉢形土器の器形

で、口唇部に丸みを持ちほぼ直口する口縁部は、規則性のない凹凸があり、さらに粘土の一部を外に巻き出している。胎土は細砂粒を混入し、焼成はやや不良で、外面の器面全体にヒビ割れがある。色調は、赤褐色から茶褐色を呈する。調整は、外面はナデており、内面は全体に板状の（茎）状の原体によると思われる削りを施している。また、内面の施文部位は、ナデ調整の後、器面が柔らかいうちに施文したものであろう。一般的な施文後のナデは行っていない。

第2グループ　（胴部片）

胴部を一括して本グループとする。これらの胴部文様は、短沈線、刺突、縦・横区画線などにより多彩な文様構成を成している。構成された文様の基本的なモチーフの追求を可能な限り試みることにしたい。この基本的な文様モチーフとして複合鋸歯文・綾杉文・羽状文・網代文・四角組み合わせ文・短沈線文・無文・その他の文様に分類をしてすすめ、その結果を土器観察表にあらわしている。ここでは、典型的なものを取り上げ特色を記していきたい。

第1類（複合鋸歯文）（67，69，77，89，94）

本類は、三角形を連続的に横位に展開し、さらにその中を、斜め沈線で交互に埋めているもので、三角形がつながりノコギリの刃のようなモチーフを持つことから複合鋸歯文と呼ばれているものである。鋸歯文は多くの場合、「正三角形を呈する」と規定されることがあるが、本類の場合は、二等辺三角形、直角三角形に近いものとなり、全体的に縦長の傾向になる。

（67）は端正な三角形の形状で明確な施文を行っており、最も典型的な資料である。逆に三角形文様が不明確なもの、細かったり乱雑な施文も多い。また、（67）は一部の隙間に斜め沈線ではなく縦の短い沈線を充填させる特徴がある。（94）は細く、おなじ方向の斜め沈線であり、複合鋸歯文とできない可能性もあるが、上位の文様帯は区画をなす短直線であり、内面文様を認めることができることなどから口縁部近くの土器片であることがわかる。同じように複合鋸歯文は上下に区画をなす沈線や短沈線の文様帯を持つことが多く、（67，69，77，89）らはその現象を示している。このようなことから鋸歯文が施文されている部位は、胴部上半部が多いものと判断される。

先に報告したように本遺跡では口縁部に刺突文を巡らす資料が皆無の状況であり、一般的な施文形態、即ち、口縁部から胴部にかけて刺突文～横区画～複合鋸歯文～横区画（平行短沈線）との連続性は無いようである。寧ろ、このことが本遺跡の特色を示すかのように（51）では刺突文を施すことなく、短沈線に連続山形文を複合させた文様帯に続き複合鋸歯文の施文を行っている。（67）に見られた複合鋸歯文の上下に短沈線があることにより、上下に区画文を施す技法の伝統は残しているようである。

第2類（綾杉文）（10，118，119，120，124 ）

本類は胴部文様として、短沈線によって「く」の字連続文を施文するものである。このような「く」の字を縦位に展開するものを「綾杉文」、横位に展開するものを「羽状文」と二分してみた。両者は斜め沈線を連続して構成する文様であり、複合鋸歯文や長線化した刺突文などから変容したものと捉えられよう。

綾杉文の出土点数は少なく大きく流布する傾向はない。(10) に口縁部から連続した文様形態を見ることができる。刺突文を持つことなく、短沈線文に続きこの綾杉文の施文があり、下位にも短沈線が認められ、更に下位に綾杉文が連続するか否か知りたいところである。この土器は小型の深鉢に準じて細く、短い斜め沈線を連続させた綾杉文であるが、(124)は粗く長い斜め沈線で構成している。浅い彫り、そして貧弱な施文具と見られ文様形態や施文方法にもバラエティが認められる。ところで、この資料は（125，126）と底部へと連続している。下位に短沈線での区画文そして底部に四角組み合わせ文を施していることが見られる。粗雑な文様ではあるが、伝統的な全面施文形態を留めている。

第3類（羽状文）(15，127，128，130，131)

(15) は横位区画に挟まれて文様帯となる例で、(127) は文様帯の中の一区画内に充填したものである。前者は太く長い、後者は短い斜め沈線を連続させて羽状文としている。このほかにも数点の小破片があるが大きく展開することはないようである。

第4類（網代文）（3，4，139，14)

本類文様は、横位と縦位の数条の沈線や短沈線を交互に組み合わせて、市松文様のモチーフを描くものである。本類では、この文様構成を視覚的に編み目模様にとらえた「網代文」と呼びたい。

本類の施文パターンを(3)でみると、基本的には4～7条の、横位と縦位の平行沈線を交互に、かつ右回りに描きながら、さらには下→上段へと胴部全体に展開させている。他の胴部上半部片（4,137～143）と、胴部下半部片（144，145）の場合は(3)と同じもの、逆に左回りに描いていくもの、上段→下段の施文展開をするものもあり、一定していないようである。また本類文様が、他文様帯に施文される例がある。第1グループ第4類の(61，62)は下段に、第3グループの(159)は底部に施文されているが、恐らく（59，60）は下段に、(159)は上段に、文様が引き続き施文されるものと思われる。すべてに胴部の横位、縦位の区画沈線は認められない。こうしてみると、本類文様は他の文様構成と異なっている。それはこの網代文が単一の文様を縦・横方向に繰り返して全体文様を構成するのであるが、曽畑式土器の一般的な文様構成は、異なった数種類の文様帯があったり、縦・横位区画を行い異なった文様を充填することが多く、単一の文様で全体文様

を構成する例は少ないのである。

（3）では口縁部上位から縦沈線があり、「くずれ」と認識するが、（4）では横沈線文で第1文様帯を構成しており本来的なものと判断できる。

第5類（四角組み合わせ文）（23，92，93，140，147，151，152）

基本的には沈線を組み合わせる文様で四角や方形、平行四辺形の形状を示すものを捉えることとしたが、このような形状を示すものを全体感から第4類網代文で捉えたものが多く、本類は僅かな資料となる。そして、前類との区分けにも困難さがあり、この形状が強く意識されて施文されているのかとの疑問があることも前提としておきたい。それは、単に文様間の空間を埋めるために生じた形状である可能性が強いことでもあるからである。

（140，147）は細片のなかに四角形文様が認められることができる。同じように、平行四辺形の形状を示すもの（92，93，151，152）がある。それぞれ斜め沈線文の間を、短い斜め沈線で満たしており、文様間の隙間を埋めた文様と認識されるものであろう。

第6類　短沈線文（8，20，98，100，104）

胴部には数多くの短沈線文が認められる。殆どが直線的に連続して横走するもので、なかには①やや斜行するもの、②曲線的なもの、③長めのもの（4～5㎝）、④短いもの（1.5～2㎝）、⑤太めのもの、⑥細いもの、⑦彫りが深いもの、⑧彫りが浅いものなど種々の様態が見られる。

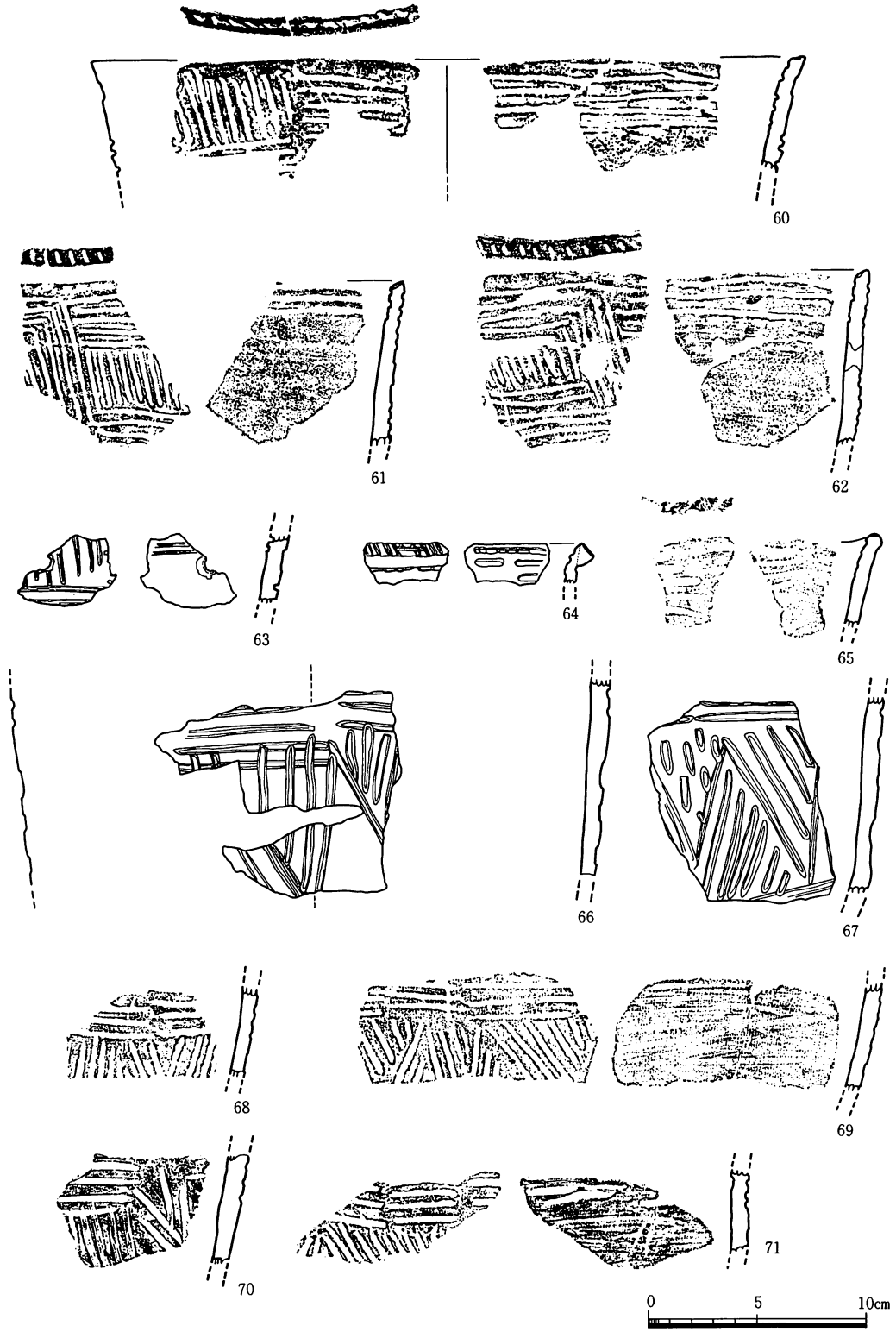
通常的に上位の文様の変化に関わらず、胴部下半から底部に短沈線文が多いものであるが、（8）では口縁部から一面に短直線を施すものがある。これでは上位が短く、そして細くなる傾向はみれるが、土器全体に通じる現象であるかは明確にできない。

第7類　その他の文様（4，5，7，44，127）

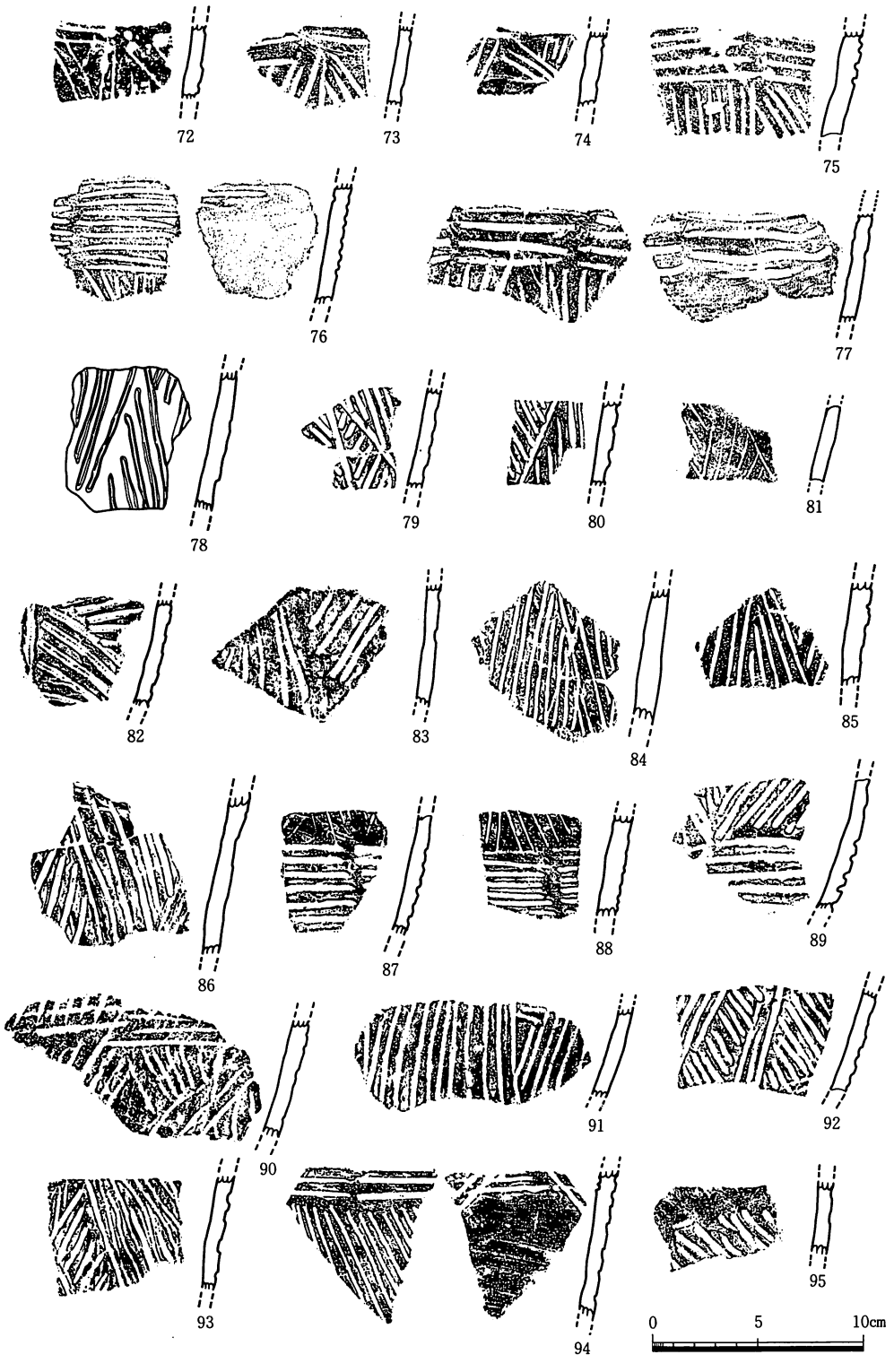
総称した文様として呼ぶことの困難な土器群がある。（5）であり、（4）のすぐ下に接合できるものであろうが、特徴的な文様をもっている。ここでは縦位区画を行ったあと、さらに左右の区画線の中間に2～3条の短沈線を縦走させ、幾何学文様を施している。三角形や菱形の文様構成となっている。粗い沈線の連続であるが空間が無いように綿密に充填している。同様の施文が底部まで続くものと予想される。なお、縦位の区画が施されたものにはこのほか（7，44，127）などにも見られるが概してその比率は高くない。

第3グループ　（底部片）（154～160）

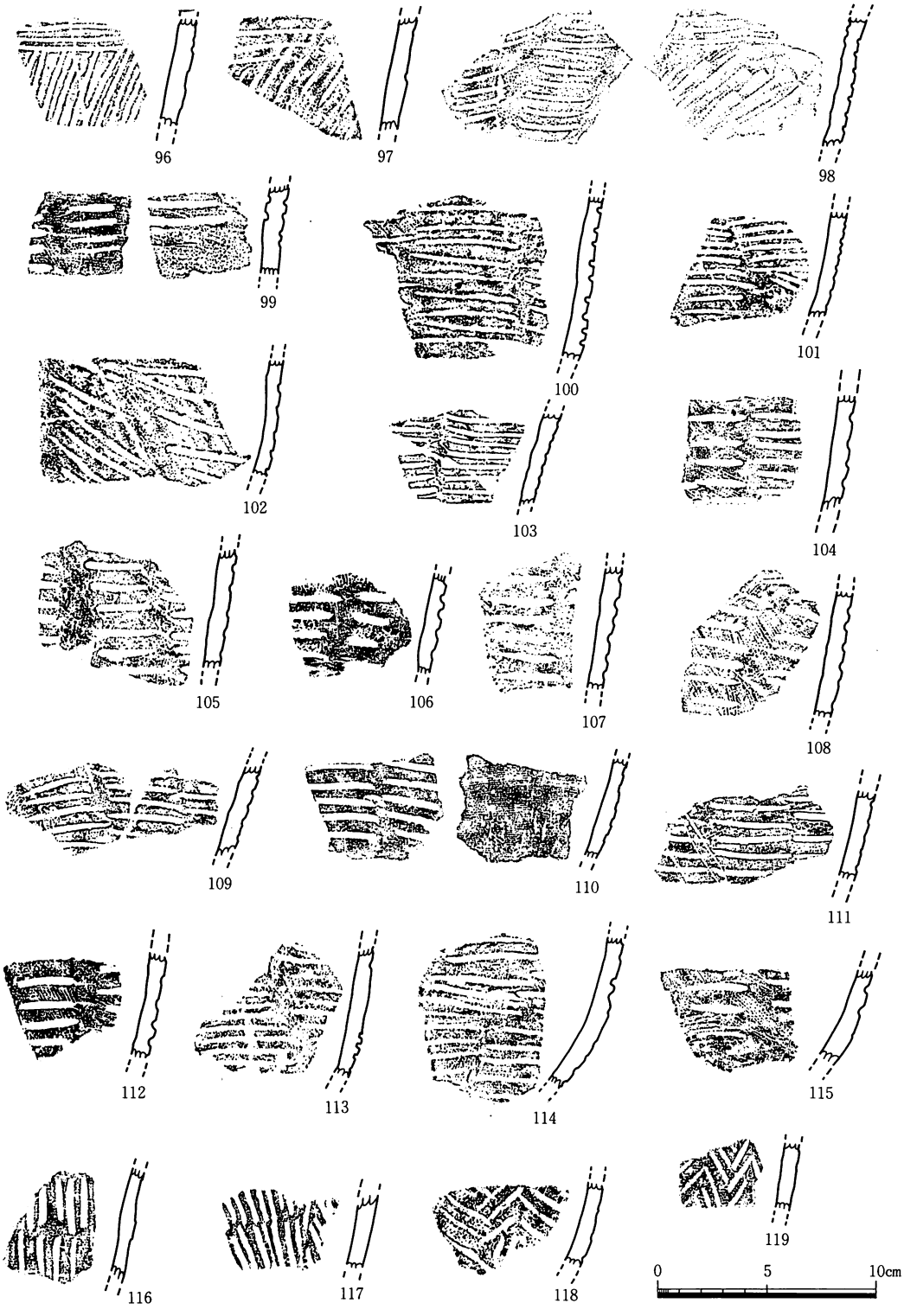
底部は、貼り付けを明瞭に示すもの（157）があり、一般的な技法のようである。底部までの



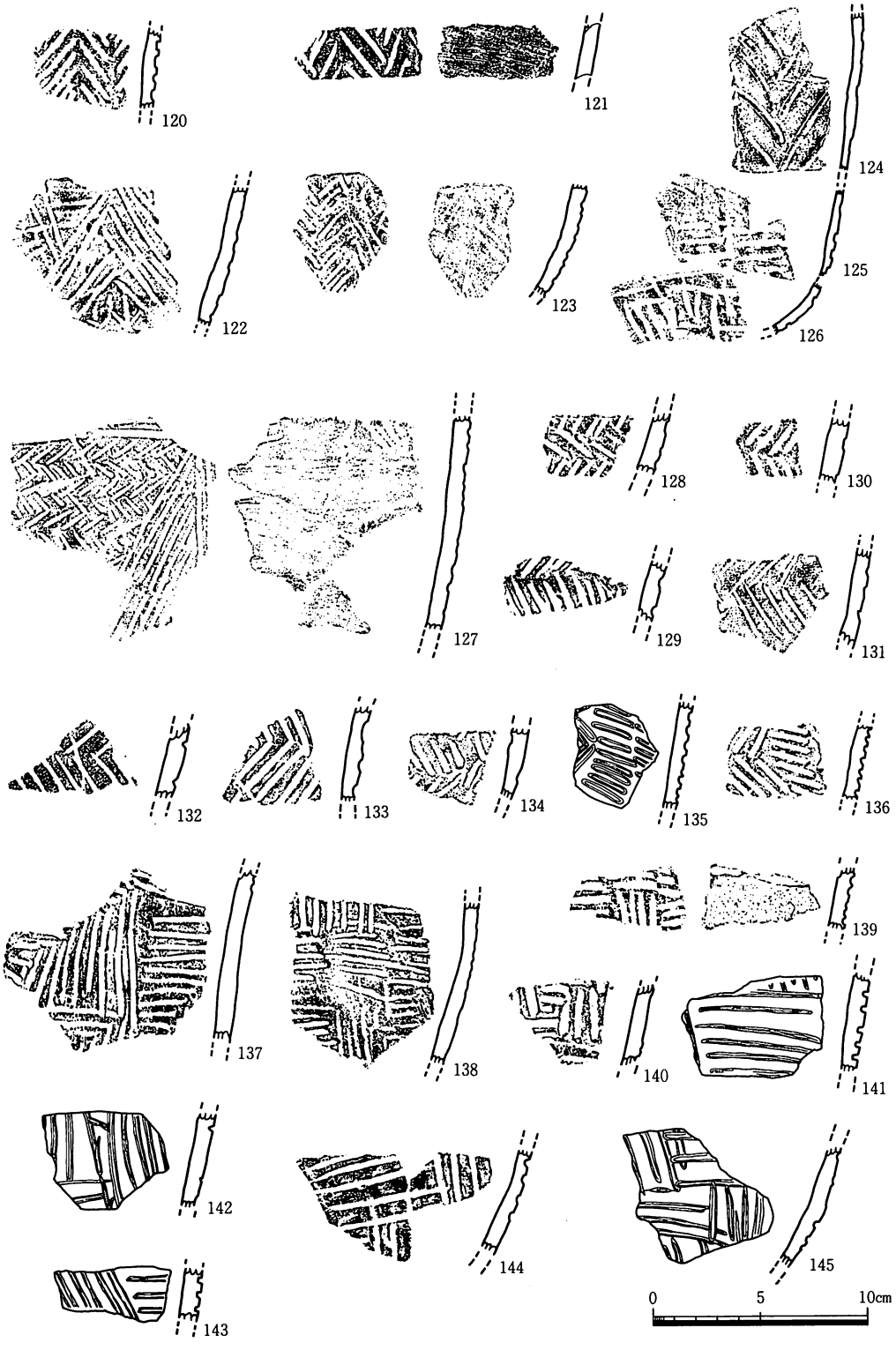
第22図　曽畑式土器実測図(7)



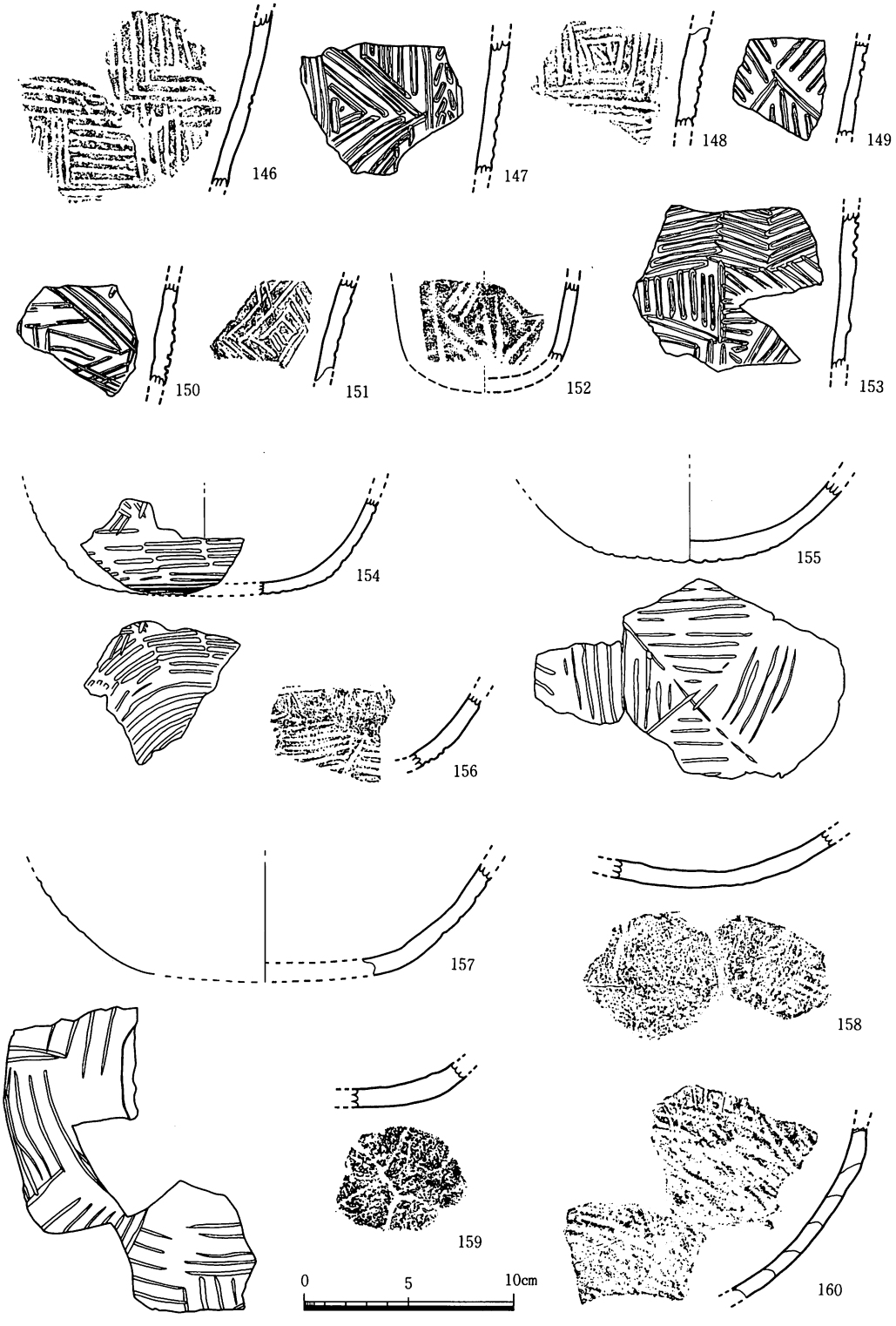
第23図　曽畑式土器実測図(8)



第24図　曽畑式土器実測図(9)



第25図　曽畑式土器実測図(10)



第26図　曽畑式土器実測図(11)

第２表　曽畑式土器観察表(1)

※胎土の数字　1.長石　2.石英　3.角閃石　4.滑石　5.雲母

番号	出土地区	層位	器種	現存部位	形態の特徴	文様の特徴	口唇部施文	法量 口径	法量 器厚	色調 外	色調 内	胎土	焼成	器面調整 外	器面調整 内	備考
01	6-G	Ⅲ	深鉢	口縁部	口縁－やや外反 口唇－尖る	外　刺突　短沈線＋山形 内　短沈線＋山形	なし 片丸刃形	38.8cm	7cm	橙色	橙色	1･3	良好	ナデ	ナデ	
02	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇部－尖る	外　短沈線 内　刺突	なし 平担形	25.4cm	10cm	にぶい赤褐色	明赤褐色	1･2	良	ナデ	条痕のあとナデ	
03	6-G	Ⅲ	深鉢	口縁部	口縁－やや外反 口唇－平坦面をつくる	外　短沈線　綱代 内　短沈線	幅広の刻目 丸形	39.2cm	7～9cm	にぶい橙色	にぶい橙色	1･3	良	ナデ	条痕のあとナデ	
04	6-G	Ⅲ	深鉢	口縁部	口縁－やや外反 口唇－平坦面をつくる	外　短沈線　綱代 内　短沈線	刻目 平担形	41.0cm	8cm	黒褐色	黒褐色	1･5	良	ナデ	ナデ	
05	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	口縁－直口	外　縦区画　三角形と菱形ナシ	－		8cm	黒褐色	黒褐色	1･2	良	ナデ	ナデ	
06	6-G	Ⅲ	鉢	胴部	口縁－直口 口唇部－尖る	外　綱代 内　短沈線	刻目 平担形	25.0cm	8～9cm	にぶい褐色	明褐色	1･2･3	良	ナデ	条痕のあとナデ	
07	6-G	Ⅲ	深鉢	口縁部	口縁－外反 口唇－平坦面をつくる	内外　短沈線	刺突 平担形	28.0cm	8cm	黒褐色	にぶい黄橙色	1･3	良	ナデ	ナデ	
08	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－肥厚	外　短沈線	なし 丸形	25.2cm	8cm	浅黄橙色	にぶい黄橙色	1･2	良	ナデ	ナデ	
09	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－先端丸くなる	外　短沈線	なし 両刃形	27.0cm	7～9cm	にぶい褐色	にぶい黄橙色	2.3	良	ナデ	条痕のあとナデ	
10	6-G	Ⅲ	小鉢	口縁部	口縁－外傾 口唇－平坦面をつくる	外　短沈線　鋸歯 内　短沈線	刻目 片丸刃形	18.0cm	7cm	褐色	にぶい黄橙色	1･2･3 3が多い	良	ナデ	条痕のあとナデ	
11	6-G	Ⅲ	小鉢	口縁部 底部	口縁－直口 口唇部－やや尖る	外　短沈線	なし 片丸刃形	15.4cm	7cm	黒褐色	黒褐色	1･5	良好	ナデ	ナデ	
12	6-G	Ⅲ	小鉢	口縁部	口縁－内傾 口唇－肥厚させ平坦面をつくる	外　短沈線＋縦区画 内　短沈線	刺突 平担形	14.0cm	8cm	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2･3 3が多い	良	ナデ	ナデ	
13	6-G	Ⅲ	小鉢	口縁部	口縁－外傾 口唇－尖る	内外　短沈線	刺突 片丸刃形	16.0cm	7cm	にぶい橙色	にぶい橙色	1･2･3	良好	ナデ	ナデ	
14	6-G	Ⅲ	小鉢	口縁部	口縁－やや外反 口唇－尖るが平坦面をつくる	内外　短沈線	刺突(２列) 平担形	12.2cm	8cm	褐色	にぶい橙色	2･3	良	ナデ	ナデ	
15	6-G	Ⅲ	小鉢	口縁部	口縁－やや外反 口唇－丸くなる	外　羽状文 内　斜方短沈線	刻目 丸形	15.8cm	6～8cm	灰褐色	にぶい黄橙色	1	良	ナデ	ナデ	
16	6-G	Ⅲ	小鉢	口縁部	口縁－外傾 口唇－肥厚させ平坦面をつくる	外　羽状文	刺突 平担形	8.8cm	7cm	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	1･5	良	ナデ	ナデ	
17	6-G	Ⅲ	小鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－丸くなる	外　無文 内　短沈線＋山形	なし 丸形	16.6cm	7～9cm	暗赤褐色	橙色 褐灰色	1･2	良	ナデ	条痕のあとナデ	
18	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－外反 口唇－平坦面をつくりだす	外　短沈線 内　押点文	刻目 平担形	－	7cm	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	4	良	ナデ	ナデ	
19	6･7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	外　短沈線＋山形 複合鋸歯	－	－	7cm	にぶい赤褐色	暗赤褐色	4	良好	ナデ	条痕のあとナデ	
20	6-G	Ⅲ	小鉢	胴部	－	外　短沈線	－	－	3cm	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	4	良好	ナデ	ナデ	
21	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	外　四角組合文	－	－	6cm	暗赤褐色	にぶい赤褐色	4	良好	ナデ	条痕のあとナデ	
22	6-G	Ⅲ	鉢	胴部	－	外　四角組合文	－	－	5cm	にぶい赤褐色	にぶい褐色	4	良好	ナデ	条痕のあとナデ	
23	6-G 一括	Ⅲ	鉢	胴部	－	外　四角組合文	－	－	5cm	明赤褐色	にぶい橙色	1･4	良好	ナデ	条痕のあとナデ	
24	6-G	Ⅲ	鉢	胴部	－	外　四角組合文	－	－	5～6cm	にぶい赤褐色	褐色	4	良好	ナデ	条痕のあとナデ	
25	6-G	Ⅲ	鉢	胴部	－	外　短沈線＋山形	－	－	8cm	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1･4	良好	ナデ	ナデ	
26	6-G	Ⅲ	鉢	胴部	－	外　短沈線	－	－	8cm	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	4	良好	ナデ	ナデ	
27	6-G	Ⅲ	鉢	胴部	－	外　四角組合文	－	－	6cm	にぶい赤褐色	灰褐色	4	良好	ナデ	条痕のあとナデ	
28	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－尖る	外　短沈線 内　斜方沈線	なし 片丸刃形	－	5cm	黒褐色	灰黄褐色	1･2･3	良	ナデ	ナデ	
29	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－外反する 口唇－尖る	外　刺突文 内　短沈線	なし 片丸刃形	－	7cm	にぶい橙色	灰褐色	1･3	良好	ナデ	ナデ	
30	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－外反 口唇－尖る	内外　短沈線	なし 片丸刃形	－	8cm	にぶい橙色	黒褐色	1	良好	ナデ	ナデ	
31	6-G	Ⅲ	深鉢	口縁部	口縁－外傾 口唇－尖る	内外　〃	刻目 平担形	－	9cm	橙色	橙色	1･2	良好	ナデ	ナデ	
32	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－外傾 口唇－尖る	内外　〃	刻目 平担形	－	7～9cm	にぶい橙色	にぶい黄橙色	1･2	良	ナデ	ナデ	
33	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－外傾 口唇－平坦面をつくる	内外　〃	刻目 平担形	－	7～9cm	黒褐色	橙色	1･2･3	良好	ナデ	ナデ	炭化物付着
34	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－外傾 口唇－平坦面をつくる	内外　〃	刻目 平担形	－	6～9cm	にぶい橙色	灰褐色	1	良	ナデ	ナデ	
35	6･7-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－やや外反 口唇－先端尖る	内外　〃	刻目 片丸刃形	－	7cm	明赤褐色	にぶい赤褐色	2･3	良好	ナデ	ナデ	
36	6･7-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－やや外反 口唇－尖る	内外　〃	刻目 片丸刃形	－	7cm	灰褐色	にぶい褐色	1･2･3	良	ナデ	ナデ	
37	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－先端尖る	内外　短沈線	刻目 平担形	－	6～9cm	灰褐色	橙色	1･2･3･5	良好	ナデ	ナデ	外面全体に炭化物残る
38	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－先端尖る	内外　〃	刻目 丸形	－	7cm	黒褐色	にぶい橙色	1･2	良好	ナデ	ナデ	外面全体に炭化物残る
39	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－やや外反 口唇－平坦面をつくる	内外　〃 外＋縦区画	刻目 片丸刃形	－	8cm	黒褐色	黒褐色	1･2	良好	ナデ	ナデ	
40	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－やや外反 口唇－尖る	内外　〃	なし 両刃形	－	9cm	橙色	橙色	1･2	良	ナデ	ナデ	
41	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－やや外反 口唇－尖る	内外　〃	刻目 片丸刃形	－	8cm	黒褐色	黒褐色	1･2･3	良好	ナデ	ナデ	外面に炭化物付着
42	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－やや外反 口唇－尖る	外　短沈線 内　短沈線＋山形	なし 片丸刃形	－	10cm	黒褐色	にぶい黄褐色	1･2･3	良	ナデ	ナデ	
43	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－先端尖る	内外　短沈線	なし 丸形	－	8cm	明赤褐色	橙色	1･2	良	ナデ	ナデ	
44	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－やや内弯 口唇－丸味を帯びる	外　短沈線＋縦区画 鍛の綾杉文	刻目 丸形	－	6～7cm	にぶい褐色	にぶい黄褐色	1･2	良	ナデ	棒状具による研磨状調整	
45	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－先端尖る	外　短沈線	刻目 丸形	－	7cm	暗褐色	にぶい橙色	1･2	良	ナデ	棒状具による研磨状調整	(44)と同一個体
46	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－やや外反 口唇－先端尖る	外　〃	刻目 片刃形	－	8cm	褐灰色	にぶい褐色	1･2	良好	ナデ	ナデ	
47	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－先端尖る	外　〃	なし 両刃形	－	6cm	にぶい褐色	灰褐色	2	良好	ナデ	ナデ	
48	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－丸みを帯びる	外　〃	なし 丸形	－	7cm	にぶい褐色	灰褐色	1	良	ナデ	ナデ	
49	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－外傾 口唇－尖る	内外　短沈線	なし 片丸刃形	－	8cm	黒褐色	灰褐色	2･3	良好	ナデ	ナデ	
50	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部付近	口縁－直口	内外　短沈線＋山形	－	－	6cm	暗褐色	灰褐色	1･2･3	良	ナデ	ナデ	
51	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－先端部尖る	内外　〃 外　複合鋸歯文	なし 両刃形	－	8cm	橙色	橙色	2･3	良	ナデ	条痕のあとナデ	
52	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－丸みを帯びる	外　短沈線＋山形 内　短沈線	刻目 平担形	－	7cm	黒褐色	明赤褐色	2	良好	ナデ	ナデ	
53	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－尖る	外　短沈線＋山形 内　短沈線	なし 片丸刃形	－	7cm	にぶい黄褐色	黒褐色	1･2･3	良	ナデ	ナデ	
54	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－先端尖る	〃	なし 片丸刃形	－	8cm	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	1	良	ナデ	ナデ	
55	1号住 一括	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－先端丸みを帯びる	外　短沈線 内　短沈線＋山形	刻目 丸形	－	10cm	にぶい褐色	灰褐色	1	良	ナデ	ナデ	
56	7-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－肥厚させる	〃	刻目 丸形	－	7cm	にぶい赤褐色	橙色	1･2･3	良好	ナデ	ナデ	
57	6･7-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－外傾 口唇－尖る	外　短沈線＋四角組合文 内　短沈線	なし 両刃形	－	9cm	にぶい黄橙色	浅黄橙色	1	良好	ナデ	ナデ	
58	6-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－尖る	〃	なし 両刃形	－	8cm	灰褐色	にぶい褐色	1	良好	ナデ	ナデ	
59	7-G	Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－やや外傾 口唇－平坦面をつくる	〃	刺突 平担形	－	8cm	にぶい橙色	橙色	1･2･3	良好	ナデ	ナデ	
60		Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－やや外傾 口唇－尖る	外　綱代 内　短沈線	刺突 平担形	33.1cm	7cm	にぶい橙色	にぶい黄橙色	1･3	良好	ナデ	ナデ	

第3表　曽畑式土器観察表(2)

※胎土の数字　1. 長石　2. 石英　3. 角閃石　4. 滑石　5. 雲母

番号	出土地区	層位	器種	残存部位	形態の特徴	文様の特徴	口唇部施文	法量 口径	法量 器高	法量 器厚	色調 外	色調 内	胎土	焼成	器面調整 外	器面調整 内	備考
							断面形態										
61		Ⅲ	深鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－尖る	外　四角組合文 内　短沈線	刻目 平担形	－		8㎜	にぶい褐色	にぶい橙色	1·2	良好	ナデ	ナデ	
62		Ⅱ	深鉢	口縁部	口縁－直口 口唇－先端尖る	〃	刻目 平担形	－		8㎜	にぶい褐色	橙色	1·2·3	良好	ナデ	ナデ	補修孔あり
63		Ⅲ	深鉢	口縁部付近	－	外　綱代文 内　沈線	－	－		8㎜	橙色	橙色	1·2·3	良好	ナデ	ナデ	
64		Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－直下で外側に屈曲 口唇－平担面をつくる	内外　短沈線 内　押引き	刻目 平担形	－	6～9㎜		褐色	橙色	2·3	良	ナデ	ナデ	
65		Ⅲ	鉢	口縁部	口縁－外傾 口唇－肥厚させ丸みを帯びる	内外　短沈線 外　押引き	なし 丸形	－		6㎜	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1·2	良	ナデ	ナデ	外面に炭化物付着
66	6-G	Ⅲ	深鉢	口縁部付近	－	外　短沈線＋複合鋸歯文	－	－		8㎜	黒褐色	黒褐色	1·3	良	ナデ	ケズリ	
67	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		8㎜	にぶい褐色	にぶい黄褐色	1·2	良	ナデ	ケズリ	
68	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	黒褐色	橙色	1·3	良好	ナデ	ナデ	
69	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	黒褐色	橙色	1·2·3	良好	ナデ	ナデ	
70	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		8㎜	にぶい褐色	にぶい黄褐色	1	良	丁寧なナデ	ナデ	
71	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	黒褐色	にぶい黄橙色	1	良	ナデ	ケズリの後ナデ	
72	6-G	Ⅲ	鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	橙色	にぶい橙色	1·2·3	やや不良	ナデ	ナデ	赤色土粒含む
73	7-G	表採	深鉢	胴部	－	外　短沈線＋複合鋸歯文	－	－		7㎜	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	1·3	良	ナデ	ナデ	
74	6-G	1号住内	深鉢	胴部	－	〃	－	－		8㎜	橙色	明赤褐色	2·3	良好	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
75	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		10㎜	橙色	橙色	2·3	やや不良	ナデ	ナデ	赤色土粒含む
76	6·7-G	－	深鉢	胴部	－	外　短沈線＋複合鋸歯文 内　短沈線	－	－		7㎜	にぶい褐色	にぶい赤褐色	1·2·3	良好	ナデ	ナデ	
77	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		8㎜	橙色	にぶい黄橙色	2·3	良	ナデ	条痕のあとナデ	赤色土粒含む
78	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	外　複合鋸歯文	－	－		7㎜	明赤褐色	橙色	1·2·3	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
79	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	暗褐色	橙色	1·2	良好	ナデ	ナデ	
80	6·7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	にぶい黄橙色	浅い黄橙色	1	良	ナデ	ケズリ	
81	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	にぶい黄橙色	橙色	1·2	良	ナデ	ケズリ	
82	6·7-G	－	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	灰黄褐色	にぶい黄橙色	2 少量	良好	ナデ	ナデ	
83	6·7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	橙色	橙色	1·2	やや不良	ナデ	ナデ	赤色土粒多量に含む
84	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	にぶい橙色	橙色	1·2·3	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒多量に含む
85	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	外　複合鋸歯文	－	－		7㎜	橙色	褐色	1·2·3	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
86	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	灰褐色	褐色	1·2·3	良好	ナデ	ケズリ	
87	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	外　複合鋸歯文＋短沈線	－	－		7㎜	にぶい黄橙色	灰黄褐色	1	良	ナデ	ケズリ	
88	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		9㎜	にぶい橙色	黄橙色	3	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
89	6·7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	暗褐色	灰褐色	1·2	良	ナデ	ナデ	
90	6·7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	外　複合鋸歯文	－	－		8㎜	橙色	橙色	1·3	やや不良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
91	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	2·3	良好	ナデ	ナデ	
92	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	外　四角組合文	－	－		8㎜	にぶい褐色	にぶい黄橙色	1	良	ナデ	ケズリ	
93	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	にぶい褐色	にぶい黄橙色	1·2	良	ナデ	ケズリ	
94	6·7-G	－	深鉢	口縁部付近	口縁－直口	外　短沈線＋複合鋸歯文 内　短沈線＋山形	－	－		7㎜	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1	良好	ナデ	ケズリの後ナデ	
95	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	外　斜方沈線	－	－		7㎜	暗赤褐色	明赤褐色	1·2	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
96	6·7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	外　短沈線＋斜方沈線	－	－		8㎜	にぶい黄橙色	灰黄褐色	1	良	ナデ	ナデ	
97	6·7-G	－	深鉢	胴部	－	外　短沈線＋斜方沈線	－	－		8㎜	明赤褐色	明赤褐色	1·2·3	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
98	6-G	Ⅲ	深鉢	口縁部付近	口縁－やや外反	内外　短沈線	－	－		7㎜	黒褐色	暗赤褐色	1·2·3	良好	ナデ	ケズリの後ナデ	赤色土粒含む
99	6-G	Ⅲ	深鉢	口縁部付近	口縁－直口	〃	－	－		8㎜	暗赤褐色	明赤褐色	1·2·3	良好	ナデ	ケズリの後ナデ	赤色土粒含む
100	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	外　短沈線	－	－		7㎜	にぶい橙色	にぶい褐色	1·2·3	良	ナデ	ナデ	
101	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	橙色	にぶい黄褐色	1·3	良好	ナデ	ナデ	
102	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	にぶい黄橙色	にぶい橙色	1	やや不良	ナデ	ケズリ	
103	6·7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1·2	良	ナデ	ケズリ	
104	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		8㎜	明赤褐色	明赤褐色	1·2·3	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
105	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	赤褐色	暗赤褐色	1·2	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
106	6-G		深鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	橙色	にぶい黄橙色	1·3	良	ナデ	ケズリ	
107	6-G	Ⅳ	深鉢	口縁部	－	〃	－	－		7㎜	明赤褐色	橙色	2	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
108	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	暗赤褐色	暗赤褐色	1·2	良	条痕の後ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
109	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	外　短沈線	－	－		7㎜	明赤褐色	橙色	1·2	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
110	6·7-G	－	深鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	橙色	橙色	1·2·3	良好	ナデ	ハケ目ナデ	
111	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	にぶい褐色	にぶい橙色	1·2·3	良好	ナデ	ナデ	
112	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	明赤褐色	にぶい橙色	1·2	良	ナデ	条痕	赤色土粒含む
113	6·7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	にぶい橙色	にぶい黄褐色	1·3	良	ナデ	ナデ	
114	6-G	Ⅲ	深鉢	底部近く	－	〃	－	－		7㎜	にぶい橙色	にぶい黄橙色	1·2	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
115	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	橙色	赤褐色	2·3	良	ナデ	条痕	
116	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	外　斜方沈線	－	－		6㎜	にぶい褐色	にぶい赤褐色	1·2·3	良	ナデ	ナデ	
117	6-F	－	深鉢	胴部	－	〃	－	－		8㎜	にぶい橙色	灰褐色	1·2·3	良	ナデ	ナデ	
118	6·7-G	－	深鉢	胴部	－	外　綾杉文	－	－		7㎜	橙色	明赤褐色	1·2·3	良	ナデ	ナデ	
119	6-G	－	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	灰褐色	にぶい黄橙色	2·3	良	ナデ	ナデ	
120	6-G	表採	深鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	にぶい黄橙色	にぶい橙色	1·3	良	ナデ	ナデ	
121	－	表採	深鉢	胴部	－	外　綾杉文	－	－		6㎜	にぶい橙色	にぶい橙色	1·2·3	良好	ナデ	ナデ	
122	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	－	〃	－	－		7㎜	にぶい橙色	黒褐色	1·3	良好	ナデ	ケズリ	
123	6-G	Ⅲ	鉢	胴部	－	〃	－	－		6㎜	にぶい褐色	にぶい褐色	1·2·3	良	ナデ	ケズリ	
124	6·7-G	Ⅲ	鉢	胴部	－	〃	－	－		4㎜	にぶい黄橙色	浅い黄橙色	2·3	良好	ナデ	ケズリ	

第4表　曽畑式土器観察表(3)

1. 長石　4. 滑石
※胎土の数字　2. 石英　5. 蛍母
3. 角閃石

番号	出土地区	層位	器種	残存部位	形態の特徴	文様の特徴	口唇部施文	法量 口径	法量 器高	法量 器厚	色調 外	色調 内	胎土	焼成	器面調整 外	器面調整 内	備考
							断面形態										
125	6-G	Ⅲ	鉢	胴部	−	外 短沈線	−	−	−	4cm	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2-3	良好	ナデ	ケズリ	
126	6-7-G	−	鉢	胴部	−	外 四角組合文	−	−	−	4cm	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	2-3	良好	ナデ	ケズリ	
127	6-7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	外 短沈線＋磨区画 羽状文・斜方沈線	−	−	−	7cm	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1	良	ナデ	ケズリ	
128	−	Ⅱ	深鉢	胴部	−	外 羽状文	−	−	−	7cm	黄橙色	灰黄褐色	1-2	良	ナデ	ナデ	赤色土粒含む
129	6-7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	〃	−	−	−	7cm	にぶい黄褐色	灰黄褐色	1	良	ナデ	ナデ	
130	6-7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	〃	−	−	−	8cm	橙色	橙色	1-3	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
131	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	〃	−	−	−	6cm	にぶい褐色	にぶい黄橙色	1-2-3	良	ナデ	ナデ	
132	6-G	表採	深鉢	胴部	−	〃	−	−	−	7cm	にぶい褐色	にぶい黄橙色	1-3	良	ナデ	ナデ	
133	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	外 羽状文	−	−	−	7cm	にぶい橙色	にぶい黄褐色	1	良好	ナデ	ケズリ	
134	6-G		深鉢	胴部	−	〃	−	−	−	7cm	黒褐色	にぶい黄橙色	1	良	ナデ	ナデ	
135	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	外 沈線 斜方＋横	−	−	−	6cm	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1-2-3	良好	ナデ	ナデ	
136	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	〃	−	−	−	6cm	にぶい黄褐色	にぶい黄橙色	1-2-3	良	ナデ	ナデ	
137			深鉢	胴部	−	外 綱代文	−	−	−	7cm	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1-2-3	良好	ナデ	ナデ	
138	6-G	Ⅱ	深鉢	胴部	−	〃	−	−	−	7cm	にぶい褐色	黒褐色	1-2-3	良	ナデ	ナデ	
139	6-7-G		深鉢	胴部	−	〃	−	−	−	7cm	黒褐色	暗褐色	1-5	良好	ナデ	ナデ	
140	6-7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	外 四角組合文	−	−	−	7cm	黒褐色	黒褐色	1	良	ナデ	ナデ	
141	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	外 綱代文	−	−	−	7cm	にぶい褐色	橙色	1-2-3	良好	ナデ	ナデ	
142	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	外 斜方＋横沈線	−	−	−	7cm	灰黄褐色	浅い黄橙色	1-2-3	良	ナデ	ケズリ	
143	6-7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	〃	−	−	−	8cm	にぶい褐色	にぶい橙色	1-2-3	良好	ナデ	ナデ	
144	6-7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	外 綱代文	−	−	−	6cm	灰黄褐色	灰黄褐色	1	良	ナデ	ケズリの後ナデ	
145	6-7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	外 綱代文	−	−	−	6cm	灰黄褐色	にぶい橙色	1	良	ナデ	ケズリ	
146	6-7-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	〃	−	−	−	8cm	にぶい橙色	にぶい橙色	1-3	良好	ナデ	ナデ	
147	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	外 磨区画に三角＋ひし形文	−	−	−	7cm	黒色	黒褐色	1	良好	ナデ	ナデ	
148	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	外 四角組合文	−	−	−	8cm	黒褐色	暗褐色	1-2-3	良	ナデ	条痕の後ナデ	
149	6-G	Ⅲ	鉢	胴部	−	外 斜方沈線	−	−	−	6cm	黒褐色	灰黄褐色	1	良	ナデ	ケズリ	
150	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	〃	−	−	−	7cm	暗赤褐色	赤褐色	2-3	良好	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
151	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	外 四角組合文	−	−	−	8cm	にぶい褐色	にぶい黄橙色	3	良	ナデ	ケズリ	
152	6-7-G		鉢	底部	−	〃	−	−	−	5cm	にぶい黄橙色	浅い黄橙色	2-3	良	ナデ	ナデ	
153	6-G	Ⅲ	深鉢	胴部	−	外 短沈線＋綱代文	−	−	−	7cm	黒色	黒褐色	1	良	ナデ	ナデ	
154	6-G	集石内	鉢	底部	丸底	外 短沈線	−	−	−	5cm	にぶい褐色	灰褐色	2-3	良	ナデ	ナデ	
155	6-G	Ⅲ	深鉢	底部	丸底	外 X字区画＋短沈線	−	−	−	7cm	橙色	橙色	1-2	良	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む
156	6-7-G	Ⅲ	深鉢	底付近部	−	外 短沈線	−	−	−	7cm	浅い黄橙色	にぶい黄橙色	1	良	ナデ	ケズリ	
157	6-G	Ⅲ	深鉢	底部	丸底	外 綱代文	−	−	−	8cm	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	1	良	ナデ	ケズリ	
158	6-7-G	Ⅲ	深鉢	底部	丸底	ナシ	−	−	−	8cm	にぶい橙色	にぶい橙色	1-3	良	ナデ	ナデ	赤色土粒含む
159	−	−	深鉢	底部	丸底	ナシ	−	−	−	7cm	橙色	にぶい橙色	2-3	やや不良	ナデ	ナデ	
160	6-7-G	Ⅲ	深鉢	底部	丸底	ナシ	−	−	−	6cm	橙色	にぶい黄橙色	2	良好	ナデ	ケズリ	赤色土粒含む

施文は、行われるものと、そうでないものとは、割合的には差はないようである。

施文は胴部下半からの短沈線を連続させるが、(155) は十字の区画をなし、斜沈線を連続して埋め、全体文様が平行四辺形になる。施文の乱雑さは否めない。

(平井)

3．後・晩期

竜田陳内遺跡は、縄文時代後・晩期を中心とする遺物の散布地として、周知の遺跡である。近辺からは、今でも遺物の表出がみられるところである。

本調査においても、後・晩期に相当する土器が、細片も含め500点以上検出された。御領式（後期）を中心として、山の寺・夜臼系統があり、晩期に相当する。

出土分布を見ると、1—A、2—A、5—C、6—Cグリッドを中心とする、調査区東側に沿った地域と、6—Gグリッドの曽畑式土器検出区に分布する。

層位的には、撹乱・落ち込みにより下層に含まれる細片も多いが、Ⅱ層とⅢ層最上部と判断できる。

本報告では、検出した土器のうち42点を実測図として掲載し、以下、それらの土器について順次説明を加えていきたい。口縁部22点、胴部1点、底部19点である。

（1）は外反する頸部からほぼ直口気味に口縁部が続き、波状口縁の頂部にはV字形の切り込みを持つ。口縁帯に沿って2条の沈線文を配し、切り込みのある口縁部下部の稜に押点文を施し、器面を丁寧に研磨している。胎土・焼成は良く、色調は暗褐色から灰褐色を呈する。

（2）も外反する頸部を持ち、短い口縁帯は内傾する。（2）と同じく波状口縁の頂部にV字形の切り込みを持ち、口縁帯に2条の凹沈線を誂え、丁寧に横研磨を施す。復原口径28.0cm、器壁最大厚は8㎜を測る。色調は、外面がにぶい黄橙色で、内面が灰褐色を呈する。

（3）は深鉢型の無文土器である。口縁部内画直下に一条の沈線を巡らしている。両器面とも研磨され丁寧な仕上がりである。推定口径26.6cm、器壁厚5㎜を測る。内外面とも暗褐色を呈する。

（4）は「く」の字にしまった頸部から、やや外反気味に外開きする口縁部と、小さく脹らむ胴部を持つ無文の鉢型土器であろう。器面は内外とも研磨されているが、外面は炭化物が付着し内面にくらべ荒れている。復原口径21.4cm、器壁厚6㎜を測る。色調は、外面が明黄褐色地に部分的に黒みが広がり、内面は黄褐色を呈する。

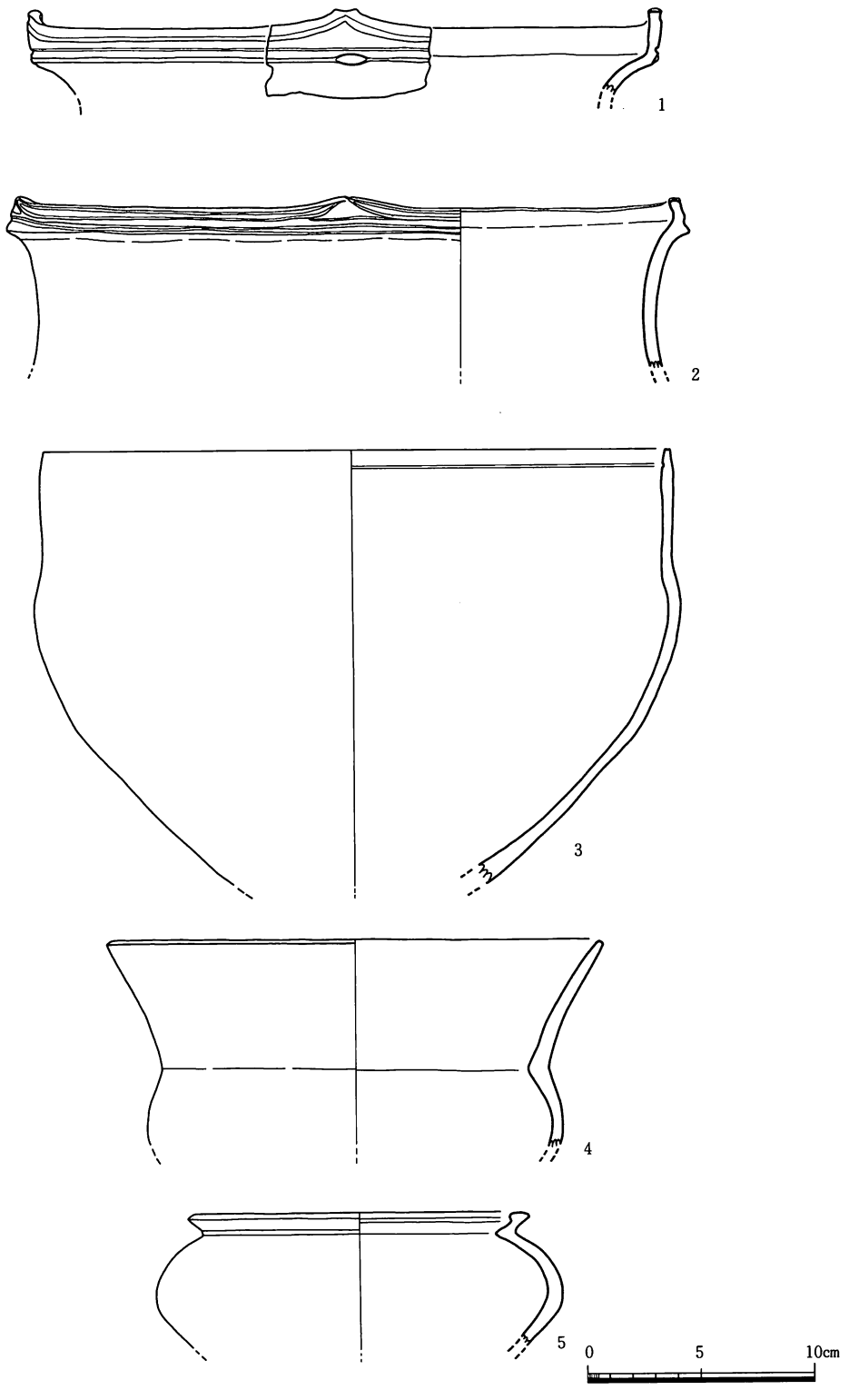
（5）は短頸の壺形土器である。復原口径13.2cm、最大径16.6cm、器壁厚は胴部で最大となり7㎜を測る。胎土・焼成ともに良好で、色調は内外とも暗褐色を呈する。

（6，9）はやや外反する頸部から、やや丸みを帯び内傾気味の口縁部へと続く。口縁帯には3条の沈線文を巡らし、横位に研磨を施している。（6）は焼成良好で、暗褐色を呈する。（9）は外面黄橙色、内面黒色を呈する。

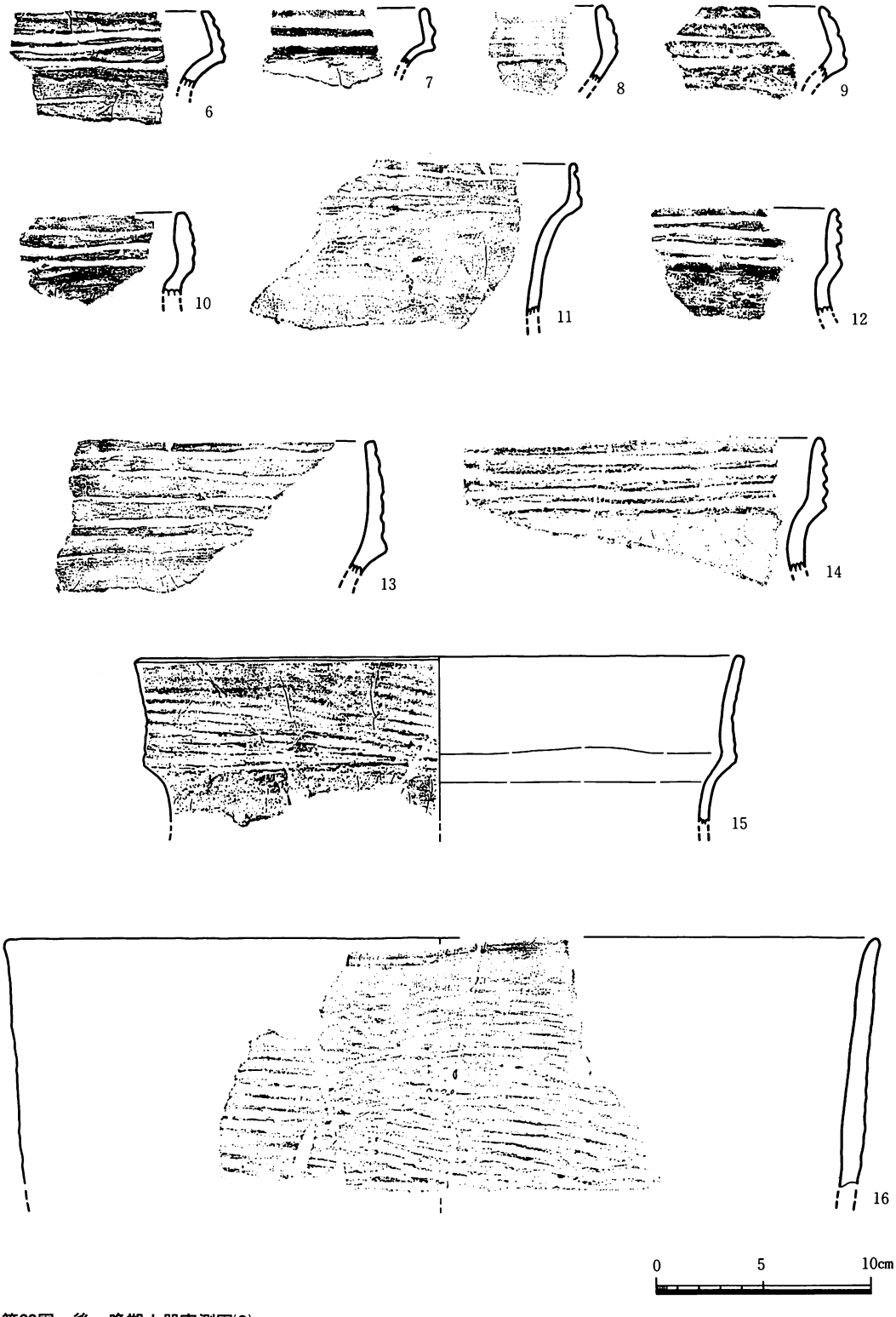
（7）は短い口縁部に2条の沈線を配し、横研磨され丁寧な仕上げである。やはり頸部は外反する。

（8）は丸みを帯び、内傾する口縁部を持つ浅鉢型の器形と思われる。口縁帯には3条の沈線を巡らし、横位の研磨を施しているが、幾分器面は荒れ気味である。色調は暗褐色を呈する。

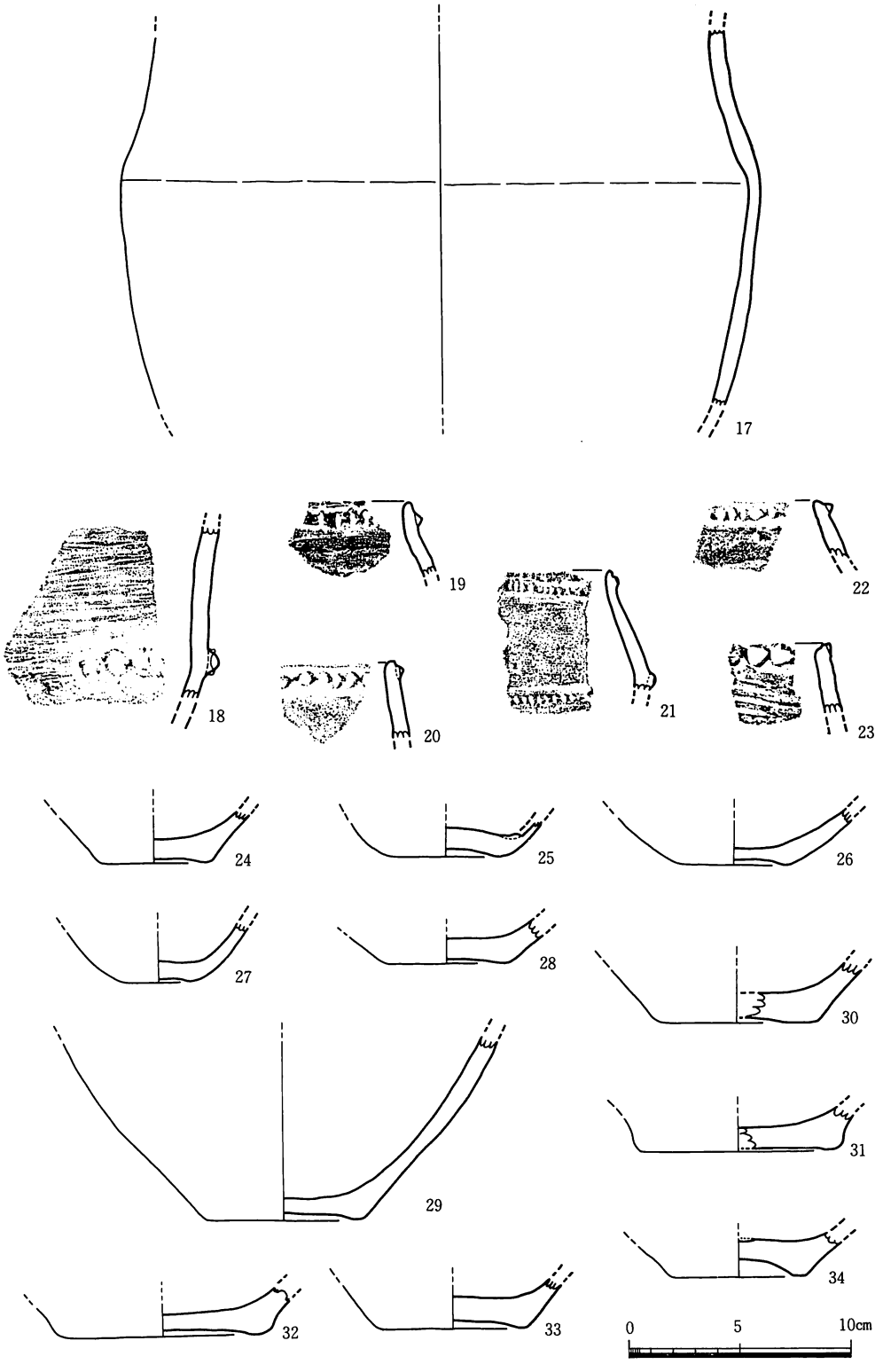
(10)は内傾気味に立ち上がる頸部に、やや内傾し丸みを帯びる口縁部を持つ。口縁帯には3・4



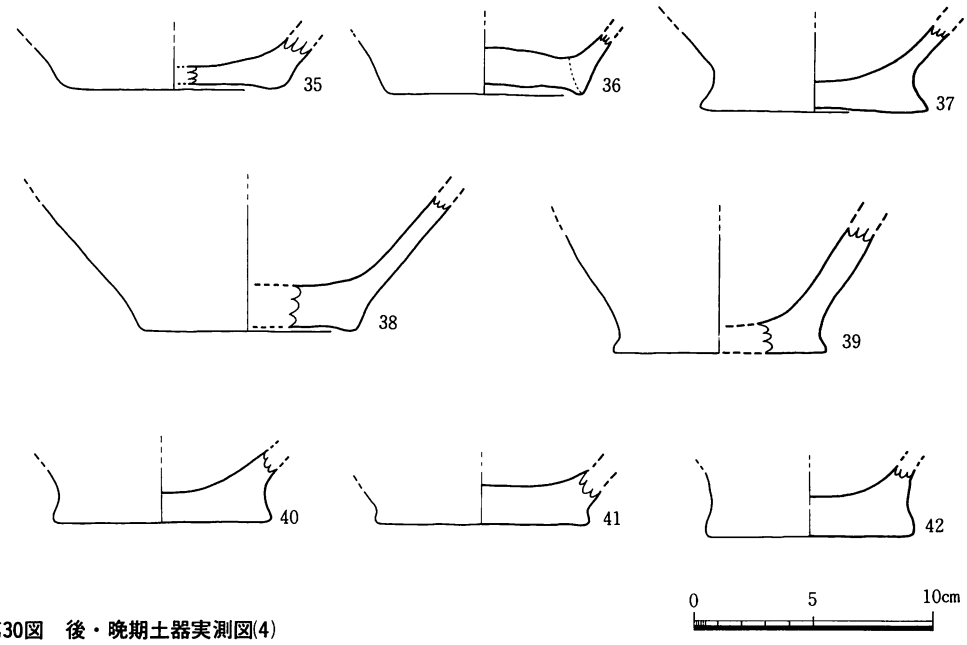
第27図　後・晩期土器実測図(1)



第28図　後・晩期土器実測図(2)



第29図　後・晩期土器実測図(3)



第30図　後・晩期土器実測図(4)

条の沈線を描き、横位の研磨を施すが、やや雑な感がある。外面明暗褐色、内面暗褐色を呈する。

(11)は外反する頸部に、やや内傾気味の口縁部を持ち、口縁帯には2条の沈線を施す。内外器面とも横位の研磨を施すが、砂質の胎土のためか器面が荒れている。色調は黒色を呈する。

(12)は内傾気味に外反し立ち上がる頸部から、4条の平行沈線を持つ口縁部に続く。器表に砂粒が目立ち、雑な仕上げであるが、焼成は良好である。

(13)は外反する頸部から幅広の口縁部へと続く。やはり内傾し丸みを持つ口縁部に、5条の沈線文を巡らす。横位の研磨を施している。外面明黄褐色、内面灰褐色を呈する。

(14)はやや内傾気味に立ち上がる頸部に、ほぼ直口する口縁部を持つ。口縁帯に4条の沈線を持ち、内外とも横位の研磨を施す。色調は、褐色ないし暗褐色を呈する。

(15)は外反する頸部が幅広の口縁部に続くが、口縁部はやや外反し、口縁外面全体に条痕を施し、横位の研磨を施している。復原口径27.6cmを測る。外面暗褐色、内面淡赤褐色を呈する。

(16)は大型の深鉢形土器の器形を持つと思われる口縁部である。現存する外面全体に条痕を施している。内面は横位の研磨を施す。復原口径40.6cm、器壁厚10mmを測る。内外面とも暗褐色を呈する。

(17)は深鉢形土器の胴部である。胴脹部で復原口径37.6cmを測る。胴上部は縦位、胴脹部は横位、そして胴下部は縦位の研磨が施されている。内面は横位の研磨を見る。胎土・焼成は良好で、色調は灰黄色を呈する。

(18～23)は晩期相当の口縁部片である。

(18)は口唇部を欠くが、外開きの口縁下部にリボン状の刻目突帯文を施している。口縁外面には、条痕状調整が窺える。砂質に富む胎土であるが、焼成は良好である。外面黄橙色、内面灰黄色を呈する。

(19～23)は夜臼系統のものと思われる。(21)は「く」の字に屈曲する肩部と口縁外面直下に2条の刻目突帯文を配する。他も同様のものと推定する。いずれも器面には条痕が窺えるが、(19. 21)は条痕を弱く磨り消している。胎土・焼成は良好である。

色調は、(19)外面暗褐色、内面赤褐色、(20)黄橙色、黒灰色、(21)黒色、灰黄褐色、(22)明黄褐色、(23)黒褐色、淡灰褐色を呈する。

(24～42)は底部である。底径からみて2グループに分けられる。3.0～5.0cmで短径の底部と、6.0～9.6cmの長径のそれである。前者は浅鉢形土器の底部の可能性が高く、後者は鉢形、深鉢形の器形の底部であろう。全体的に見ると、(24～38)のように、上げ底が多く見られ、平底は(39, 40, 41, 42)の如くに少例であった。

底部における調整は、(24, 29, 30, 38)の外面に研磨が窺え、(30, 38)は上部まで現存するが、丁寧な縦研磨を施している。他は現存状態の関係で観察できていないが、(24, 26, 27, 32, 38, 40)のように底部内面に研磨を施すものもあった。

底部の諸形態による、後期、晩期の判断はできなかった。　(平井)

4．石器（第31図～第35図）

竜田陳内遺跡より出土した、縄文時代の物と推測される石器および石製品は、明らかに加工の痕跡の認められる遺物の総数で53点にのぼる。その内訳は、石斧が20点（打製石斧16、磨製石斧４）、石製品が９点（石匙３、磨石２、石錘２、スクレーパー２）、石鏃が20点、その他４点（石器母岩１、不明３）となる。これらの内、出土した層や位置が特定できるものは少なく、殆どは表採による遺物である。ここでは、これらの石器や石製品について、一覧表をもって観察結果をまとめるほか、器種毎に見られる特徴について述べてみたい。

〔打製石斧〕

20点を数える石斧の内、遺物番号（１～16）が、打製石斧である。縄文時代の打製石斧の形態は、一般に次の三種に分類するのを通例とする。①短冊形（長方形のもの）②撥形（両側縁が刃部にかけて広がるもの）③分銅形（上下両端にくらべ中央部がくびれたもの）

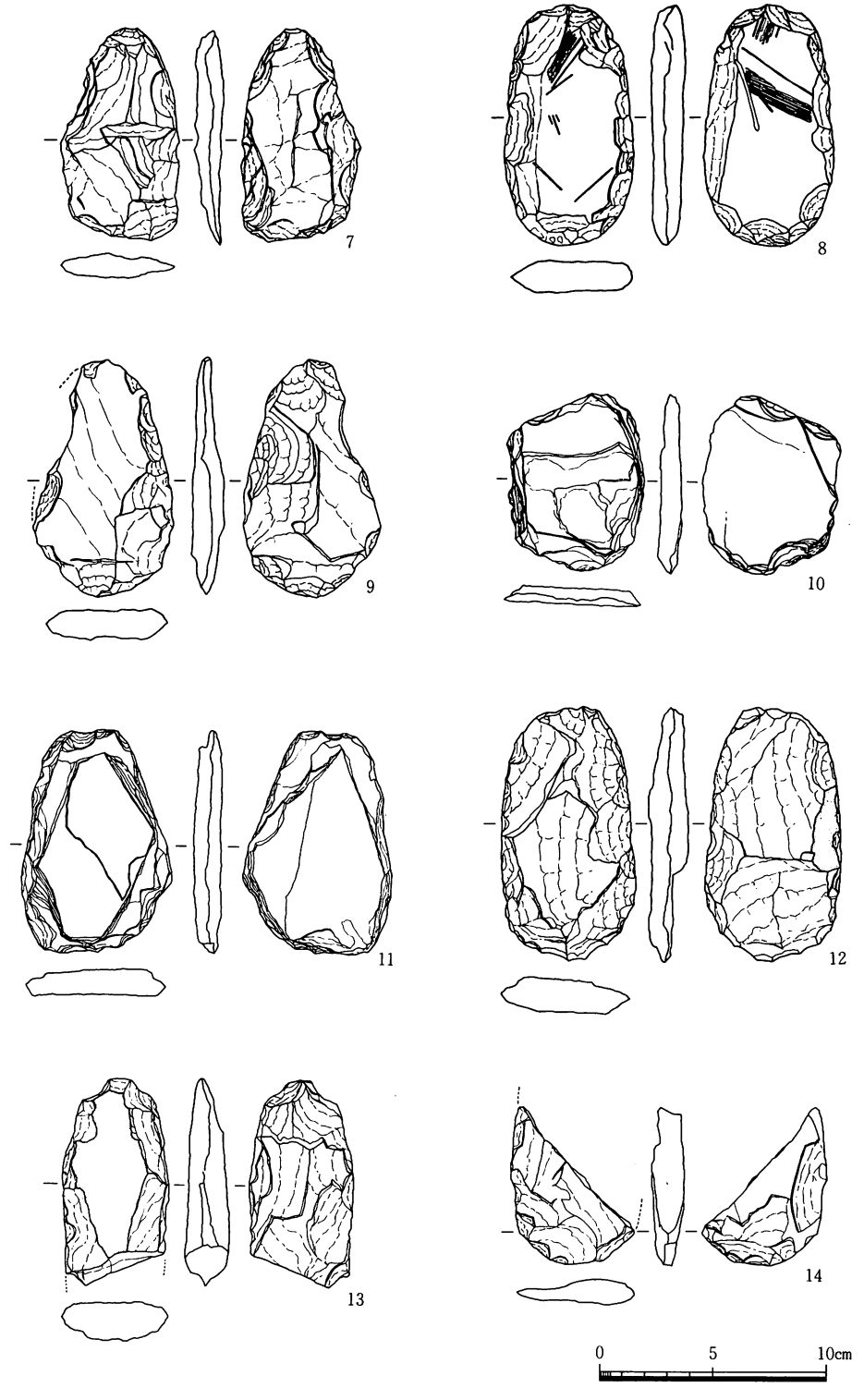
当遺跡出土の打製石斧を、この分類にあてはめてみると、ほぼ全点が広義の短冊形に含まれていると思われるが、さらに特徴により三形態に分類することができる。(註１) A（両側縁が平行になるもの）、B（刃部がやや広がるもの）、C（全体的に丸みを帯びるもの）以上の三種である。その内訳は、Aタイプと推定されるもの２点、同じくBタイプ５点、Cタイプ５点、不明４点となっている。これらの特徴は、ほぼ本県全体に見られる傾向に合致していると言って良い。

そのほか、観察によってほぼ共通にみられる特徴を次に掲げてみたい。先ず、①扁平な遺物が多く、かつ側面からみると緩やかに湾曲したものがしばしばみられること。②調整が荒いものが多く、恐らく多量に制作された石器の一群であろうということ。③刃部の摩耗（片減りしているものが多い）および欠損の程度が激しく、使用に際して傷つき廃棄された可能性が高いこと、以上の諸点である。

磨製石斧の普及とともに、打製石斧は次第にその用途を変え、土掘り具などとして使用されることが多くなり、特に縄文後・晩期頃からの遺物数の増加は、そのことを裏付けていると言われる。当竜田陳内遺跡出土の遺物の多くも、以上のことから恐らくは、土掘りなどの用に供されたものと推定される。

次に興味深いのが、石材の問題である。当遺跡から出土する打製石斧の石材はほとんどが、安山岩系であるが、その内１点が二子山遺跡（石器制作址）からもたらされたものと推定された。(註２) 二子山石器製作址は、菊池郡西合志町野々島に位置し、露頭する金峰山系の安山岩を利用して縄文後～晩期にかけて、おびただしい数の石斧が生産された遺跡である。この遺跡の産する石斧は、遺跡を中心に半径約20kmの範囲に分布しており、その南限が白川とされている。(註３) 同遺跡からの石斧は、白川右岸の緑ケ丘遺跡などでも採集されているのに続き、二子山から直線距離約10kmの当遺跡でも確認され、この時代の人々の移動の状態の一端を窺わせている。

第31図　出土石器実測図(1)



第32図　出土石器実測図(2)

〔磨製石斧〕

磨製石斧の出土は4点である。(遺物番号17～20) 資料数に乏しく、遺跡としての特徴を挙げ得ないが、いずれも刃部には傷や欠損が、また本体の途中から折れているものもあり、使用の痕跡を留めている。木材の加工などを目的として製作・使用されたものであろう。なお(20)の乳棒状石斧には、側面に敲打面が残る。

〔石匙〕

石匙は3点が出土している。(遺物番号21～23) 内1点は、縦型に近く、異形である。

〔打製石鏃〕

石鏃の出土は20点である。(遺物番号24～43) その内、(33, 37, 40)の3点の遺物が、6—G区のⅢ層から曽畑式土器にともない出土したほかは、表採などの遺物が多く、厳密に層位を確認することはできなかった。

石材は、20点中8点が黒曜石であり、その産地は色調などから、西北九州よりもたらされた物に酷似している。恐らくは佐賀腰岳産のものと推定される。ただ(34)のみは、色調が薄い灰色であり、他の7点の遺物とは異なっている。なお阿蘇火山系と推定される黒曜石は出土遺物の中には見られなかった。

石鏃の分類は、まず柄の有無により有茎鏃と無茎鏃とに二分されるが、当遺跡出土の石鏃は全点が無茎鏃である。以下、資料数は少ないが、基部や全体の形態から、次の7つに分類を試みた。

Aタイプ (凹基で長身のもの)

(24)のみ1点が出土。

Bタイプ (凹基でほぼ標準長のもの)

(25, 32)の8点が出土。

Cタイプ (凹基で小型のもの)

(33, 34)の2点が出土。やや時期は古くなるかも知れない。

Dタイプ (凹基で脚部がやや丸みを帯びる。いわゆる円脚鏃に近いもの)

(35, 37)の3点が出土。

Eタイプ (平基でほぼ標準長のもの)

(38, 40)の3点が出土。

Fタイプ (平基でほぼ正三角に近いもの)

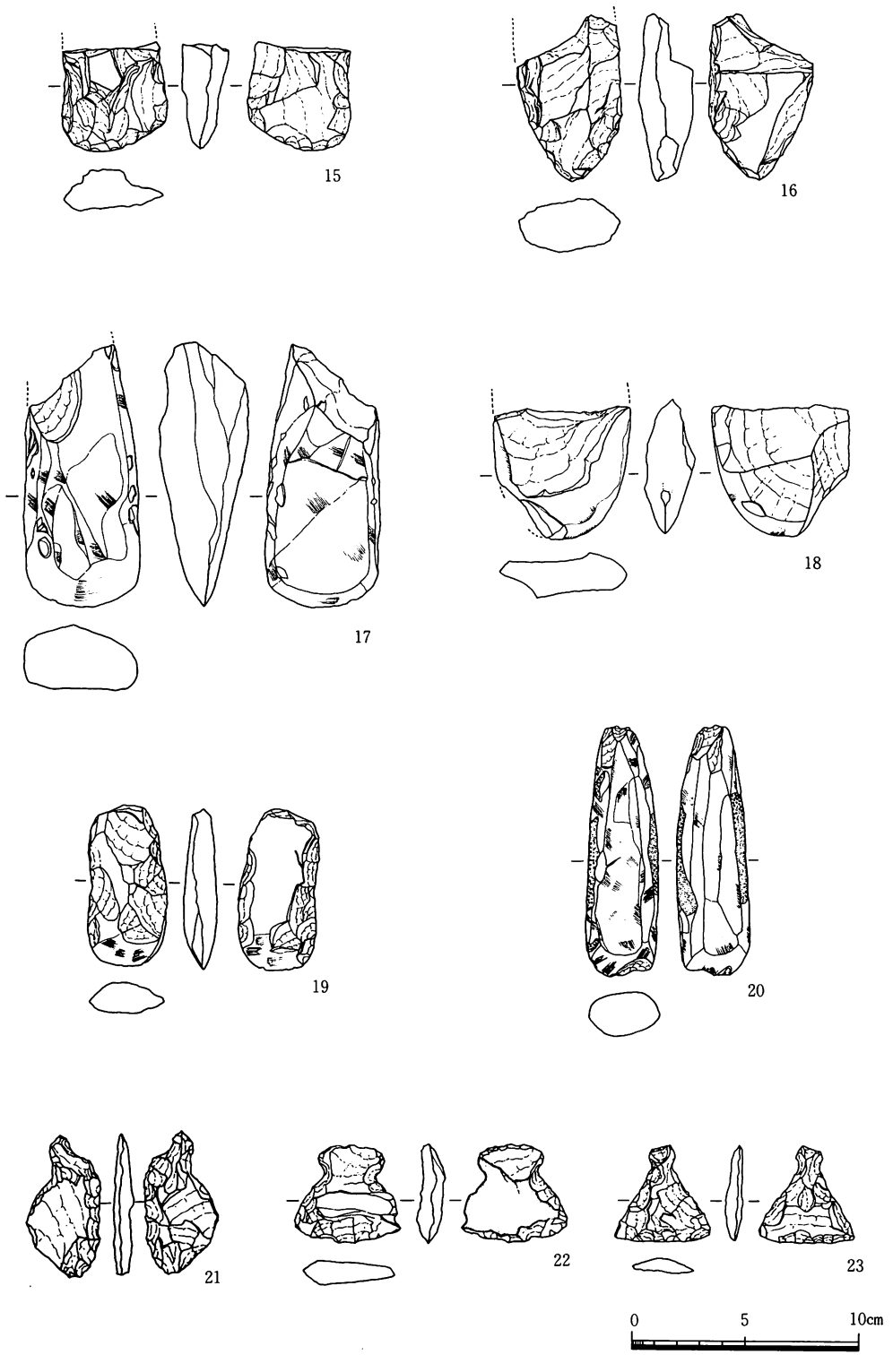
(41, 42)の2点が出土。

Gタイプ (平基で全体的に丸みを帯びるもの)

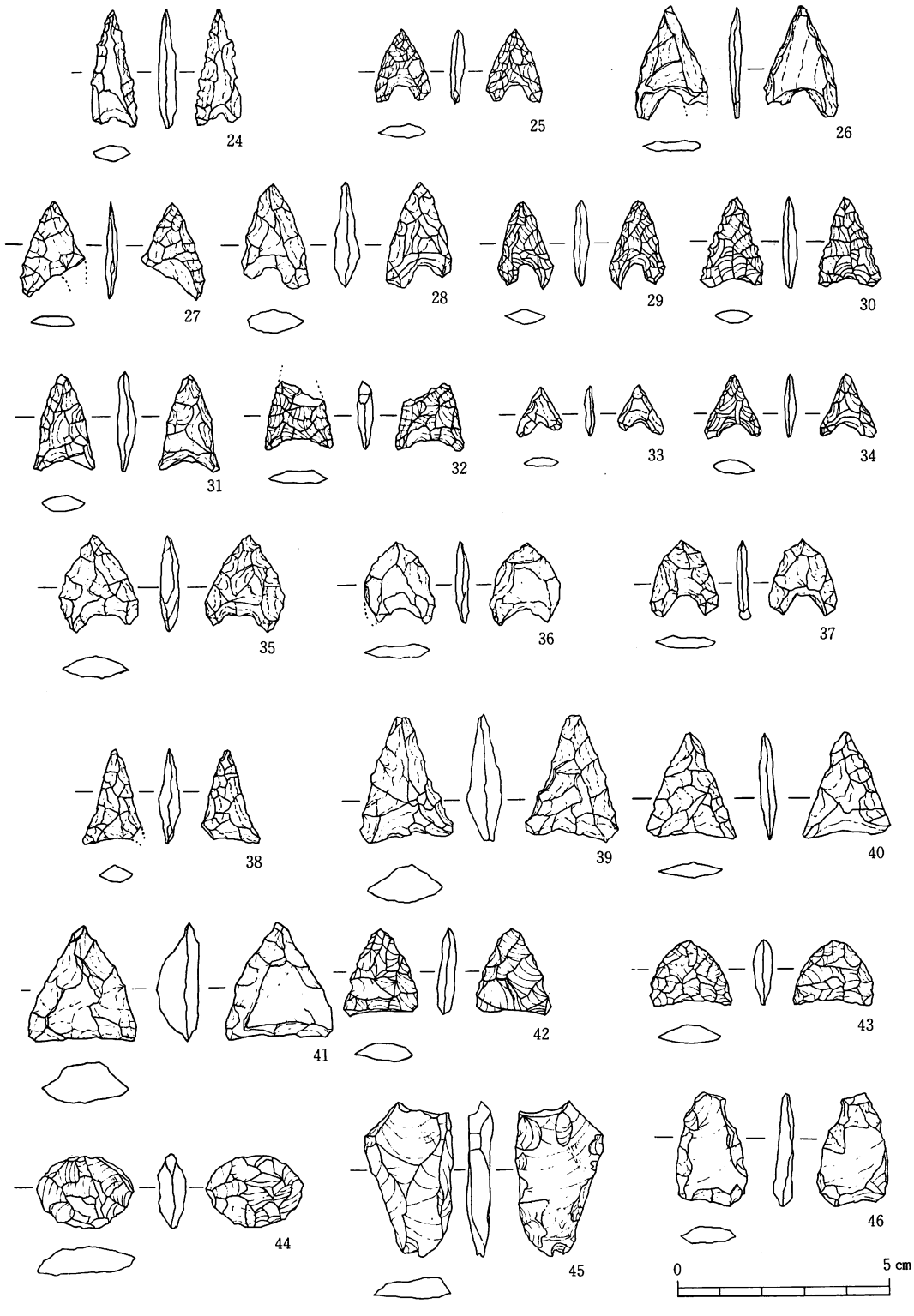
(43)のみ1点が出土。

〔小型異形石器〕

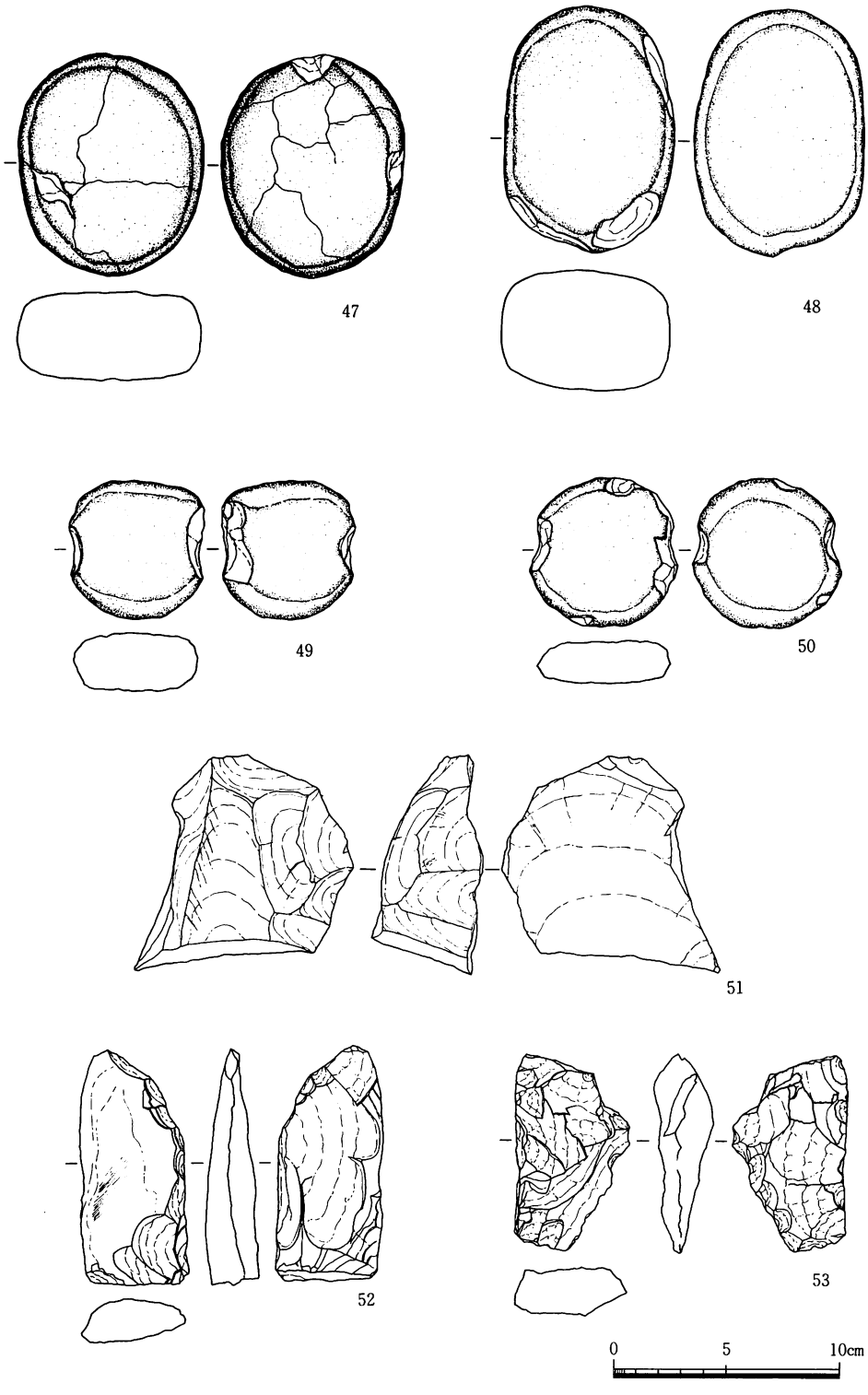
3点(44～46)、(44)は楔形石器、(45)は用途は不明だが、あるいはスクレーパー状に使用したもの



第33図　出土石器実測図(3)



第34図　出土石器実測図(4)



第35図　出土石器実測図(5)

か。(46)は石鏃の未成品と思われる。

〔磨石〕

2点（47，48)、河原石を利用したもので、使用により上下、左右が摩耗している。

〔石錘〕

2点（49，50)、石錘には縄掛け用の切り込みとして円石の両端を打ち欠くほか、周囲に溝を巡らせたものが存在する。こうした有溝石錘の場合は、その用途を魚網錘に特定できるが、当遺跡出土の遺物は、礫器の両端を打ち欠いただけの礫石錘であり、編物を編む際の錘としての用途も考えられる。ただ剥離面がかなり摩耗していることや、当遺跡が白川の直近に位置することなどから、白川での漁労に際して使用された可能性も高いと考えられる。なお2点とも扁平な石を加工している。

〔石器母岩〕

1点（51)、石質は安山岩であり、全面に剥離面がある。ただ剥片を何かに利用したものか、この母岩自体を石器に加工して利用しようとしたものかは不明である。

〔不明〕

2点（52，53)、(52)は一部に研磨の痕跡が残り、あるいは磨製石斧の残欠部分かも知れない。(53)は、石質は玄武岩で、調整は荒い。側面を刃部として加工して、一種のスクレーパーとして利用したものか。　（丸山）

註1．石斧の分類は、―『伊坂・上ノ原遺跡』村井眞輝・木崎康弘ほか　昭和61年　熊本県教育委員会―の分類に準じた。それによると、当遺跡の打製石斧は、同報告中のⅠ形態に全点が含まれ、さらにⅠ形態中のａ，ｂ，ｃの三形式が、当遺跡のＡ．Ｂ．Ｃの三タイプに相当する。

註2．隈昭志氏の御教示による。

註3．隈昭志、三島格ほか『二子山石器製作址調査報告書』昭和46年　西合志町教育委員会

（注、（　）内の数値は、現存値）

番号	図版	器種名	分類	石質	色調	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	出土地点	所見
1	31	打製石斧	A	安山岩	灰黄色	(101.2)	68.0	14.2	139.47	表採	片刃、刃部は磨耗、上半分が欠損、二子山石器製作址からの搬入品か。
2	31	〃	A	〃	〃	113.8	48.5	23.8	128.37	表採	調整が荒く未成品か。刃部が大きく欠損している。
3	31	〃	B	〃	〃	130.5	55.2	22.4	180.91	7-D，Ⅱ層	側面にツブレ有り、装着痕か。
4	31	〃	B	〃	〃	110.4	61.2	18.0	120.96	表採	扁平、刃部の片方が大きく欠損。
5	31	〃	B	〃	〃	149.5	68.7	23.8	244.05	6-G,1号住No.12	刃こぼれが多く片減りしている。両側面にツブレ多し。
6	31	〃	B	〃	〃	140.8	57.5	25.0	202.52	3-C	刃部より大きく剥落、左右両側面にツブレ有り。
7	32	〃	B	〃	〃	93.2	52.5	12.8	73.50	7-G,Ⅲ層,No.56	扁平、上部側面の一方が欠損。刃部は片減り。
8	32	〃	C	〃	〃	105.8	57.5	14.4	128.87	No.132-4	扁平、中～上部にかけてスジ状の傷有り。なお刃部は使用のため均等に磨耗している。側面にツブレ有り。
9	32	〃	C	〃	〃	104.7	62.0	14.2	84.45	6-G，覆土	扁平、上部側面が欠損。刃こぼれ有り。
10	32	〃	C	緑泥片岩	緑がかった灰色	78.0	61.0	10.9	64.24	表採	扁平、刃こぼれ有り。上部は欠損か。
11	32	〃	C	〃	〃	98.6	67.0	11.8	114.87	3-C	扁平、刃こぼれ多し。
12	32	〃	C	玄武岩	黒色	111.5	59.8	17.8	113.34	2号住、B区一括	扁平、刃部に刃こぼれあるも調整の際のものか。側面にツブレ有り。
13	32	〃	A／B？	安山岩	灰黄色	(91.6)	46.9	20.0	93.70	2-A,(撹乱)	上半分欠損、側面にツブレ有り。
14	32	〃	不明	〃	〃	(70.0)	54.5	14.4	43.79	表採	扁平、刃部のみ残存。刃部は磨耗している。
15	33	〃	不明	〃	〃	(48.0)	46.5	20.8	45.16	6-G,1号住，C，E区一括	上部欠損、刃こぼれ有り、刃部は片減り。
16	33	〃	不明	〃	灰白色	(73.1)	45.5	24.2	75.31		上部半分が欠損。
17	33	磨製石斧		玄武岩	青灰色	(115.8)	52.0	39.4	259.70	表採	肉厚、片刃に近い両刃。使用に伴う刃こぼれが数ケ所見られる。上部は欠損。
18	33	〃		〃	〃	(58.3)	60.9	22.4	75.19	表採	上部が欠損したあと加工して、上部を刃部として再利用したものか。なお元の刃部には、刃こぼれ有り。側面にツブレが見られる。
19	33	〃		〃	黒色	70.8	35.8	14.9	43.80	No.132-4	小型、使用に伴う刃こぼれ有り。側面に剥落箇所多し。
20	33	〃		〃	黒褐色	119.9	32.8	20.0	100.28	No.132-4	乳棒状石斧。刃部の一部は使用に伴い欠損している。両側面に敲打面が残る。
21	33	石匙		〃	暗灰色	63.0	32.9	9.8	15.81	表採	縦型。調整は荒い。
22	33	〃		〃	灰黄色	43.5	47.8	13.0	18.78	O-B,試掘抗	肉厚。
23	33	〃		〃	暗灰色	43.0	42.0	7.2	9.58	6-G，トレンチⅢ層，T-17	
24	34	打製石鏃	A	黒曜石	オリーブ灰色	28.5	11.0	4.0	0.84	1-A，Ⅱb層.No.53	鋸歯状で鋭利、丁寧に調整を施す。

第５表　出土石器一覧表(1)

（注、（　）内の数値は、現存値）

番号	図版	器種名	分類	石質	色調	長さmm	幅mm	厚さmm	重量g	出土地点	所見
25	34	打製石鏃	B	黒曜石	黒色	17.0	14.2	3.2	0.41	2-B，Ⅱb層．2点中の②	
26	34	〃	B	緑泥片岩	緑がかった灰色	26.2	17.0	3.0	1.10	1-A，Ⅱb層	脚部の一方が欠損。扁平。
27	34	〃	B	玄武岩	オリーブ灰色	22.2	15.0	2.8	0.52	表採	脚部の一方が欠損。
28	34	〃	B	〃	灰黄色	24.2	16.0	6.2	1.49	2号住、覆土一括	脚部の一方が欠損。
29	34	〃	B	黒曜石	黒色	20.0	13.2	3.5	0.65	表採	
30	34	〃	B？	〃	〃	21.0	15.0	3.2	0.75	表採	刃部は鋸歯状。
31	34	〃	B？	玄武岩	暗灰色	22.8	14.5	4.5	0.89	表採	
32	34	〃	B？	黒曜色	黒色	(16.0)	16.0	3.7	0.68	表採	上部半分が欠損。
33	34	〃	C	玄武岩	暗灰色	11.8	11.5	2.2	0.1	6-G，No.174	小型
34	34	〃	C	黒曜石	オリーブ灰色	15.0	13.5	2.9	0.29	表採	小型
35	34	〃	D	玄武岩	黒色	23.0	18.7	4.3	1.40	1-A，Ⅱb層	円脚
36	34	〃	D	〃	暗灰色	19.0	17.1	3.0	0.86	2-B，Ⅱb層．2点中の①	脚部の一方が欠損。
37	34	〃	D	〃	〃	18.0	16.0	2.3	0.60	6-G，No.687	円脚
38	34	〃	E	〃	オリーブ灰色	22.0	14.0	5.0	0.77	2-B，Ⅱb層一括	脚部の一方が欠損。
39	34	〃	E	〃	灰黄色	29.5	22.0	8.0	3.15	4-C，溝中より	
40	34	〃	E	チャート？	灰白色	24.0	21.0	4.0	1.22	6-G，Ⅲ層No.611	
41	34	〃	F	玄武岩	黒色	27.0	25.0	9.7	4.7	表採	肉厚、丁寧に調整。
42	34	〃	F	黒曜石	〃	20.8	17.8	4.2	1.25	表採	あるいは、基部が欠損したものか。
43	34	〃	G	〃	〃	15.7	19.5	4.7	0.96	表採	先端部欠損。
44	34	楔形石器		〃	〃	17.0	23.0	6.8	2.08	1-B，焼土混じり	用途は不明。両側面の刃部に刃こぼれ有り。
45	34	小型異形石器		〃	〃	36.4	21.0	6.3	3.84	6-G，Ⅲ層	スクレーパとして用いたものか。
46	34	〃		〃	灰色	27.0	17.0	4.3	2.17	1-A，	刃部は加工の途中、石鏃の未成品か。
47	35	磨石		安山岩	灰白色	98.7	82.4	39.1	412.57	表採	上下左右全面が使用のため摺り減っている。
48	35	〃		〃	〃	108.5	75.6	53.0	621.57	表採	〃
49	35	石錘		〃	灰黄色	62.0	60.1	25.9	126.13	表採	使用のためか摺り減っている。
50	35	〃		〃	黄褐色	66.0	65.9	18.9	112.21	表採	扁平、使用のためか、摺り減っている。
51	35	石器母岩		〃	灰白色	95.8	98.0	50.2	398.04	3-C	各面に剥離面有り。
52	35	不明		〃	灰黄色	105.0	49.1	22.4	129.80	No.132-4	未成品か。片方の面（自然面）を磨いた痕跡有り。
53	35	〃		？	黒色	87.7	51.0	25.6	287.27		用途は不明だが、側面を刃部として、スクレーパのように利用したものか。

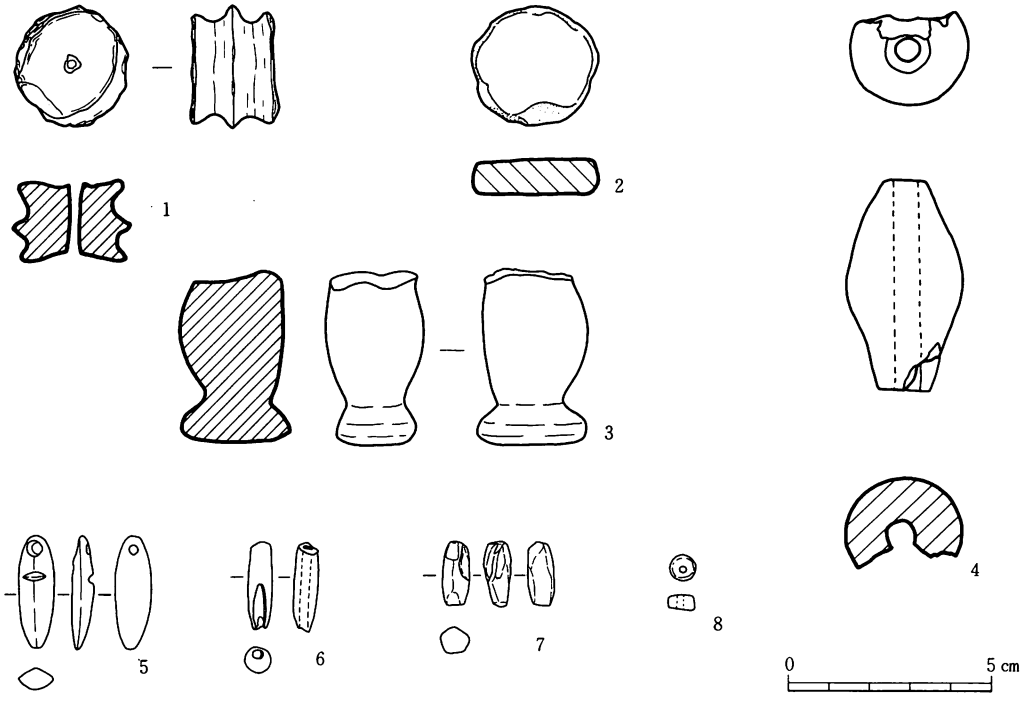
第6表　出土石器一覧表(2)

5．その他の遺物　（第36図）

縄文時代のものと推定される遺物は、以上のほかに、土製品および玉類がある。まず土製品であるが、当遺跡からは4点が出土している。

（1）は用途不明の2連のボビン形をなす有孔土製品である。明黄褐色を呈する。（径23～30㎜高さ21㎜重量16.0ｇ）（2）は縄文土器の転用品と思われる。円形状に磨いたもので、灰黄褐色を呈する。6－B区出土。（径約30㎜厚さ8～9㎜重量10.5ｇ）（3）は1－A区より出土した土偶の脚部片である。黄褐色を呈し、器表は丁寧なナデ調整を行っている。（残存器高33㎜足28×20㎜脚部最大径26㎜重量30.2ｇ）（4）は瓦質製と思われる硬質の土錘の表採品である。灰黄色を呈し、一部を欠損している。（長径29㎜短径11㎜高さ52㎜重量26.3ｇ）

玉類は4点の出土である。（5）は、垂飾である。（長さ28.0㎜幅8.7㎜厚さ5.2㎜孔径2.8㎜）硬玉製で、薄い緑色を呈している。表面の風化の程度は激しい。（6）は、管玉である。（長さ22.1㎜直径6.5㎜孔径2.4㎜）硬玉製で、緑色である。上端と下部の側面の一部が欠損している。穿孔の際、上下双方から試みたことが分かるが、下部からの穿孔の際、失敗したものらしい。（7）は、管玉の未成品である。（長さ16.0㎜直径6.9㎜）加工の途中らしく、各面が研磨され、角張っている。孔は開けられていない。色調は黒色を呈する。硬玉製か。（8）は丸玉である。（長さ3.9㎜直径6.3㎜孔径1.8㎜）色調は薄い緑色で、硬玉製か。なお（8）が1－A区のトレンチ内から出土しているほかは、3点とも表採による遺物である。　（平井、丸山）



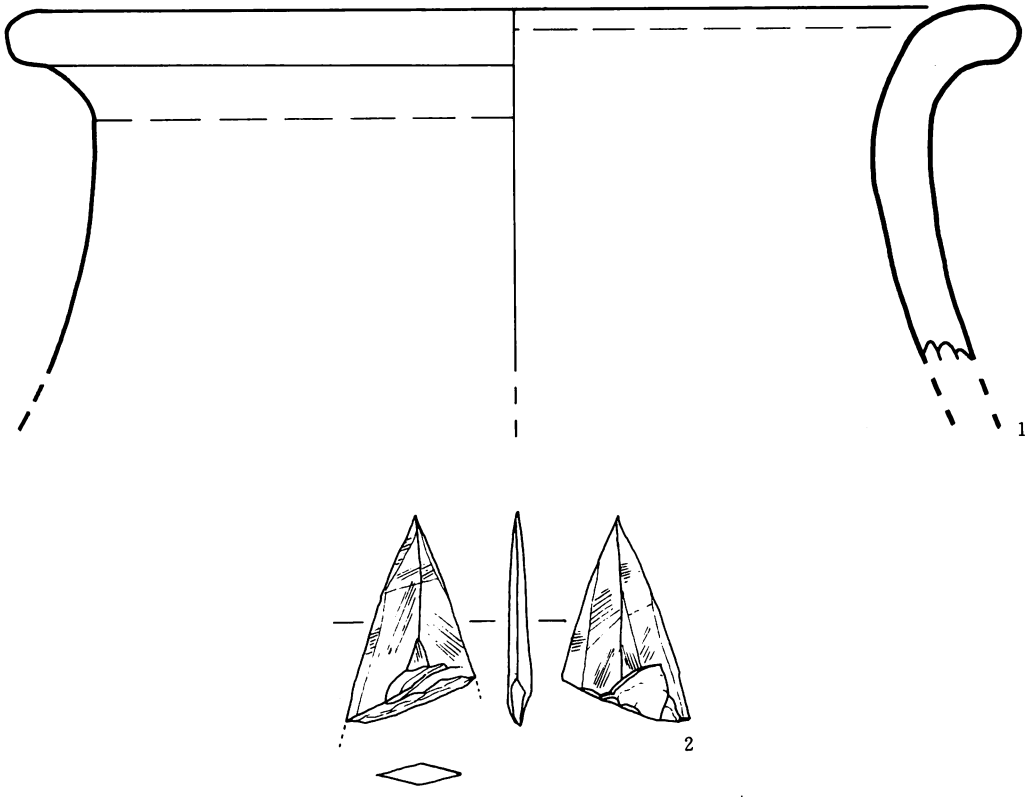
第36図　その他の遺物実測図

第３節　弥生時代

弥生時代の遺物は少なく、僅かな土器片と石器片が見られるに止まっている。２点を報告しておきたい。

（１）は壺の口縁部片で、復原した口径は14.1cmを測る。強い外反を示し、口唇部は丸くおさまる。良質の胎土には赤褐色や黒褐色の石粒、それに長石粒が含まれている。良好な焼成で、明褐色を呈している。器面には特徴的に研磨が施されている。熊本県地方に類例の少ない資料で、明確な時期的位置づけは今後に待たねばならないが、ここでは弥生時代前期遺物として報告をしておきたい。

（２）は磨製石鏃の先端部片である。石質は青灰褐色を呈する片岩である。先端及び両刃は鋭く仕上げられるが、鏑はやや不整である。　（江本）



第37図　弥生時代遺物実測図

第4節　古墳時代

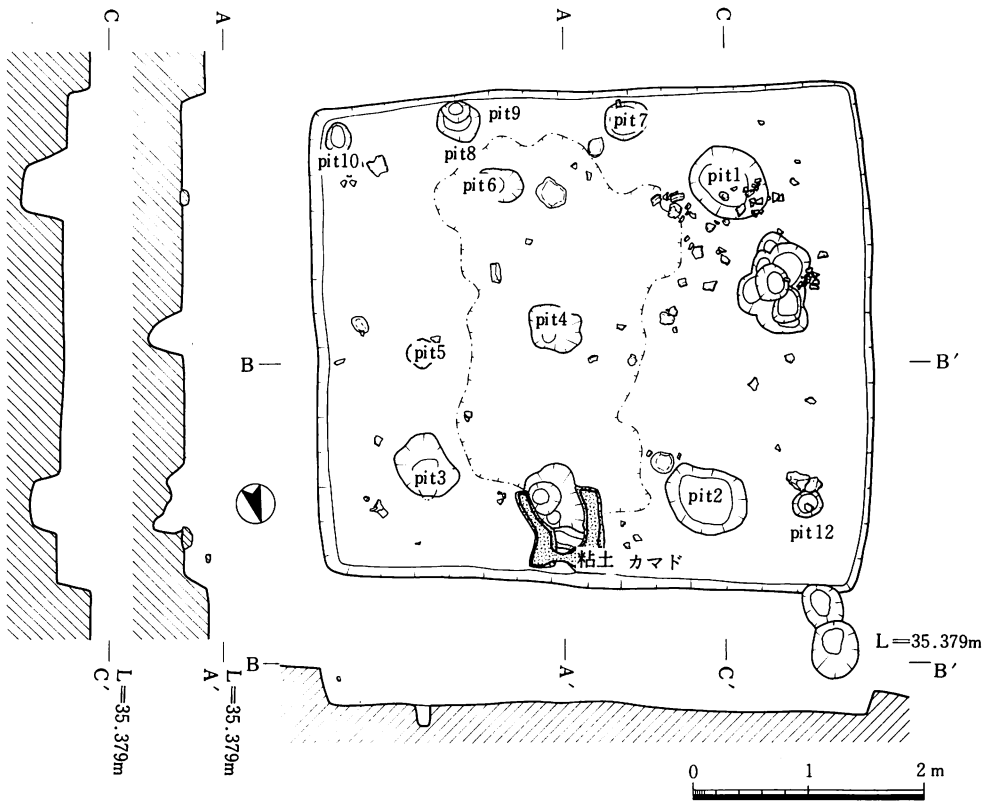
1．第1号住居址

〔構造〕(第38，39図)

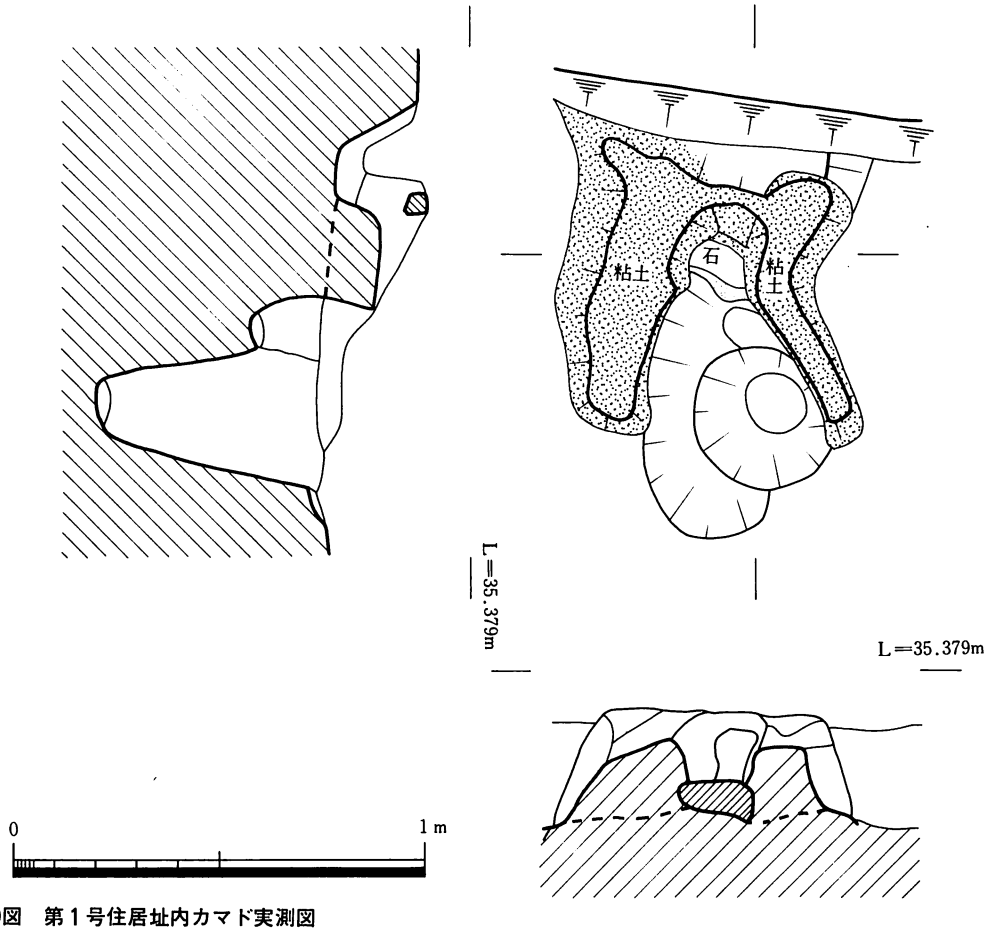
調査区西側部分の、一段下がったテラス状の平地（6－G区付近）に検出された竪穴住居址である。この住居址は、主軸方位をN－16°55′－Eに取り、長辺4.92m，短辺4.38mの方形プランを呈する。深さは24cm程度と浅いことから、上部はかなり削平を受けているものと考えられる。

住居址北壁のほぼ中央部には、作り付けの竈が設置されている。竈はやや破壊されているが、黄灰色の粘土により主部分となる袖を作り、煙出し部も住居址内部に設けられていたことが分かる。また床面には、ほぼ中央を南北に細長く伸びる硬化面のほか、柱穴と思われるピット1・2・3を検出している。当住居址は、4本柱の構造と考えられるが東南コーナー付近に想定される柱穴は、確認できていない。

住居址に伴う遺物として、散在的であるが土器が出土した。土器は土師器の坏身、壺などの破片のほか、わずかに須恵器の坏身片が含まれていた。当住居址は、これらの土器の器形的特徴から古墳時代に相当する遺構と判断している。



第38図　第1号住居址実測図



第39図　第1号住居址内カマド実測図

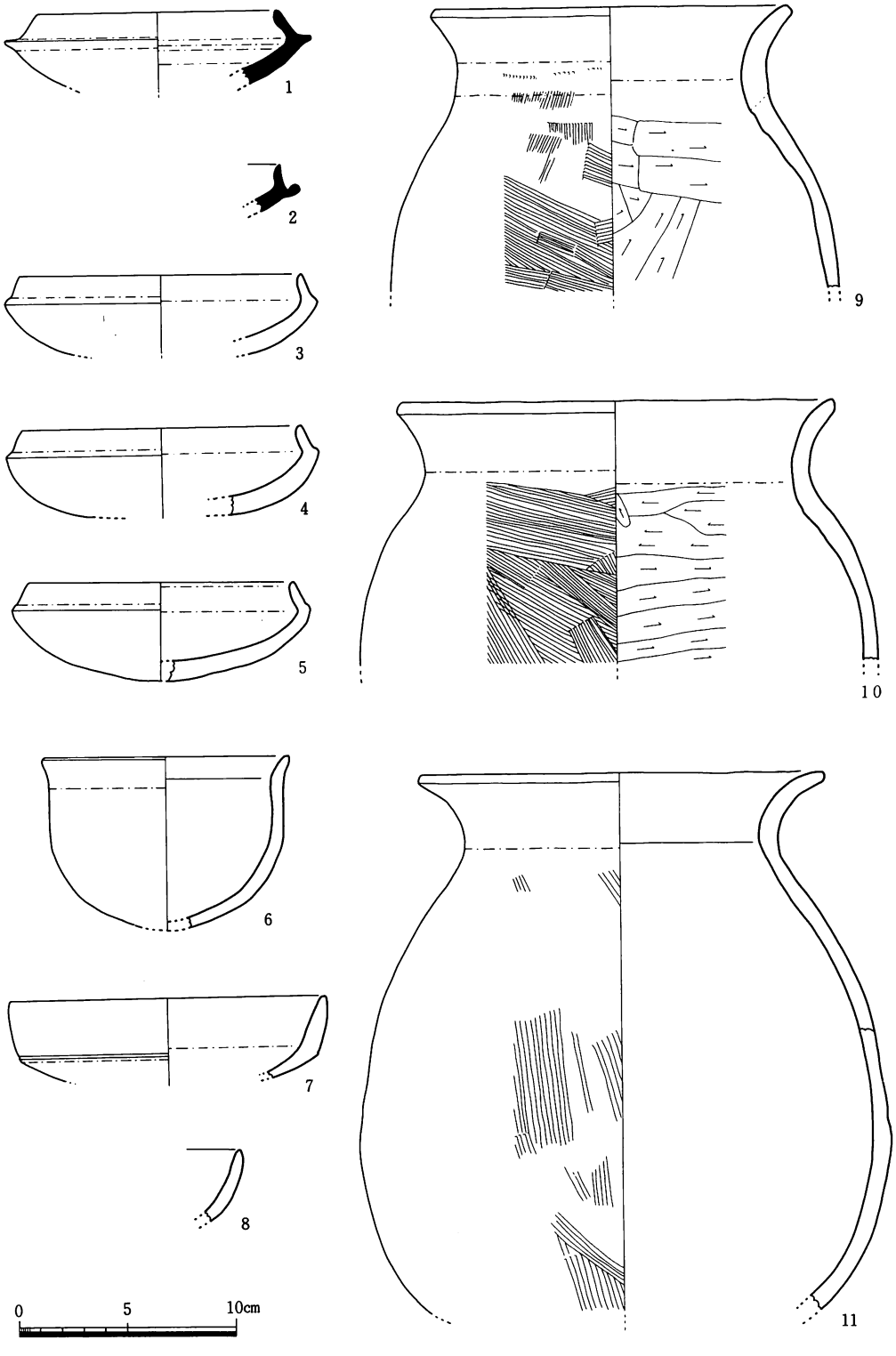
〔出土遺物〕(第40図)

住居址から出土した遺物は少なく、ほとんどが床面密着に近い状態で出土した。また、ここに図化した以外の土器片は、器形復原ができない土師器の細片ばかりで、須恵器は全く含まれていない。

(1)須恵器の坏身で、法量は復原口径11.0cm,現存高3.35cmを測る。器形は、体部が浅く、受け部はほぼ真横につまみだされ、断面は三角形、口縁部は内傾し、口縁端部は肥厚する。器面調整は、内面がヨコナデ、外面が受け部より上半がヨコナデ、下半がヘラ調整である。胎土は緻密で径1㎜程の白色砂粒をわずかに含む。焼成は良好、色調は内外面ともに灰白色である。

(2)(1)と同様に須恵器の坏身片である。細片のため口径は不明であるが、現存高2.25cmを測る。体部は浅く、肥厚した受け部は斜め方向につまみだされ、断面は楕円形、口縁部は外反しながらほぼ直立し、口縁端部は尖っている。器面調整は、内外面ともにヨコナデ、胎土は緻密で、細かな砂粒を含む。焼成は堅緻、色調は内外面ともに、灰白色を呈している。

(3)土師器の坏身片であり、須恵器の坏身片を模倣したものと思われる。法量は、復原口径13.0cm



第40図　第１号住居址内出土遺物実測図

を測る。器形は体部が浅く肉厚気味、口縁部は内傾し口縁端部はやや尖っている。また受け部の部分には浅い段を有する。器面調整は、内外面ともに丁寧なヘラ研磨で、外面全体には黒漆を塗布している。胎土は密で、径1㎜程の石粒をわずかに含む。焼成は良好、色調は内面が暗赤褐色を呈している。

(4)(3)と同様に土師器の坏身片であり、須恵器の坏身片を模倣したものと思われる。法量は、復原口径12.8cm,現存高4.2cmを測る。器形は、体部が浅く肉厚、口縁部が内傾し、口縁端部はやや尖り気味である。また、受け部の部分には、浅い段を有する。器面調整は、内外面ともに、丁寧なヘラ研磨で、外面全体には黒漆を塗布している。胎土は密で、径1～2㎜程の小石を少量含む。焼成は良好、色調は内面が暗赤褐色を呈している。

(5)同様に土師器の坏身片で、須恵器坏身を模倣したものである。法量は、復原口径12.2cm，器高は4.2cmを測る。器形はやや底部が尖り気味であるが浅く、口縁部は内傾し端部は尖っている。また受け部には浅い段が付いている。器面調整は、内外面ともに、丁寧なヘラ研磨で、その後内外面全体に黒漆を塗布している。胎土は、径1～2㎜程度の砂粒を少量含んでおり、焼成は良好。色調は、素地が内外面ともに、暗赤褐色を呈している。

(6)土師器の小型壺片で、復原口径11.2cm，器高8.0cmを測る。底部は丸底と推測され、胴部は中程からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は短くわずかに外反する。器面調整は、内外面ともに荒れているため判明しない。胎土は粗で、径1㎜程度の石粒を多量に含み、焼成は不良。色調は、内外面ともに暗褐色である。

(7)土師器の壺の口縁部片で、復原口径14.6cm，現存高3.7cmを測る。器形は、口縁部中程で緩やかに屈曲したあと外傾気味に立ち上がり、二重口縁になるものと思われる。器面調整は内外面ともにヨコナデで、その後内外面全体に黒漆を塗布している。胎土は密で、径1㎜程度の石粒及び長石粒等を含み、焼成はやや良。色調は素地が内外面ともに、暗赤褐色を呈している。

(8)(7)と同様、土師器の壺の口縁部片である。細片のため口径は不明だが、現存高は3.4cmを測る。器形は、口縁部が内弯気味に外傾しながら立ち上がり、口縁端部は丸くなっている。器面調整は内外面ともにヨコナデで、その後内外面全体に黒漆を塗布している。胎土は密で、径1㎜ほどの砂粒を含み、焼成は良。色調は素地が薄い黄灰色を呈している。

(9)土師器の甕の口縁部から胴部にかけての破片である。復原口径16.2cm,現存高12.9cmを測る。器形は、胴部に張りが少なく、頸部で一度「く」の字状にくびれ、口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁端部はナデて平坦にしている。器面調整は、口縁部の内外面がヨコナデ、胴部外面がハケ目の後ヨコナデ、内面がヘラ削りを施す。胎土は密で、径1㎜程度の石粒を多量に含み、焼成はやや良。色調は、内面が暗褐色、外面が暗赤褐色を呈している。

(10)土師器の壺の、口縁部から胴部にかけての破片である。復原口径19.8cm，現存高12.0cmを測る。器形は、胴部に張りがあり、球形に近い形になるものと思われる。頸部で一度「く」の字状にくびれ、口縁部にかけて緩やかに外反する。口縁端部はナデて平坦にしている。器面調整は、

口縁部の内外面がヨコナデ、胴部外面がハケ目、内面がヘラ削りである。胎土は密で、２～３㎜程度の小石及び砂粒を多く含み、焼成は良。色調は内面が浅い黄橙色、外面が橙色である。

(11)(10)と同じく、土師器の壺の口縁部から胴部下半にかけての破片である。復原口径18.4cm，現存高24.7cm，胴部最大径24.4cmを測る。器形は、胴部の最大径が底部近くに位置するのが特徴である。頸部で一度「く」の字状にくびれ、口縁部にかけて外反する。口縁端部はナデている。器面調整は、口縁部が内外面ともヨコナデ、胴部は外面が粗いハケ目、内面は荒れているがヘラ削りによる調整と考えられる。胎土は密で、径１㎜程度の石粒を多く含むほか、径２㎜程度の褐色の小石も多く含んでいる。焼成はやや良で、色調は内外面ともに黄橙色を呈している。なお、胎土中の褐色の石粒は、当遺跡より多量に出土した曽畑式土器の胎土の中にも、同様に多量に含む例が見られた。　（浦田）

２．第２号住居址

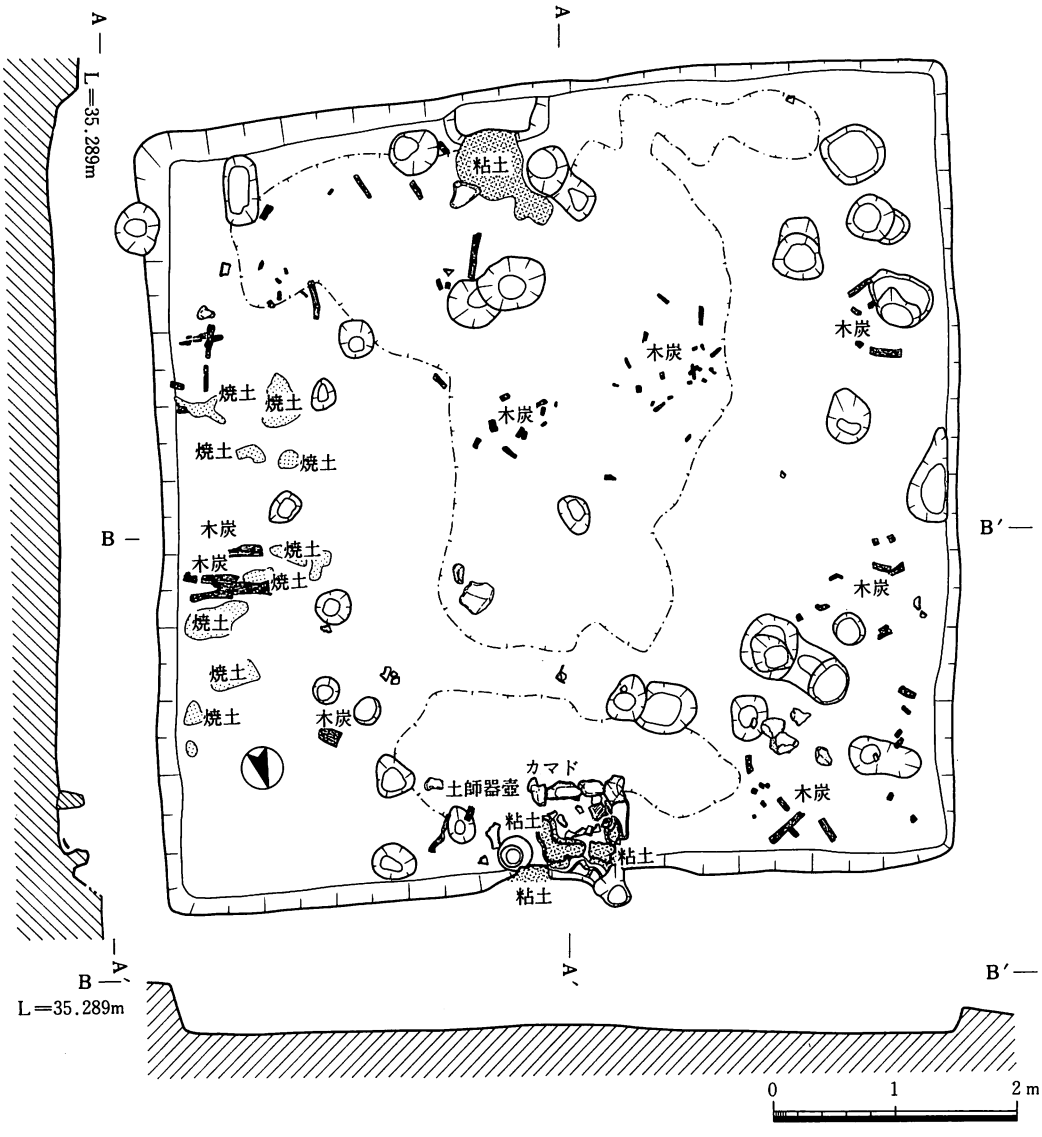
〔構造〕(第41，42図)

１号住居址と同じく、調査区西側部分の一段下がったテラス状の平地で、５－Ｆ，５－Ｇ，６－Ｆ，６－Ｇ区にまたがる形で検出された竪穴住居址である。当住居址は、１号住居址の北側約２ｍの位置に隣接し、ほぼ平行に壁を作っている。主軸方位もＮ－18°40′－Ｅと、１号住居址とほぼ同方向である。規模は、長辺6.62ｍ，短辺6.60ｍのやや大型の方形プランを呈し、深さは24cm～33cmと浅いことから、上部はかなり削平を受けているものと考えられる。

住居址北壁の中央部付近では、作り付けの竈をほぼ完全な状態で検出した。袖部分を黄灰色粘土で作り、煙出し部分はやはり住居址内部に取りつけている。焚き口の前面には、砂岩と思われる切り石を４個横一列に立てて並べており、熱を受けた痕跡が認められた。また竈の東側部分では、完形の土師器の壺が全体の１／３程を土中に埋設された状態で出土している。

当住居址は、１号住居址と同様に４本柱の構造と思われるが、床面から検出されたピットの中には、柱穴に相当するものは確認できなかった。その一方、南壁中央からやや東寄りの部分に、70×30cm，高さ３cm程の硬く踏み締められた長方形の高まりが認められた。竈付近に帯状に延びる床の硬化面も、この高まりに続くことから、この部分が出入り口の階段の役割を果たしていたものと考えられる。そのほか、中央や壁際に当たる部分で、多量の炭化した木材や焼土を検出しているが、これは当住居址が火災を受けた住居址であることを物語っている。

また住居址に伴う遺物として、須恵器を除く少量の土器が出土した。図示した土師器の壺２点以外は、そのほとんどが図化が不可能な程の細片ばかりである。ただこの中で、竈の横に埋設されたままの状態で出土した完形の土師器壺は、住居址の直接的な時期や、壺の使用例を示すものとして注目される。これら出土した土師器の特徴から、住居址の時期は古墳時代であると判断す



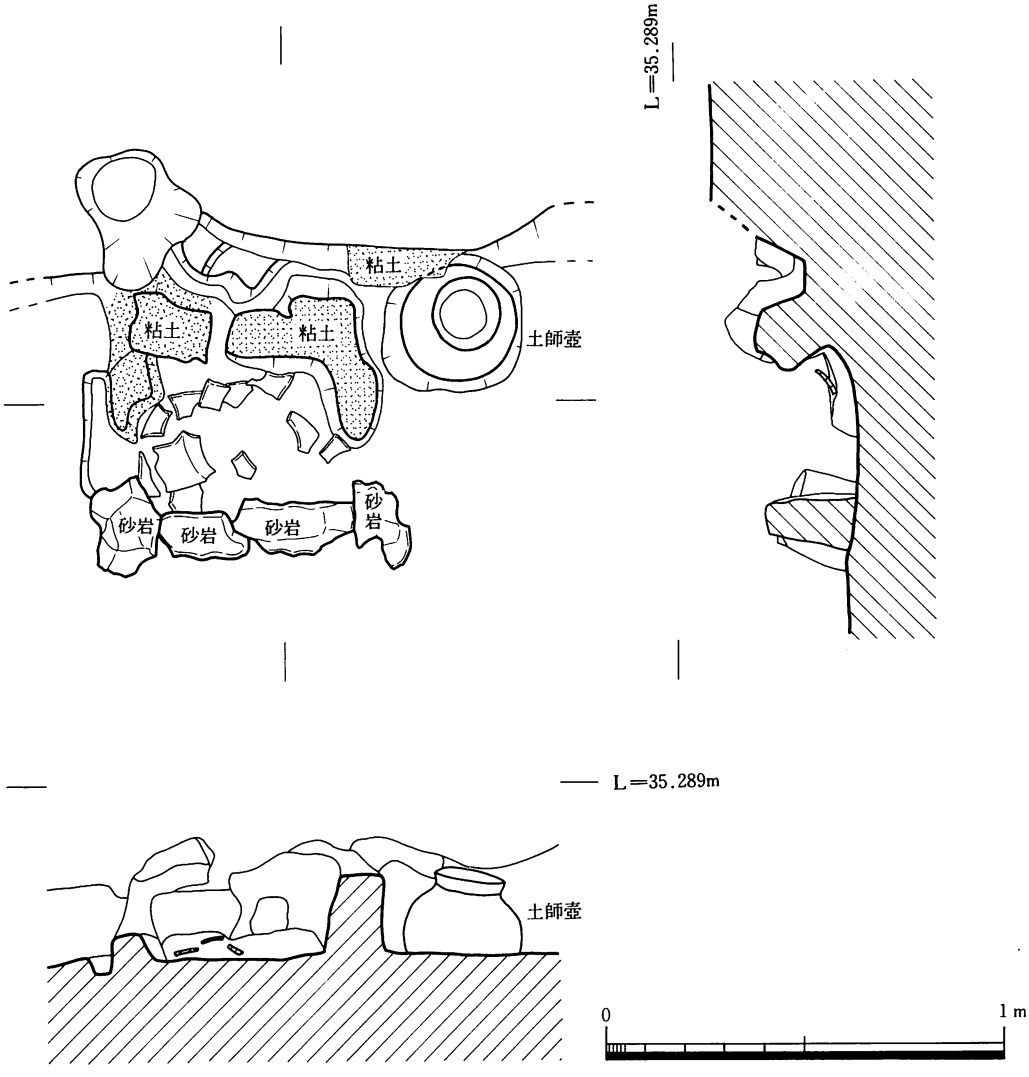
第41図　第２号住居址実測図

る。また１号住居址との関わりは、両住居址が規模は違うものの、主軸方位がほぼ平行して作られていることなどから、両者はほぼ同時期に作られた遺構である可能性が強い。

〔出土遺物〕（第43図）

先述の通り、当住居址からの出土遺物は少なく、図示した２点の壺以外は、いずれも土師器の細片のみの出土であり、須恵器の出土は見ていない。

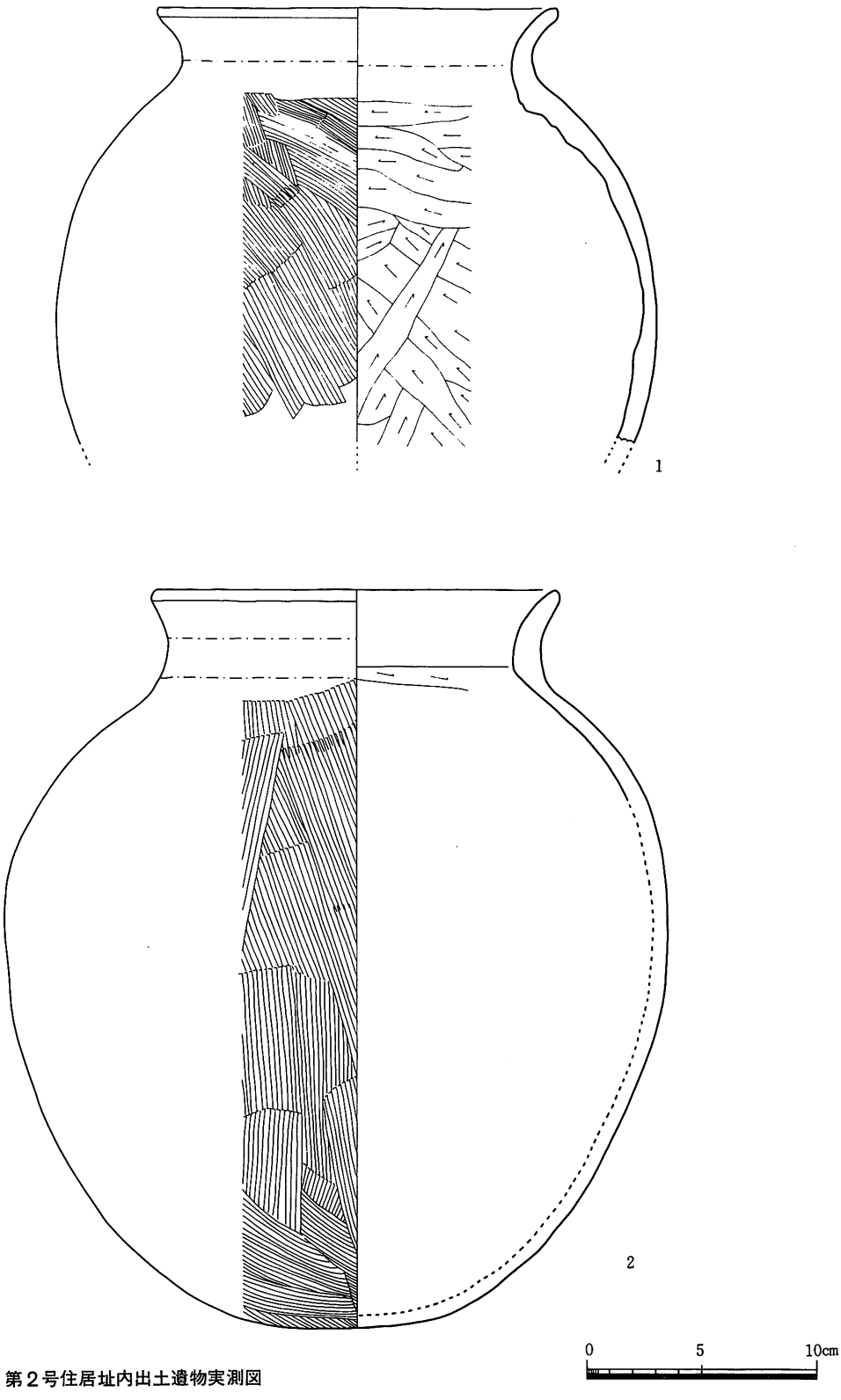
（１）住居址の竈内から一括して出土した、土師器の壺の口縁部から胴部にかけての破片である。底部は欠失している。法量は、復原口径19.4cm，現存高18.8cm，胴部最大径26.0cmを測る。器形は、



第42図　第２号住居址内カマド実測図

胴部が大きく膨らむもので、最大径が中位付近にあることから球形を呈している。頸部で一度「く」の字状に屈曲し、口縁部が外反するもので、口縁端部は丸くなる。器面調整は、口縁部内外面がヨコナデ、胴部が外面ハケ目、内面ヘラ削りで、口縁部の内面には、赤褐色の化粧土を塗布した痕跡が残っている。胎土は密で、径１㎜程度の石粒や雲母粒をわずかに含み、焼成は良。色調は、内外面ともに黄褐色を呈している。

(２)住居址の竈のすぐ東側の壁際に、全体の１／３程を土中に埋められた状態で出土した土師器の壺である。法量は、口径17.4cm，器高31.9cm，胴部最大径28.8cmを測り完形品である。器形は、底部が丸底、胴部は最大径が中位よりやや上で、球形に近い形である。頸部で一度「く」の字状に屈曲し、口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は丸くなる。器面調整は、口縁部の内外面がヨ



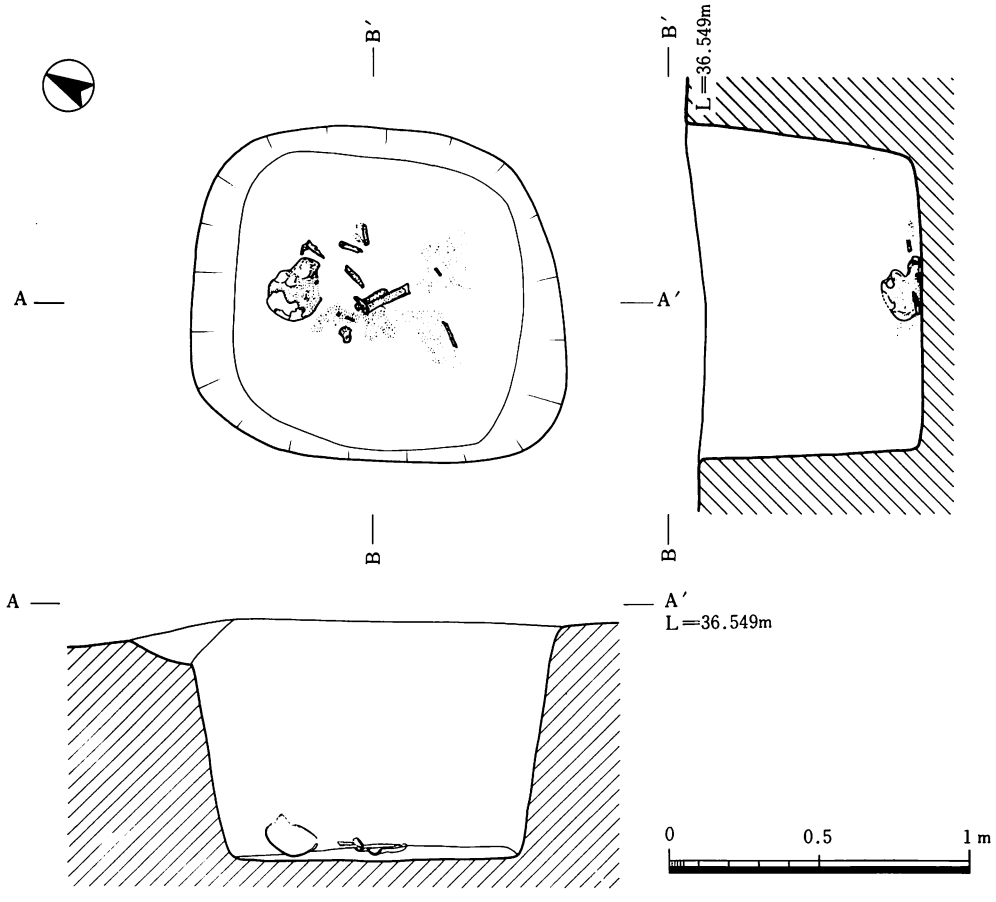
第43図　第２号住居址内出土遺物実測図

コナデ、胴部は外面が粗いハケ目、内面は器面が荒れているが、ヘラ削りと思われる。また、胴部中位から口縁部にかけてススが付着している。胎土は密で、径１㎜程の石粒や砂粒を多く含み、焼成は良好。色調は、内面が浅い黄橙色、外面が橙色を呈している。　（浦田）

第５節　その他の時代

１．近世土壙（第44図）

調査区の北側部分に当たる３—Ｃグリッド内に、人骨埋葬土壙が検出された。土壙は、１基のみの検出で、長辺1.26m、短辺1.11mの不整方形プランを呈し、深さは79cmを測る。主軸方位は、N—29° 55'—Wを取る。調査前には、この部分は石が山積みされ塚のようになっていたが、その上にはゴミが捨てられ、当初はゴミ捨て場的なものと予想していた。しかし、ゴミや石を撤



第44図　近世土壙実測図

去した後、清掃を行ったところ、掘り込みのプランが確認された。

土壙内埋土は、ローム層に灰褐色土を多く含む単一層で、分層ができないことから、人為的に埋められた土と考えられる。土壙内の底面には、頭位をほぼ北に向けた人骨が検出された。人骨の残存状態は非常に悪く、頭骨の一部および歯と、大腿骨の一部が確認できたのみで、他の部分は粉状になっており確認ができず、埋葬形態等については、全く不明確である。しかし、頭骨が動いて顔面が下を向いていることや、骨粉の広がり方が膝を曲げている様に見えること、土壙の規模が小さく伸展葬には適さないことなどから屈葬であったものと判断している。人骨の性別、年令等についても明らかにできていない。また、埋葬法については、土壙内から、鉄釘等の遺物が全く出土しておらず、土壙は深く頭骨に動いた形跡が認められることなどから、鉄釘を全く使用せず製作した棺の中に入れて埋葬した可能性が十分考えられる。最後に人骨の埋葬時期は、人骨の残存状態や埋葬方法などから、近世までのぼらないのではないかと考えられる。　（浦田）

2．その他の遺物

以上述べてきた遺物のほかに、歴史時代の遺物として挙げられるものに古銭がある。調査区の中程を南北に横断するかたちで確認された溝の中から、近世の銭貨が2枚出土した。

その内、まず1枚は、江戸時代で最も普遍的な銭貨である「寛永通寶」の残欠である。これはほぼ半分が欠けており、「寛永」の文字だけが判読可能であった。

もう1枚は「仙臺通寶」である。天明3年頃から東北地方を中心に飢饉が頻発する。仙台藩ではその救済と藩財政の立て直しのために、翌天明4年（1784）11月、幕府に願い出て、⑴仙台藩領内に限り通用　⑵鋳造期間を5年間とする、という条件のもとで、特に銭貨の鋳造を認められた。この時鋳造された鉄銭が、「仙臺通寶」である。

領内の石巻において、総額30万8千貫が鋳造されたこの銭貨であるが、質が悪く、銭価が公領の約半値と低かったことから、仙台藩を訪れる上方の商人や廻船の船頭たちが持ち帰り、流通上の混乱をもたらした。このため藩では、鋳造期限の半ばを残した天明7年7月に事実上、鋳造を中止した。

当遺跡から出土した「仙臺通寶」は、出土状態が明らかでなく、鋳造当時に「流通」によって当地にもたらされたものであるかは不明である。しかし、あるいは先述のような事情によって藩外に持ち出されたうちの一枚ではなかろうか。推測通りならば、特殊な目的をもって鋳造された銭貨が、幕府の領外使用禁止令にもかかわらず、肥後にもたらされたことになり、当時の銭貨の流通のありかたを考えるうえでも、興味深い。　（丸山）

第Ⅲ章　総　　論

建設省九州地方建設局熊本工事事務所で計画が進められている、一般国道３号熊本北バイパスの建設工事施工にあたっては、従来より埋蔵文化財の取扱いについて、熊本県教育委員会と事前の協議が続けられている。今回は、前年度調査が行われた新南部町西谷遺跡に引き続き、白川の対岸（右岸）に位置する熊本市竜田町、竜田陳内遺跡の発掘調査と整理報告書の作成を協議のもと実施したものである。

当遺跡の周辺には各時代の大遺跡が密集し、この白川中流域が生活を営むのに非常に恵まれた自然環境を有していることを物語っている。今日でも市街地に近く、住宅地として絶好の地であり、かつ交通の要所でもある。この白川を渡る国道のバイパスは、熊本市東部を巡る大動脈たる役割を担って計画されているものであるが、同時にここには１万数千年前からの人類の営みの痕跡が明らかにでき、とりわけ長い年月に、幾度となく繰り返された人類の技の見せ場とも言うことができる。

この地の、言わば開発の狼煙は旧石器時代の遺物・三稜尖頭器の出土に示されている。昨今、県内でも旧石器時代の調査が多く行われ、各時期の石器群内容も次第に明らかにされてきつつある。その中で、阿蘇郡小国町下城遺跡は、ナイフ形石器を主体とし、台形石器・三稜尖頭器・スクレーパーなどが出土し、県内の後期旧石器時代研究に大きな痕跡を留めている。２時期に分けられる上位の文化層は、とりわけ三稜尖頭器の出土が多い。そして、最近県南部地域に位置する人吉市鼓ケ峰遺跡でも良好なこの三稜尖頭器の出土が報告され、従来の球磨郡山江村狸谷遺跡・水俣市石飛遺跡らを加えて、県下全域に普遍的な出土状況を見せるかのようである。

今回出土している三稜尖頭器は、端正な形状に仕上げられている。石材は青白褐色を呈するチャートである。この石材は白川より緑川に多く見られ、石理が複雑に入り込み、大型の良好な石器素材を獲得し難い傾向がある。その中で大型の横長剥片を獲得しており、石材に合わせた剥離技術の展開を知ることができよう。二面加工の規則性には乏しいが、鋭い先端を形成し、基部調整は主要剥離面にも及んでいる。

「ＡＴ」上位の主要な石器群はナイフ形石器・台形石器を主体に展開し、剥片尖頭器は直上から継続していくことが周知の事実となっている。しばし間を持ち、三稜尖頭器が加わり、両面加工の尖頭器の出現期まで継続するものと理解しているが、前記のように端正に作り上げられたこの石器は、三稜尖頭器の最も盛行する時期の所産と捉えておきたい。

白川流域では、上・中流域に良好な台地に恵まれるものの、遺跡群を捉える作業は遅れている。火山灰層が厚く覆っていること、大規模な調査が行われていないことなどがその理由であるが、今回の石器検出は遺跡・遺物が確実に所在することの証となり、期待が持たれる。周知の高橋南・

谷尾崎・柿原遺跡などの所在する白川下流域遺跡群は、ナイフ形石器や細石器を主とする石器群を有し、前者は縦長剥片を素材として部分的なリタッチを加えて形成されるイメージが強い。類似する菊池市伊野遺跡では、ナイフ形石器の盛行期をやや過ぎて捉えられるものである。中流・上流域での石器群の変化が期待される。

縄文時代は早期の押型文土器に始まる。著名なカブト山遺跡を近くにし、右岸にも大きな遺跡展開を示している。しかし、今回の調査の主要な成果としては、第一に多量の前期土器群が検出されたことを挙げなければなるまい。斜面上に包含層を持ち、本来的な位置を近くに有するのであろうが、狭い分布範囲の中から姿を見せた曽畑式土器群は総点数約850点を数える。

周辺に曽畑式土器が採集された遺跡も多く、一帯は白川中流域遺跡群として捉えることができる。西海岸地域から約20kmの内陸部に位置することになる。出土土器の度合いは、第Ⅲ層中～上位に求められること、そしていわゆる「アカホヤ」火山灰層が、同層の下部と判断されることにより、まずは「アカホヤ」火山灰の堆積後の産物であることが理解できる。鹿児島県地域に端を発したこの現象は、すでに一般的かつ揺るぎない事実として県内各地で確認されつづけている。

当遺跡出土の曽畑式土器を再度見てみると、第Ⅰ群土器とした滑石混入土器は、器形は深鉢・鉢型土器などがあり、ミニチュア土器を見ることができる。手慣れた製作技術が感じられ、薄い器壁や、整った施文と調整がある。特徴的な文様は、口縁部に刺突文や口唇部の刻目、平行沈線文に連続山形文の付加を行う。胴部には所謂、複合鋸歯文や沈線文を組み合わせ、四角形・市松文様としている。親しみ深い、地方での「手作り土器」と感じる第Ⅱ群土器とに技術的・感覚的な隔絶が否めない。県内で滑石混入土器が大量に製作された痕跡を知らず、ここでは運び込まれた土器と認識しても差し支えあるまい。また、「手作り土器」の形態・施文の原典（モデル）とされたものとも考えられる。第Ⅱ群土器は、事実報告で多くの分類を試みたところで、繰り返すことを許されたい。刺突文の少ない施文は縦・横・斜めの沈線文を連続し、あるいは組み合わせる。それには特徴的に単・複の山形文を重複させるもので、胴部におよぶもの、内面にも多い。区画は縦位が少なからず見られ、横位がきわめて少ない。頸部や胴部にある文様は、鋸歯文・折帯文・四角文・綾杉文・網代文・羽状文など多種多様であるのも特色である。この遺跡での「クセ」とも言える、小さく外折りにしたり、外にひねり出したような口縁部もある。口唇部への施文率は高く、刻目が施されている。「クセ」と捉えてよいのか、器形や調整作業にも通じるので、施文の「企画」「調整」作業の粗さも指摘しておかねばならない。最後に、底部は貼り付けを明確に示すものがあること、胴部下半から短沈線文を連続させているが、十字に区画をなし平行四辺形の文様となるものもあり、半数程に施文している。

土器群の器形は深鉢が多く、大きさはバラエティに富んでいる。口縁部が直口・やや外反・外反するものであり、単一的な状況ではない。胴部でやや膨らみ丸底となる。文様は器面の殆どと、内面に施文される率が非常に高い。種々の文様があるが、曽畑式土器に特徴的な刺突文がきわめ

て少ない。短直線を組み合わせた文様を主体としている。そして、滑石の混入土器の割合は10%以下である。これらの特色はおのずと営まれた時期を示すことになる。

曽畑式土器の時間的・空間的展開については、次のような見解がある。1)杉村彰一氏が述べた、「西唐津海底遺跡出土土器」→「曽畑貝塚出土土器」→「日勝山遺跡出土土器」に示される、規則性のある文様から「くずれる」傾向が地域的・時間的変遷として捉えられること2)渡辺康行氏が長崎市深堀小学校校庭遺跡の報告において述べた、「内面に施文される土器群が上層になる傾向」があること3)西九州地域を対象として水ノ江和同氏が行った「区画し文様を充填させるパターンの変遷」による時期移行の把握。即ち、古い段階ほど明確に区画をなし整然とした施文を行っいること。また、おって同氏により指摘されるであろう「口縁部の外反傾向は時期的変遷を伴うこと」つまり、口縁部が古い段階は直口し、新しくなるに従い外反していく傾向があること。さらに、「古く位置付けされる西九州地域の土器に、滑石の混入される率が極めて高いこと」

以上に加え、時期を同じくして発掘調査が行われた曽畑貝塚低湿地では、従来の貝塚出土土器に先行すると思われる土器群の検出がある。その土器群は、口縁部に刺突文があり、区画をなし複合鋸歯文や組み合わせ文を施すものであり、西九州地域で古く位置付けられる土器群である。従来の貝塚出土の土器は、口縁部が外反する深鉢で、刺突文を持つことなく短直線が施文されるもので、低湿地出土土器群に後行するものと捉えられる。すなわち、曽畑貝塚では土器群に時間差が存在することが指摘されるのである。そして、先述した当遺跡の曽畑式土器の特色は、概ね曽畑貝塚での後行する土器群に類似するものとできよう。

熊本県地域における曽畑式土器の展開は、おおまかには海岸部から内陸部への時間的・地域的な移行が考えられる。すなわち宇土半島基部遺跡群の中での時間的移行とともに、さらに主要河川を通じて、上流地域の鞍岳山麓・阿蘇外輪山麓遺跡群へとの移行が想定される。当遺跡出土の曽畑式土器は、先述の見解と考え合わせると、こうした時間的・空間的移行の中間位に位置付けできるものと思われる。

つづいて、これらの縄文前期・曽畑式土器群に対して、約500点を数える出土があり、一方の土器群を形成しているのが、縄文時代後・晩期の土器群である。検出された土器群は、御領式土器を中心に、山ノ寺式・夜臼式土器があり、層位的にも概ね、第Ⅲ層＝前期・曽畑式土器、第Ⅱ層＝後・晩期土器との上下関係が明らかになっている。

周知のように、縄文時代の後期末～晩期前半にかけての熊本県地域では、菊池郡泗水町三万田東原遺跡や飽託郡北部町太郎迫遺跡などに代表されるような大規模遺跡の展開が見られ、ここ白川の中・下流域の河岸段丘上を中心とした地域でも同様の遺跡が多く立地し、大きな展開が知られる。一般的に捉えられる白川流域の縄文時代遺跡は、早期の押型文土器・前期の曽畑式土器、中期の阿高式系土器が散漫に出土し、ついで後期の前～中葉鐘ケ崎式系土器の出土が見られる。そして、後期後葉～末には三万田・鳥井原・御領式土器を中心とした大遺跡が萌芽し、大展開へ

の動態が示されるのである。

発掘調査事例の増加に伴い富田紘一氏（1981）の見解があり、「竜田・供合地区、白川河岸段丘上の縄文遺跡」で示されている。

A．後期前葉	三万田期	（遺跡の萌芽期）
B．後期中葉	鳥井原期	（遺跡の展開期）　大遺跡が、流域に根付きはじめる
C．後期後葉	御領期	（大遺跡の出現期）遺跡数の増加と、核になる大遺跡の出現
D．晩期前葉		（大遺跡の隆盛期）
E．晩期中葉	黒川期	（大遺跡の断絶期）大遺跡の消滅
F．晩期後葉	山ノ寺・夜臼期：突帯文（夜臼期を踏襲）	

さて、今回の竜田陳内遺跡は遺物のまばらに散布する出土状況や、平坦地からやや傾斜地へと移行する地点という地形的状況は、この遺跡が本来的な集中分布を示す場所ではないとの判断に到る。従来の遺物採集成果を加味すれば、東方向の広い平坦地に大きな集中分布が求められて妥当であろう。この地域の右岸地帯は段丘上と河床との比高差が著しく、大遺跡はむしろ比高差が少なく自然環境面で優る左岸に集中する傾向にある。当遺跡が条件的に劣る右岸に位置するのは、立田山東麓に源を発する小谷川が北側に流れていることによるものであろう。

また、当遺跡は対岸に立地する新南部遺跡や上南部遺跡と対応して展開したものと考える。今回の出土資料で大きな比較作業には到れないが、先記の表に示す後期後葉から晩期後葉にかけて主体時期が求められよう。御領期の特色を明確にする大量の土偶の出土が報告され、左岸遺跡における大規模な遺跡展開が知られるところであるが、この遺跡においても採集された資料があり、そのつながりが知られる。また出土の打製石斧の多くは粗製で、土掘りに供せられたものと判断できる。著名な菊池郡西合志町二子山石器製作遺跡からの搬入石器もあり、注目される。

弥生時代は居住域を大きく異にしているものであろうか。遺物はわずかに口縁部片と磨製石鏃各1点を検出したのみであった。

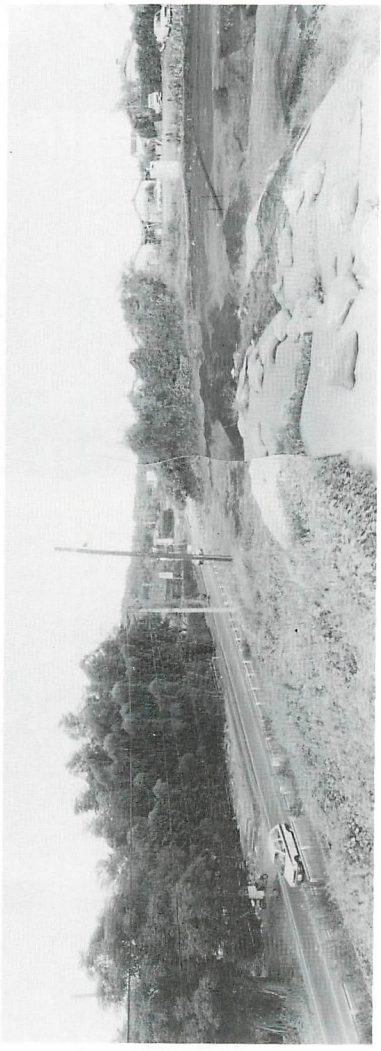
古墳時代は住居址2基の検出があり、大きな展開が見られる。検出地点は上段からの傾斜がとまり、平坦地へと移行する場所あたり、縄文時代前期土器の出土地点に重複している。北・西側への拡大を示している。大型の隅丸を呈する住居址で内部に作り付けの竈を有しており、出土した黒漆を施した土師器は器形は坏であり、6Cの所産として大過なかろう。近接する小碩橋周辺の古墳群との関わりにつき注目しておきたい。　（江本・丸山）

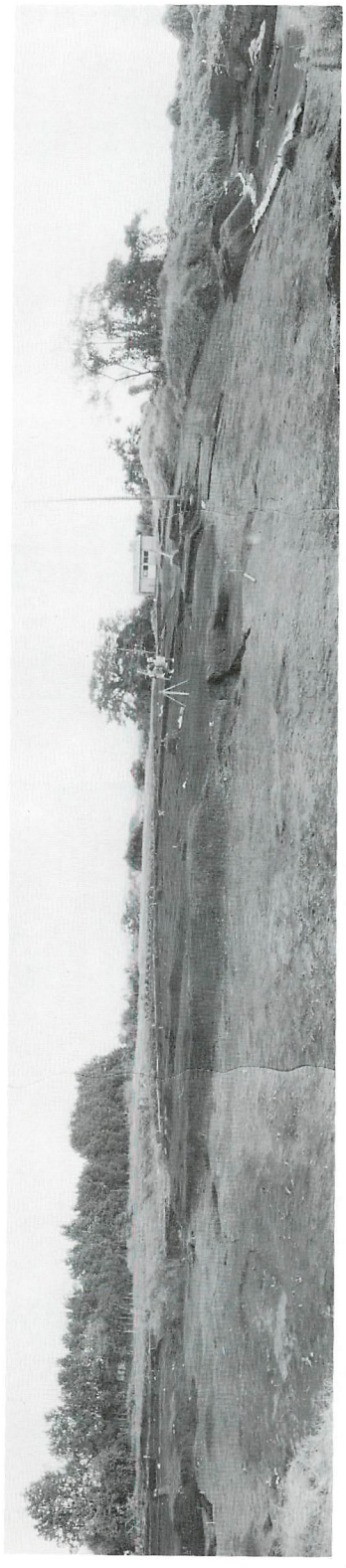
引用・参考文献一覧表

1	小林　久雄	九州の縄文土器	人類学先史講座	11　巻	1935
2	小林　久雄	肥後縄文土器編年の概要	考古学評論	1-2	1953
3	乙益　重隆	肥後上代文化史			1954
4	江坂　輝彌	曽畑貝塚発掘調査報告	第15回日本人類学会研究発表抄録		1960
5	松本　雅明 富樫卯三郎	轟式土器の編年	考古学雑誌	47-3	1961
6	杉村　彰一	曽畑式土器文化に関する一考察	熊本史学	23	1962
7	杉村　彰一	曽畑式土器論考	九州考古学	24	1965
8	江坂　輝彌	縄文土器　九州編　(6)	考古学ジャーナル	13　号	1967
9	乙益　重隆	縄文文化の発展と地域性(10)　九州西北部	日本の考古学Ⅱ縄文時代		1967
10	清野　謙次	肥後国宇土郡花園村大字岩古曽字曽畑貝塚	日本貝塚の研究		1969
11	中村　　愿	曽畑式土器	縄文文化の研究　(雄山閣)		
12	熊本市教委編	弓削上古閑遺跡	熊本市東部地区文化財調査報告		1971
13	坂田　邦洋	曽畑式土器に関する研究　江湖貝塚			1973
14	坂田　邦洋	曽畑式土器に関する研究　尾田貝塚			1974
15	坂田　邦洋	曽畑式土器に関する研究　曽畑式土器の形態			1975
16	江本　　直	微雨・曽畑	熊本県文化財調査報告第19集		1976
17	江坂　輝彌	朝鮮半島櫛目文土器文化と西九州地方縄文前期文化の曽畑式土器との関連性について	考古学ジャーナル	128 号	1976
18	松本　健郎	菊池川流域文化財調査報告書	熊本県文化財調査報告第31集		1978
19	杉村　彰一	曽畑土器考	「九州の原始文様」　佐賀県博		1978
20	江坂　輝彌	朝鮮半島と西北九州　櫛目文系土器と曽畑式土器	同上		1978
21	熊本大考古学研究室	桑鶴遺跡(2)	研究室活動報告(5)		1979
22	賀川　光夫	曽畑式文化について			
23	富田　紘一	吉原遺跡発掘調査報告書	熊本市教育委員会		1982
24	田島　龍太	菜畑遺跡縄文前～中期の土器群の編年と様相	菜畑		1982
25	渡辺　康行	深掘第Ⅲ群土器について	深掘小学校		1983
26	水ノ江和同	西北九州における曽畑式土器の諸様相	同志社大「考古学と地域文化」		1987
27	桑畑　光博	南九州における曽畑式系土器群の動態とその背景	鹿児島大学文学部		1988

写 真 図 版

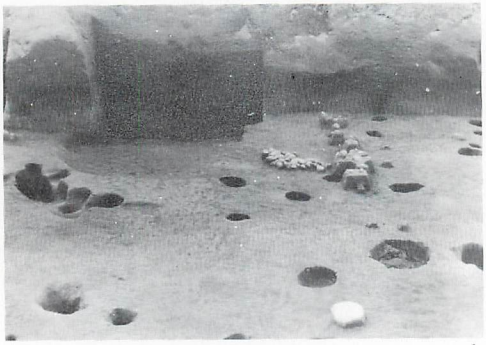
図版1　調査区全景





調査区全景

図版２　縄文前期遺構・遺物検出状況

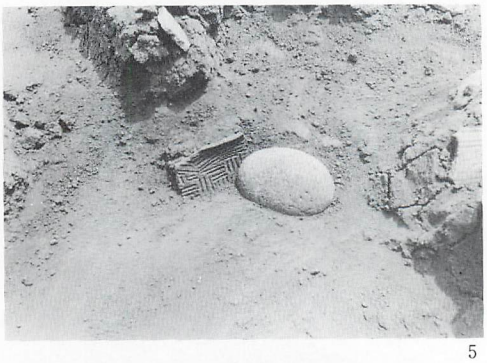


1

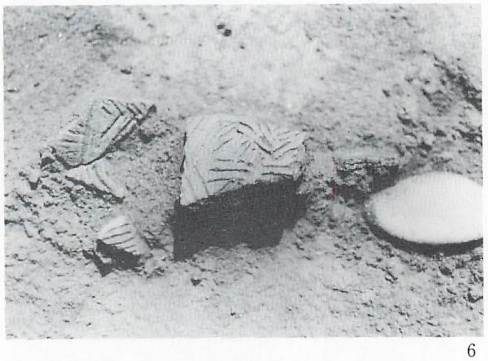
2

3

4

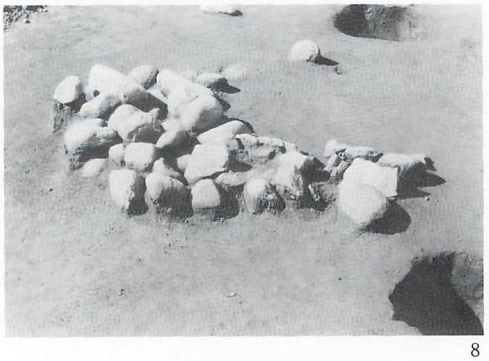


5



6

7



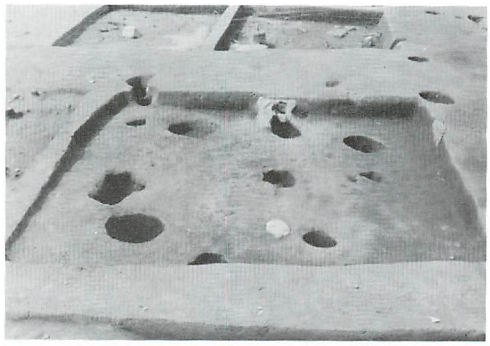
8

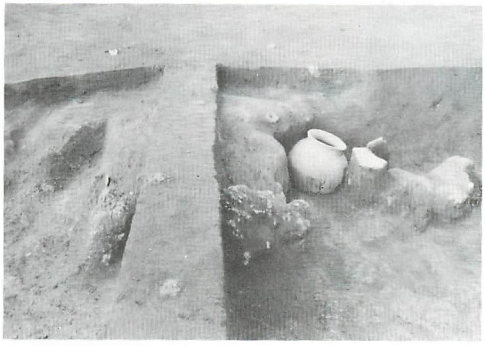
1．　A－２グリッド調査状況（土層サンプリング）
２．３　縄文前期遺物検出状況

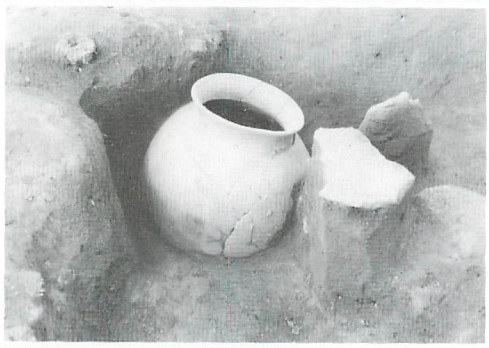
４．５．６．７　曽畑式土器出土状況
８　集石遺構検出状況

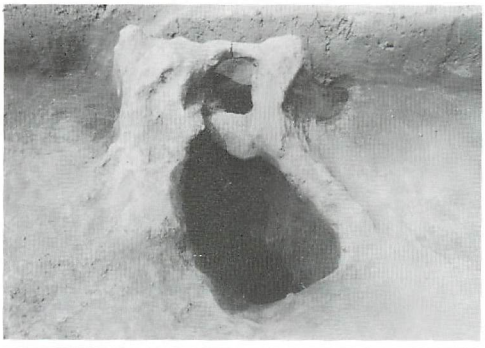
図版３　住居址検出状況

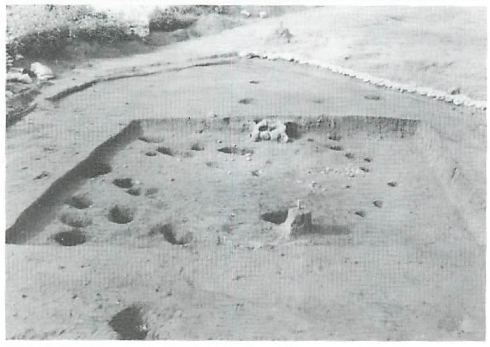
1

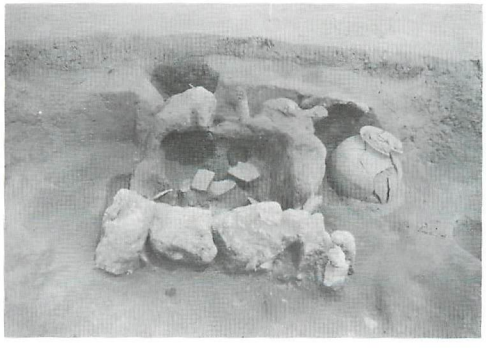

2

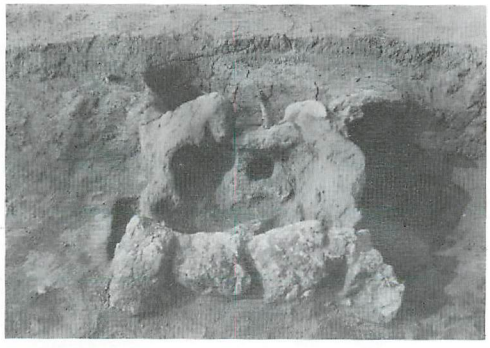

3


4


5


6


7


8

1．住居址検出状況
2．第１号住居址（南から）
3．第１号住居址カマド・土器検出状況
4．第１号住居址出土土器
5．第１号住居址カマド検出状況
6．第２号住居址（南から）
7．第２号住居址カマド・土器検出状況
8．第２号住居址カマド検出状況

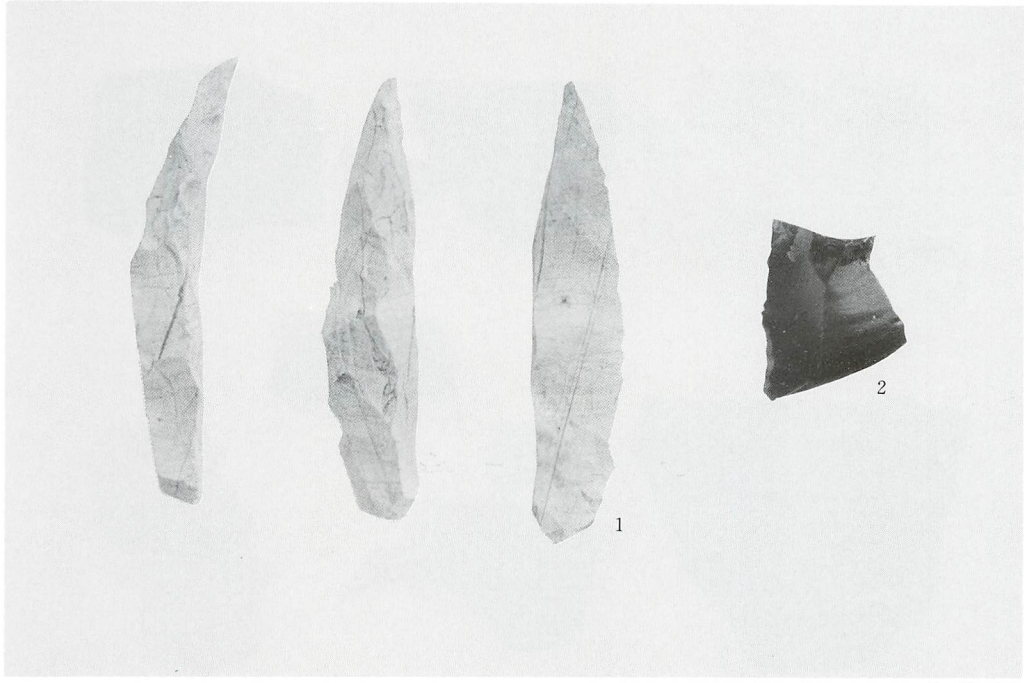
図版４　近世土壙検出状況

近世土壙調査前状況

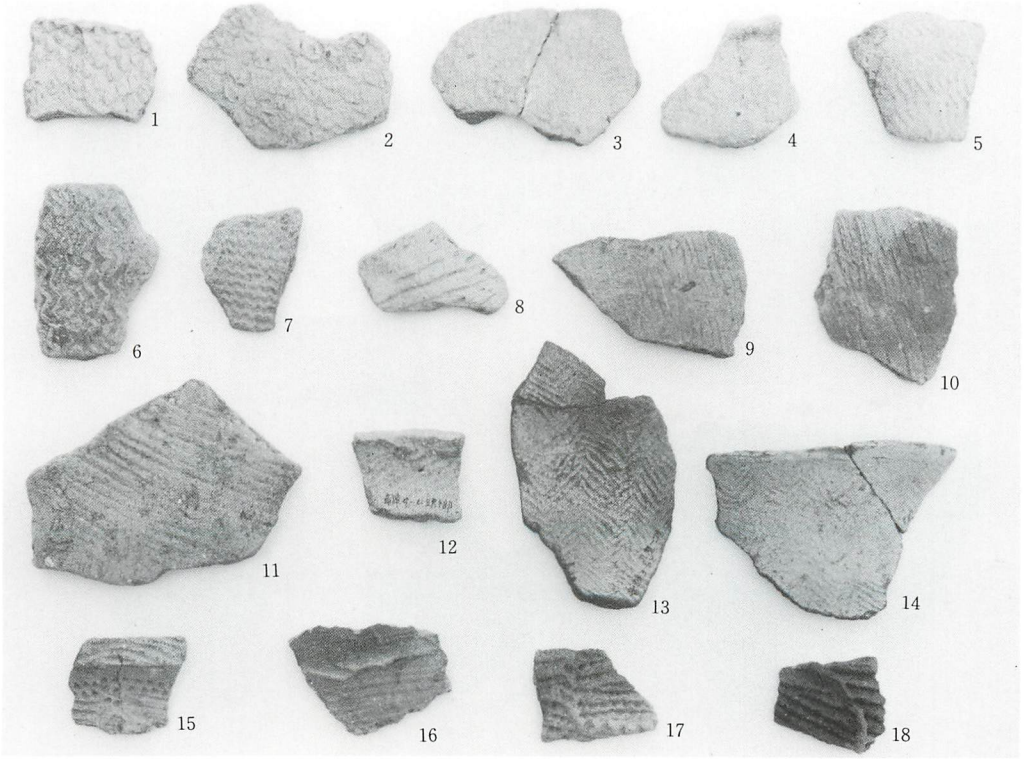
近世土壙内人骨検出状況(1)

近世土壙内人骨検出状況(2)

図版５　旧石器・縄文時代早・前期土器

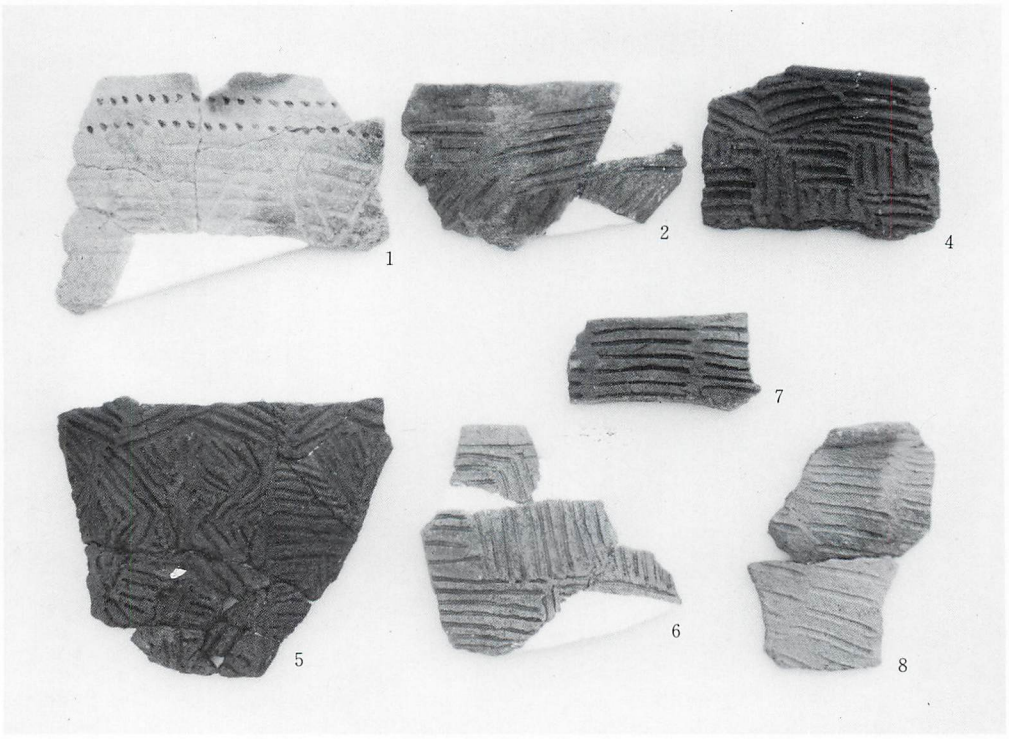


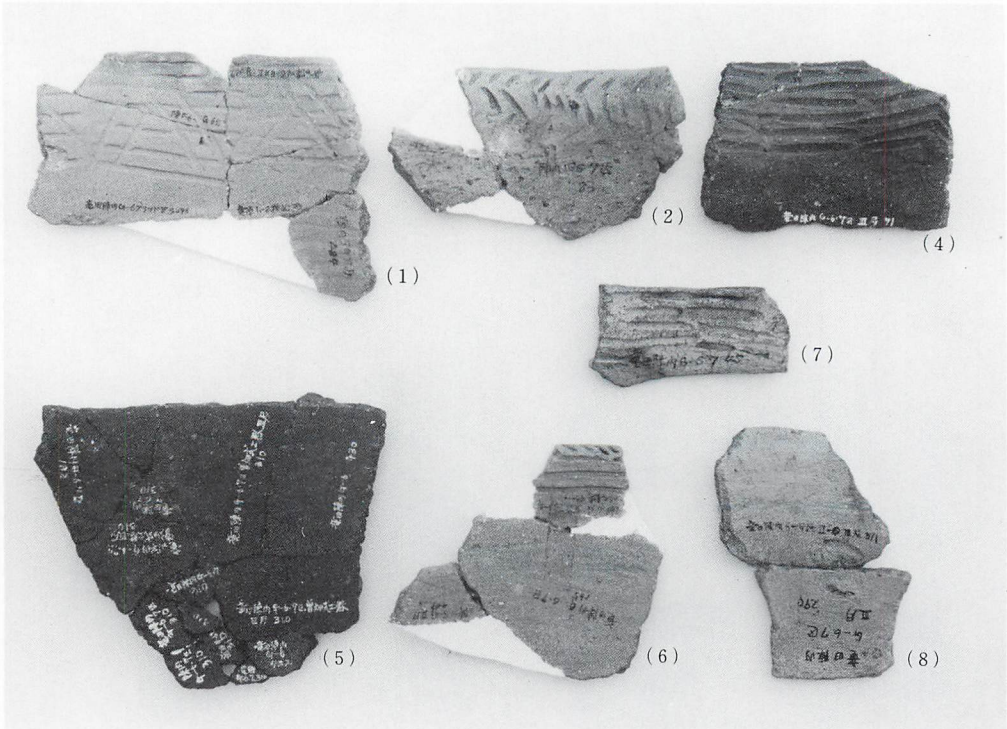
（×約2/3）



（上）第５図１．２（下）１～15は第６図１～15.16～18は第８図１～３　（×約1/3）

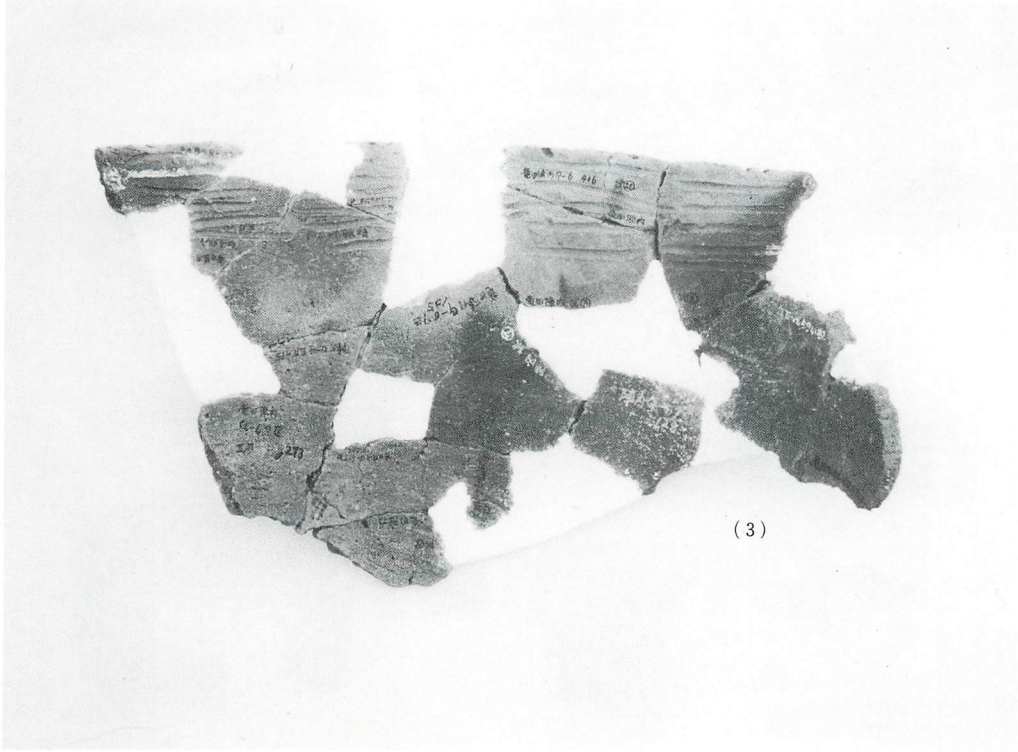
図版６　曽畑式土器





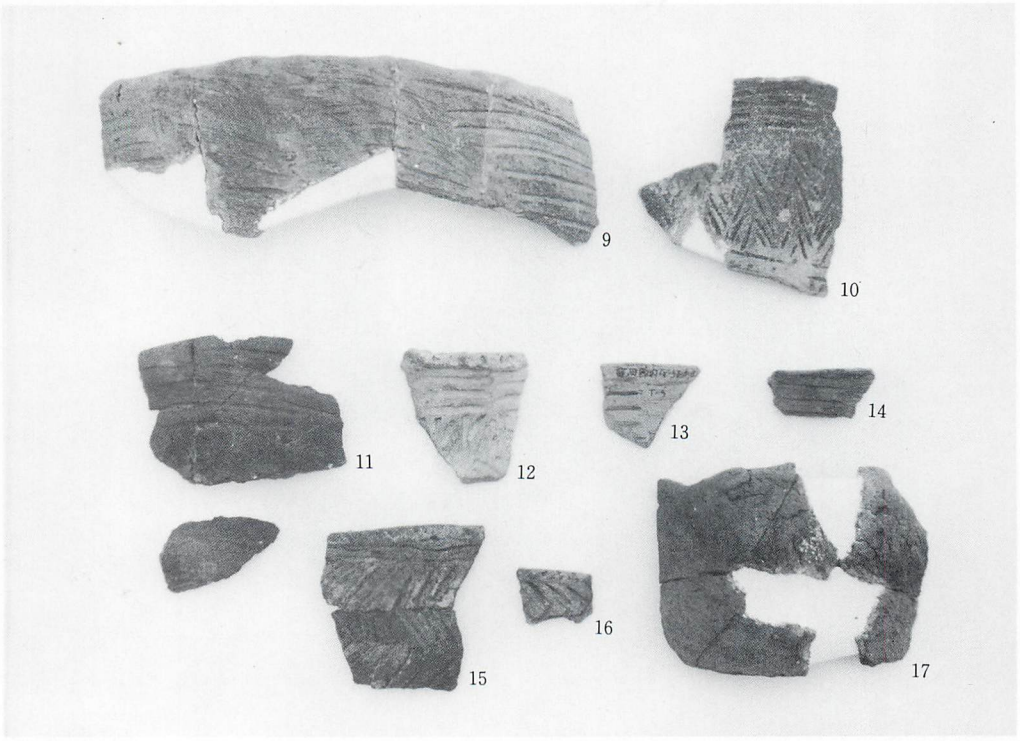
第16図１～第18図８（表・裏）　　（×約1/3）

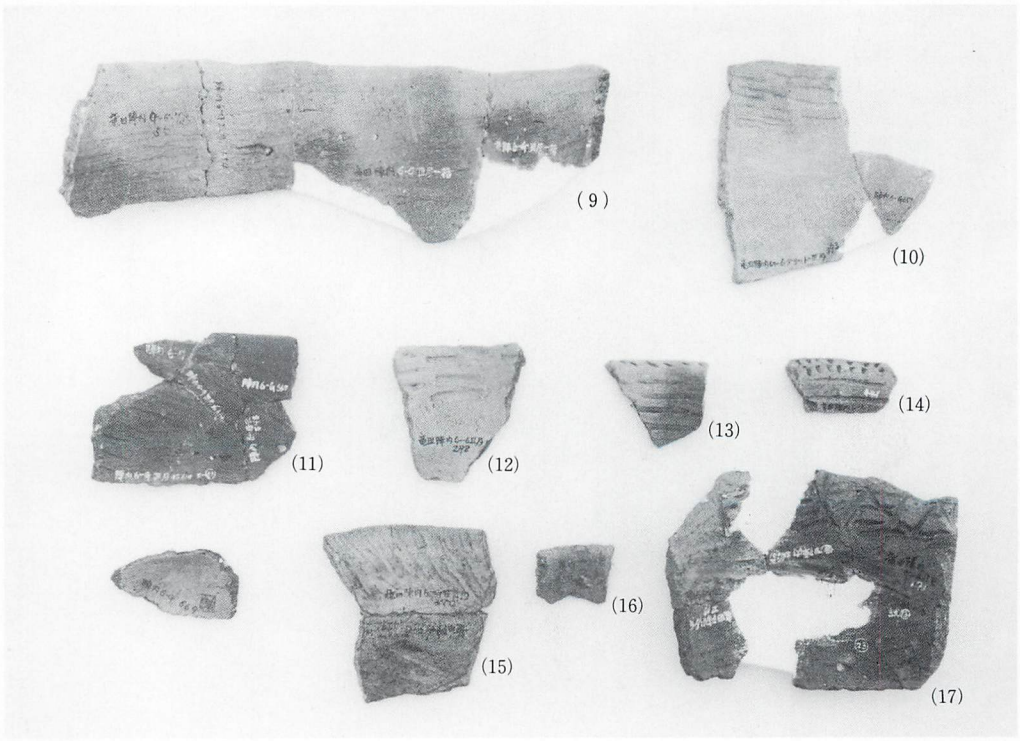
図版7　曽畑式土器



第16図3（表・裏）　　（×約1/3）

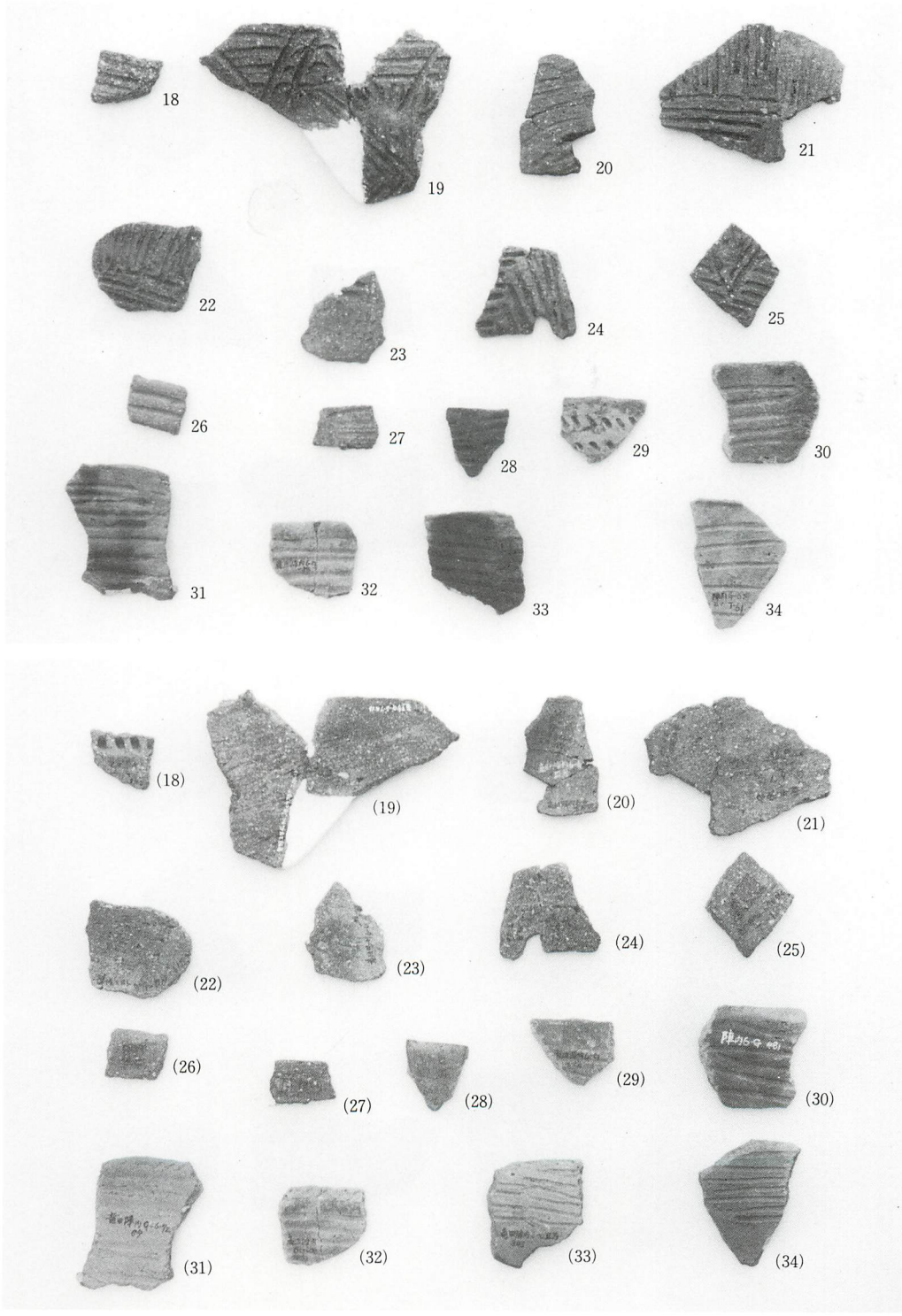
図版８　曽畑式土器





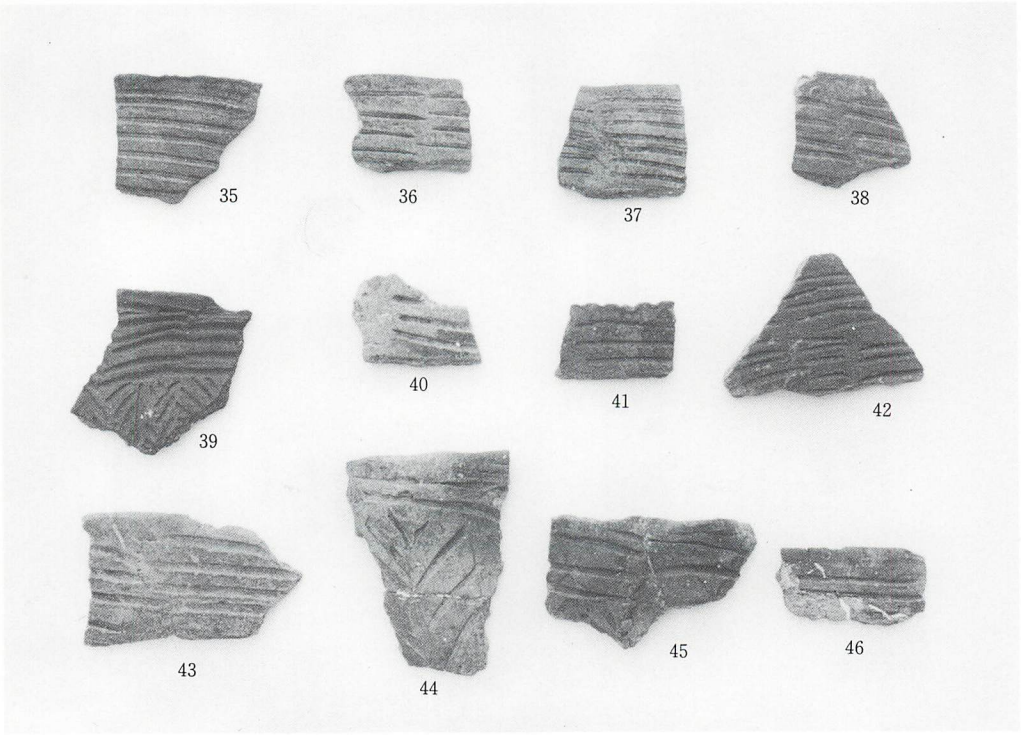
第18図９～第19図17（表・裏）　　（×約1/3）

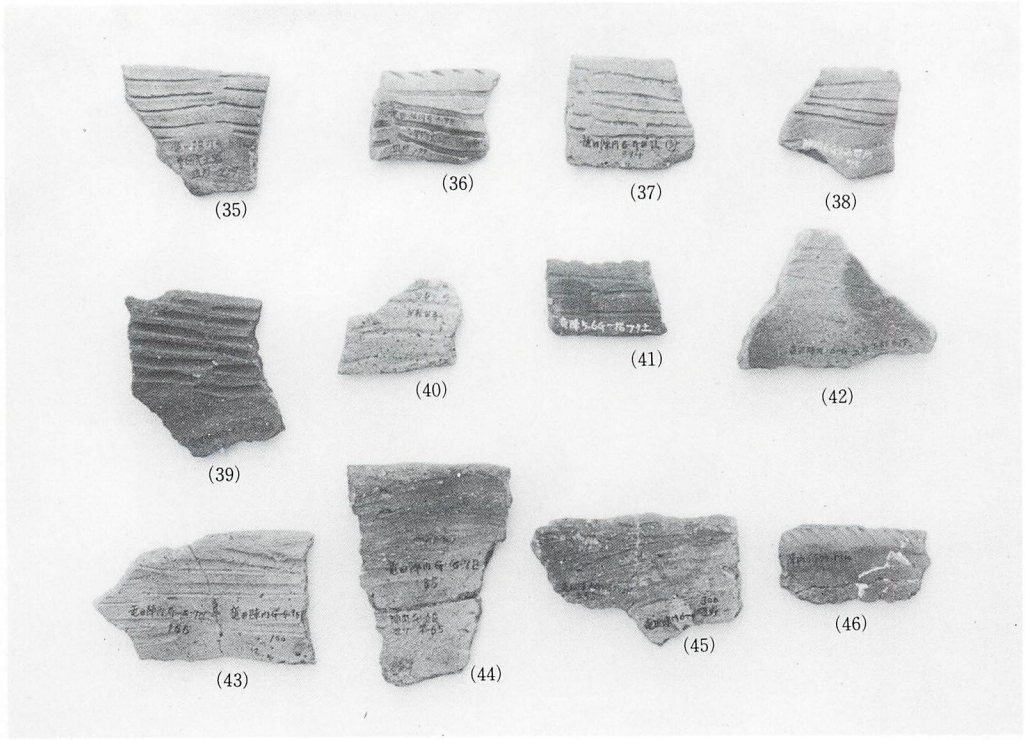
図版９　曽畑式土器



第20図18～34（表・裏）　　（×約1/3）

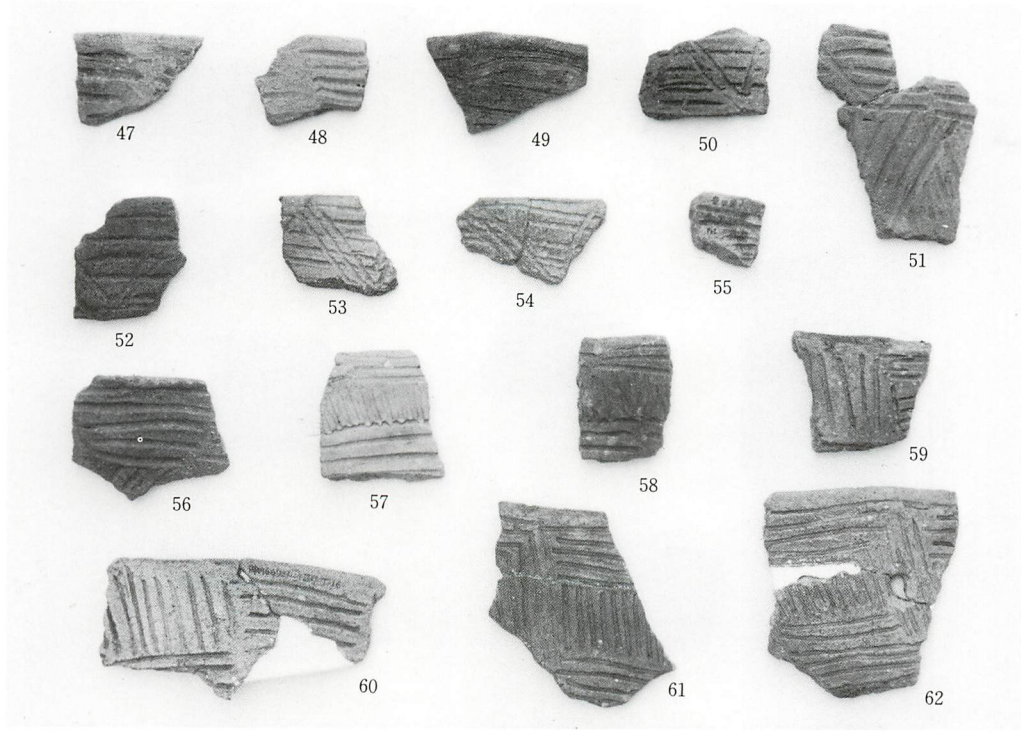
図版10　曽畑式土器





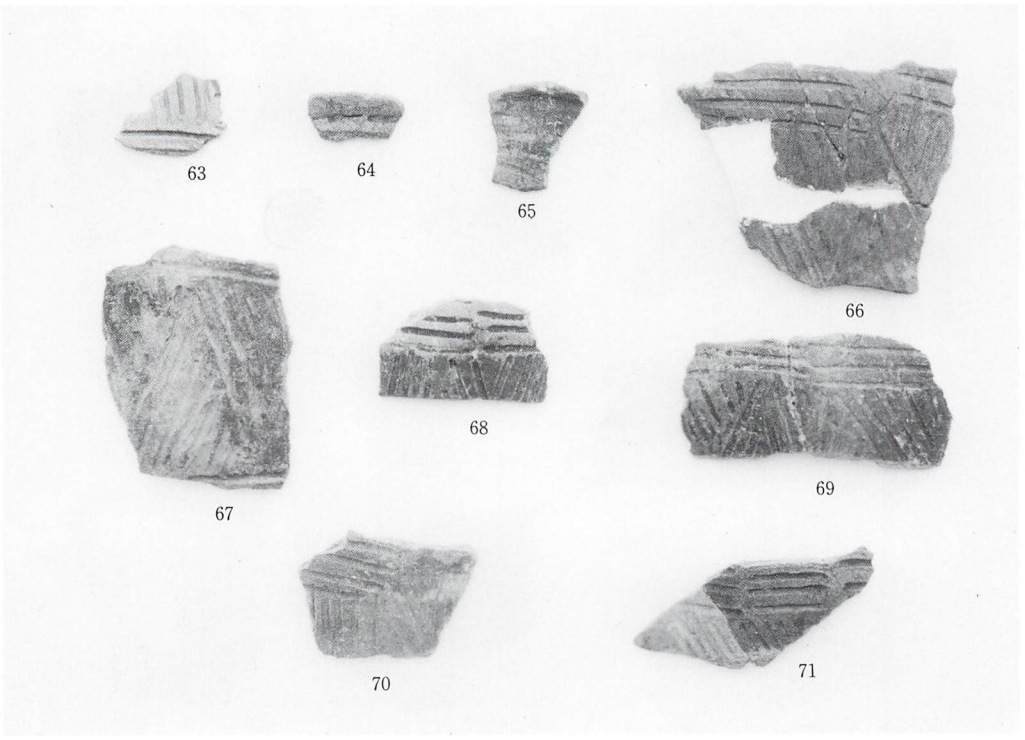
第20図35～第21図46（表・裏）　　（×約1/3）

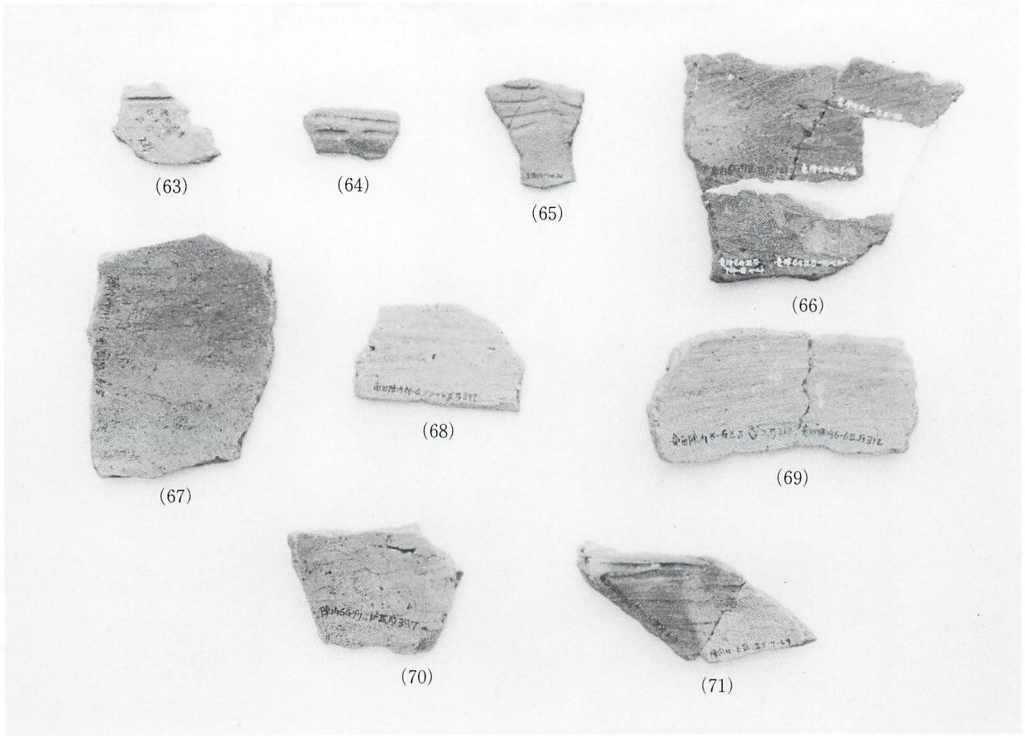
図版11　曽畑式土器



第21図47～第22図62（表・裏）　　（×約1/3）

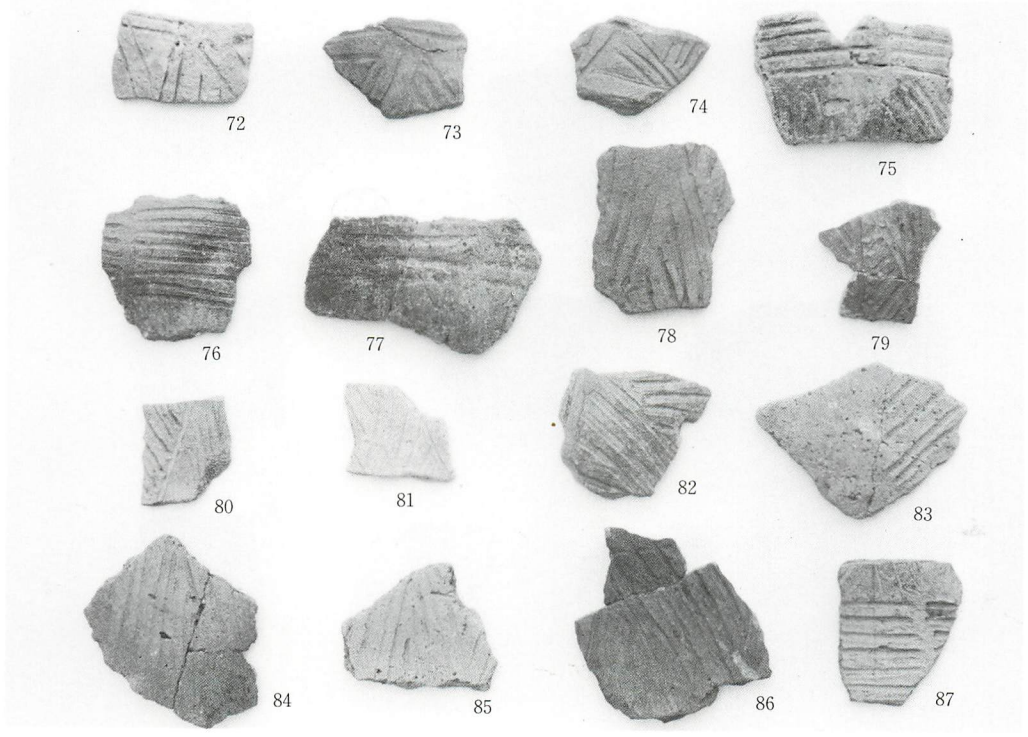
図版12　曽畑式土器

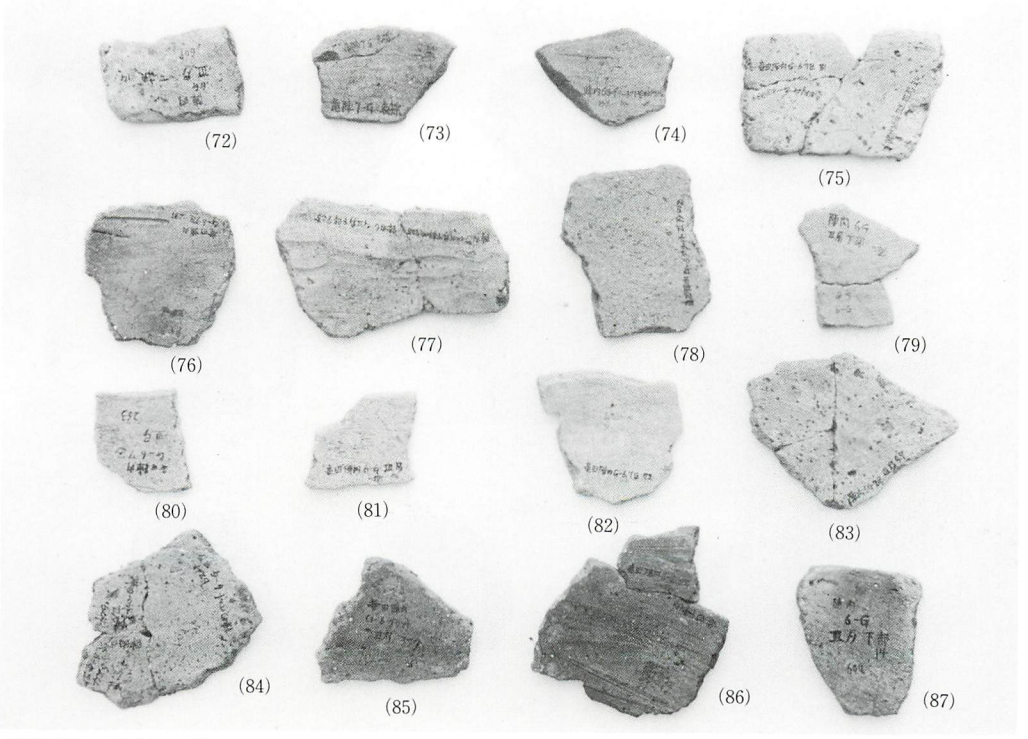




第22図63～71（表・裏）　　（×約1/3）

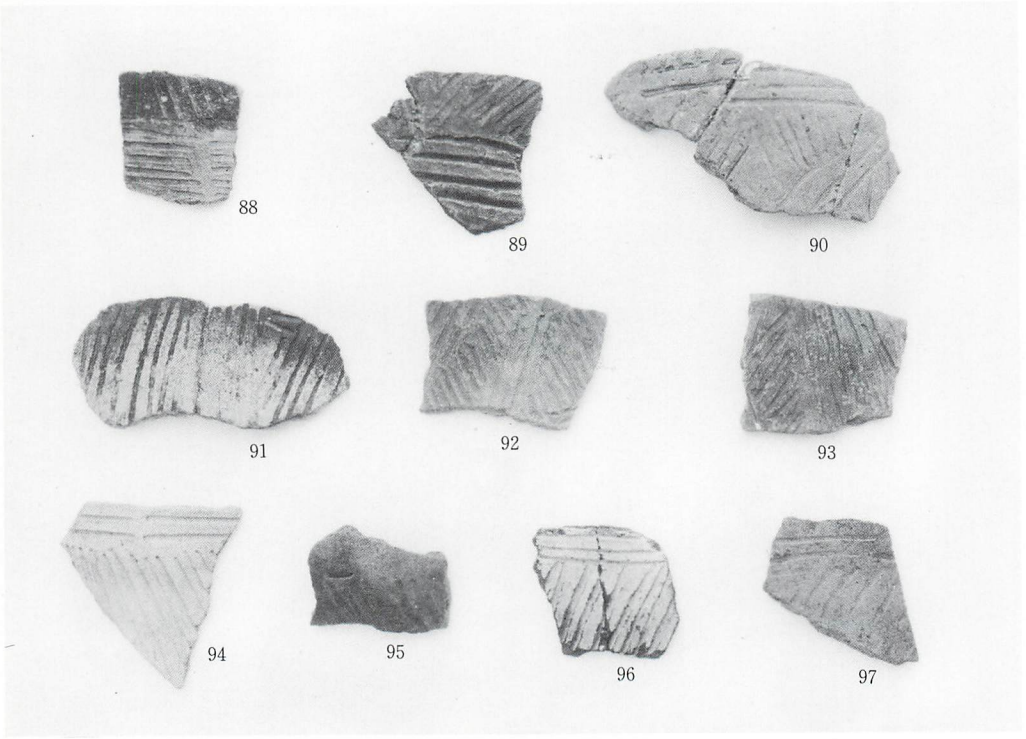
図版13　曽畑式土器

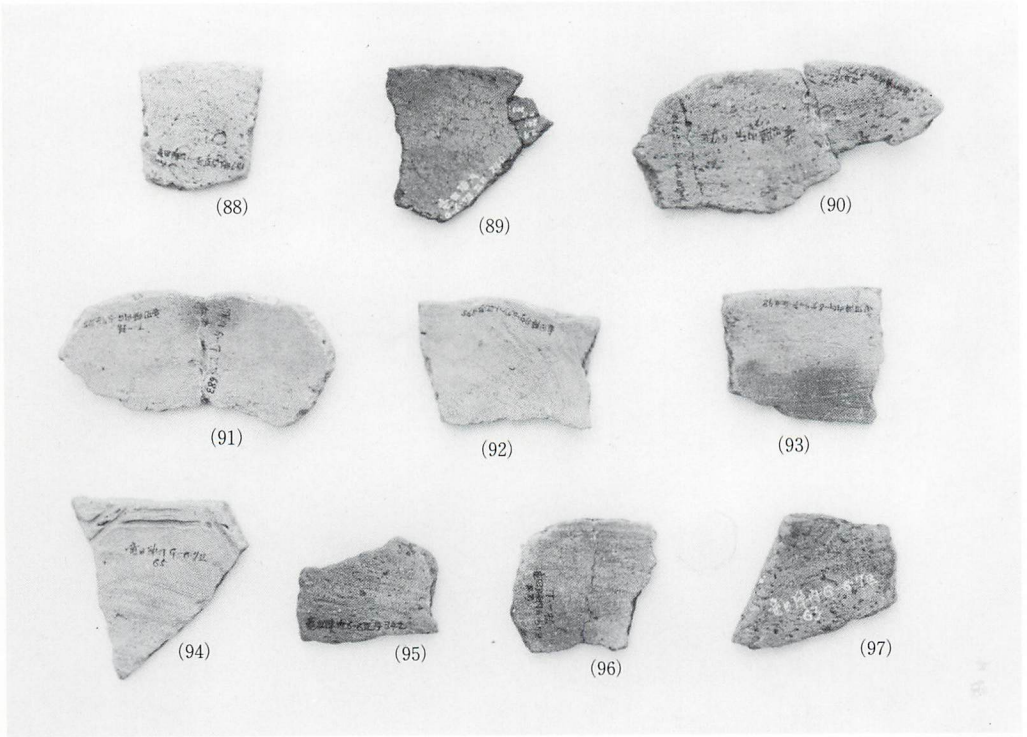




第23図72～87（表・裏）　　（×約1/3）

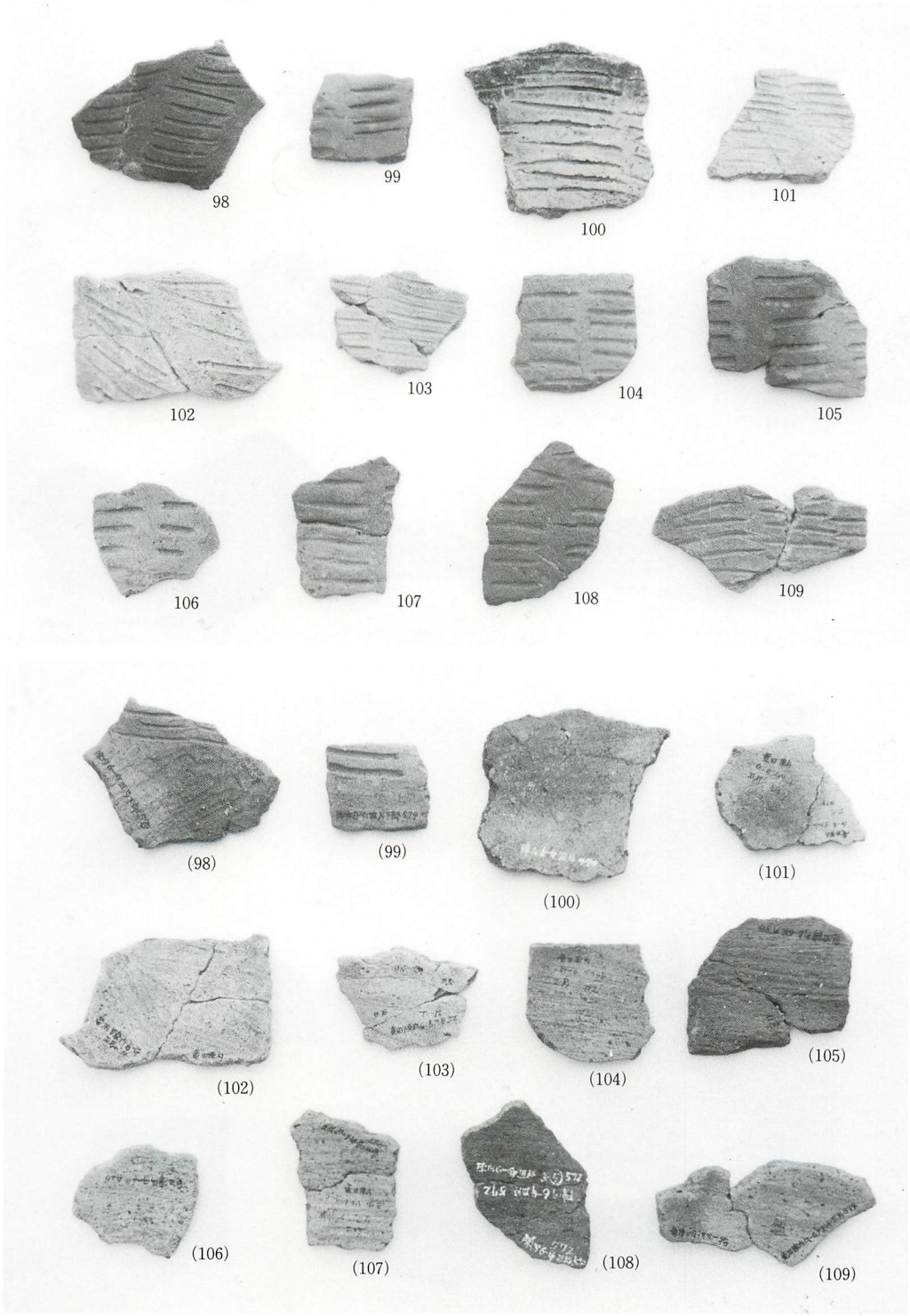
図版14　曽畑式土器





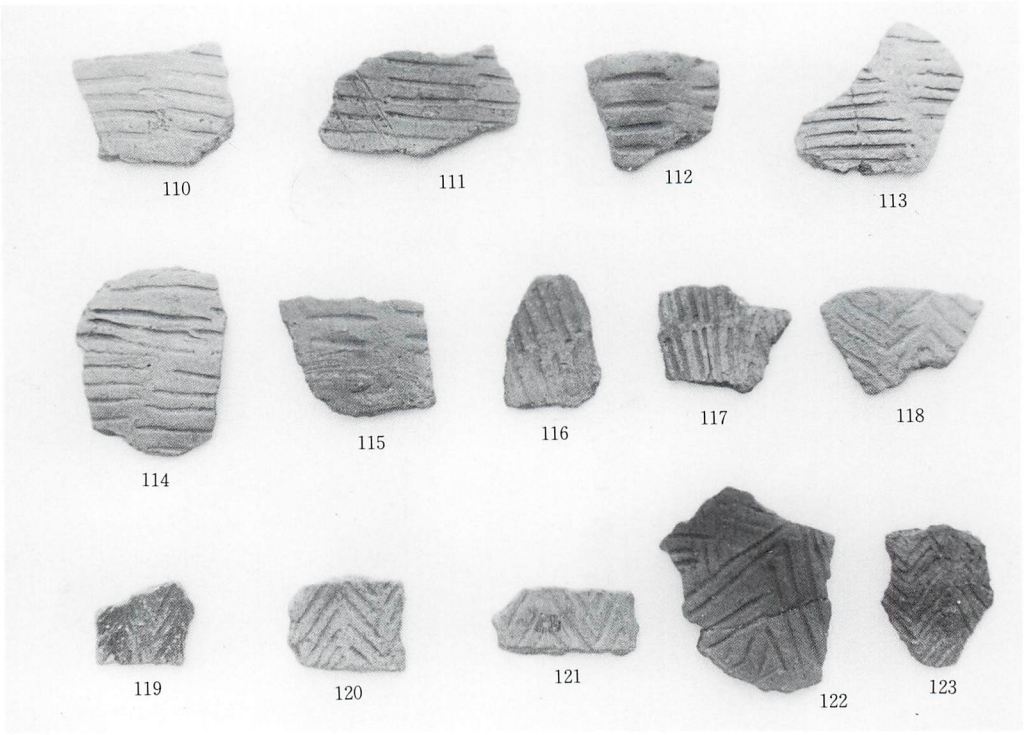
第23図88～第24図97（表・裏）　　（×約1/3）

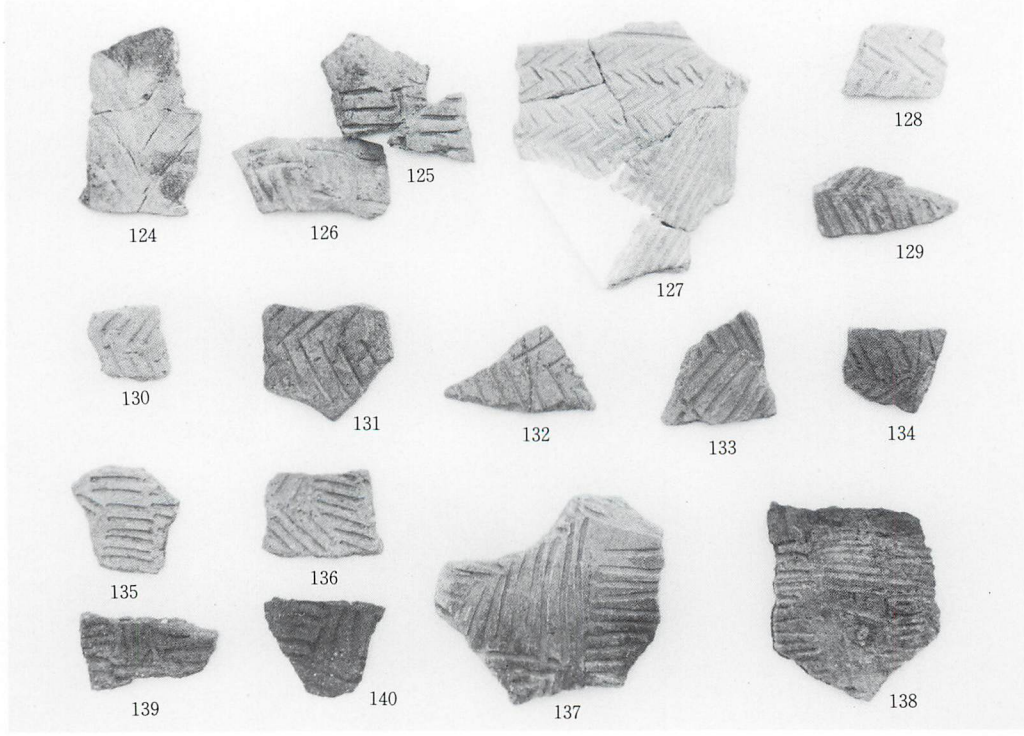
図版15　曽畑式土器



第24図98～109(表・裏)　　(×約1/3)

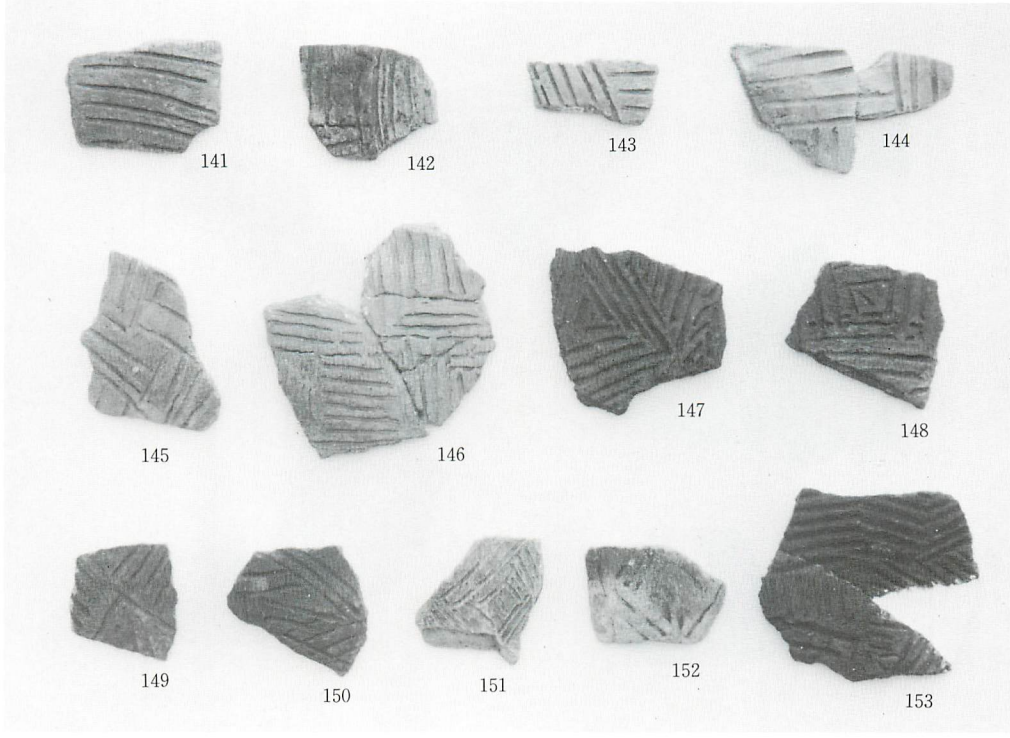
図版16　曽畑式土器

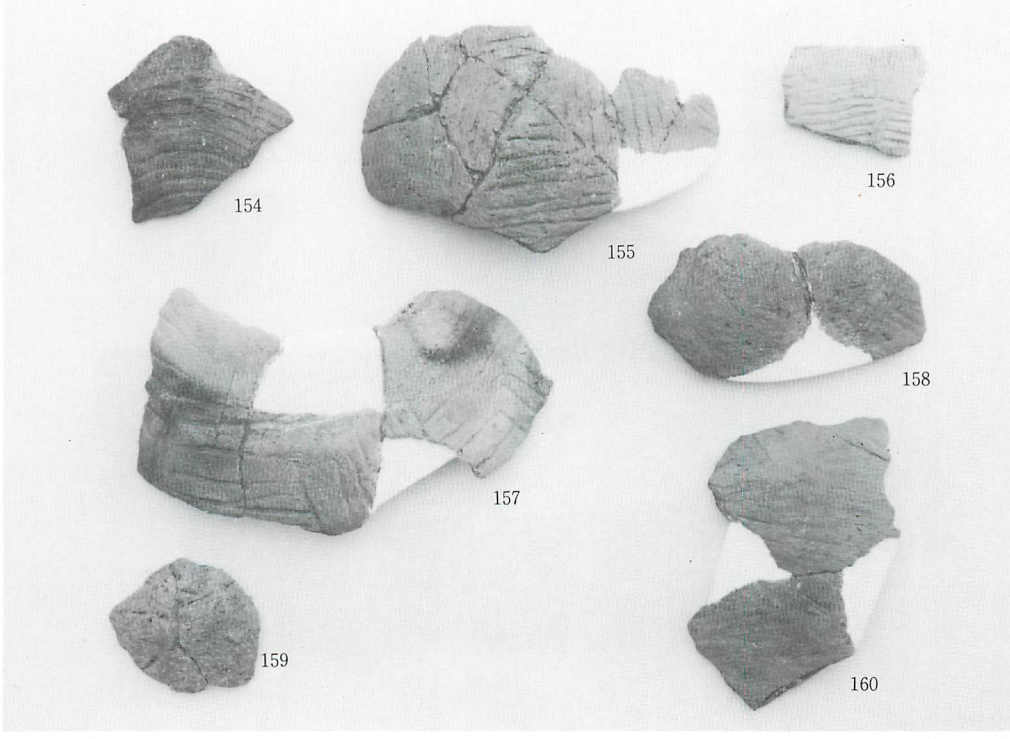




(上) 第24図110～第25図123　(下) 第24図124～140　　(×約1/3)

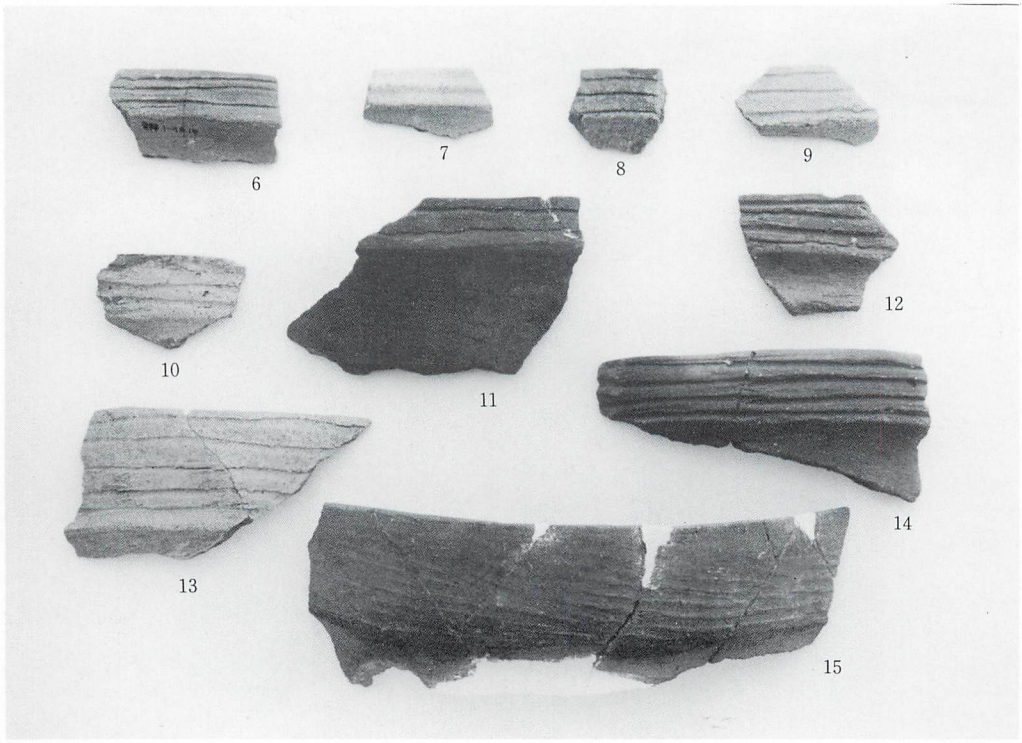
図版17　曽畑式土器





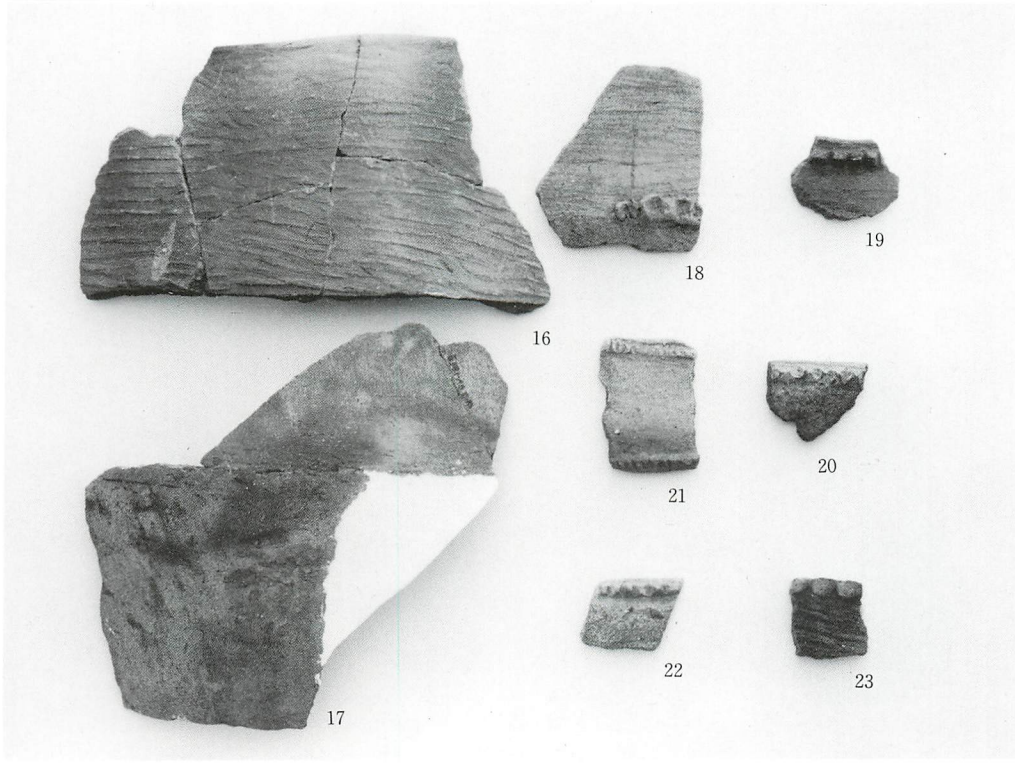
(上) 第25図141～第26図153 (下) 第26図154～160　　(×約1/3)

図版18　縄文時代後・晩期土器

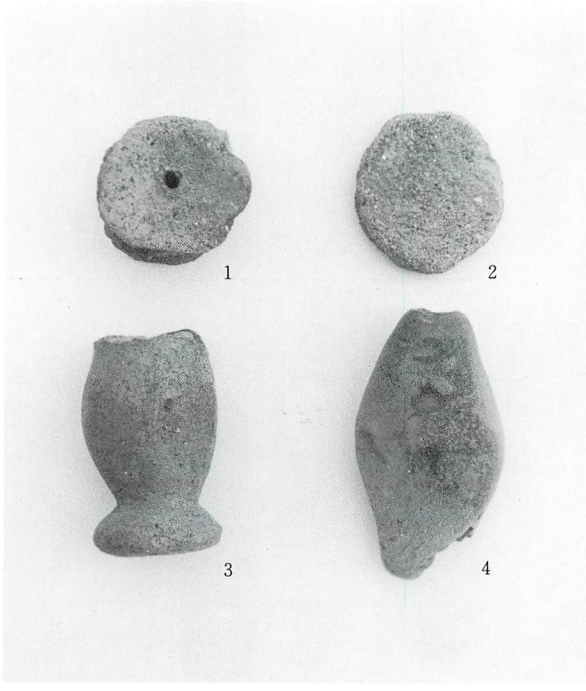


第27図 1 ～第28図15　　(×約2/3)

図版19　縄文時代後・晩期土器、土製品・玉類



（×約1/3）



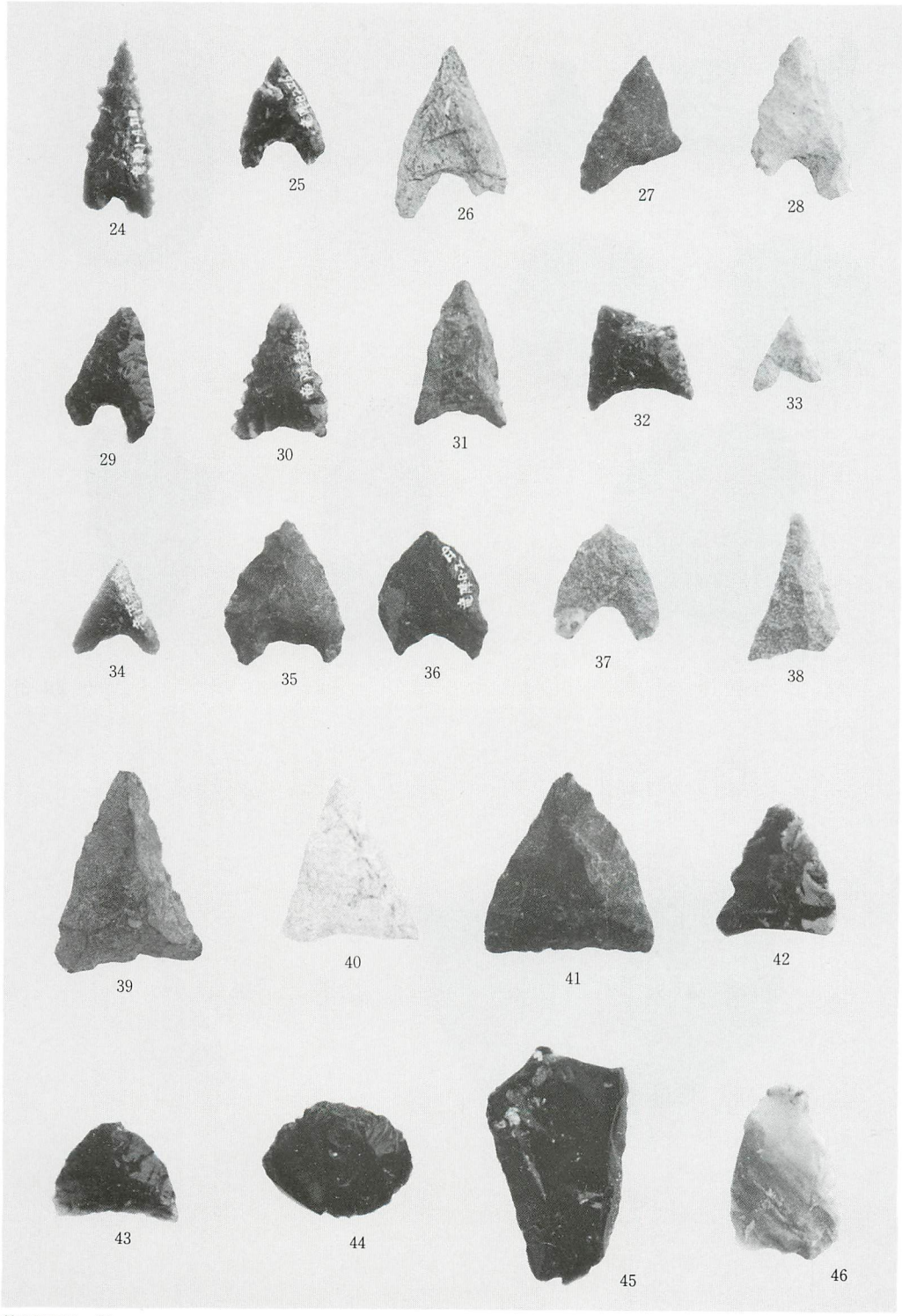
（上）第28図16～第29図23　（下）第36図１～８

（×約2/3）

図版20　縄文時代石器

第31図1～第33図20　　（×約1/3）

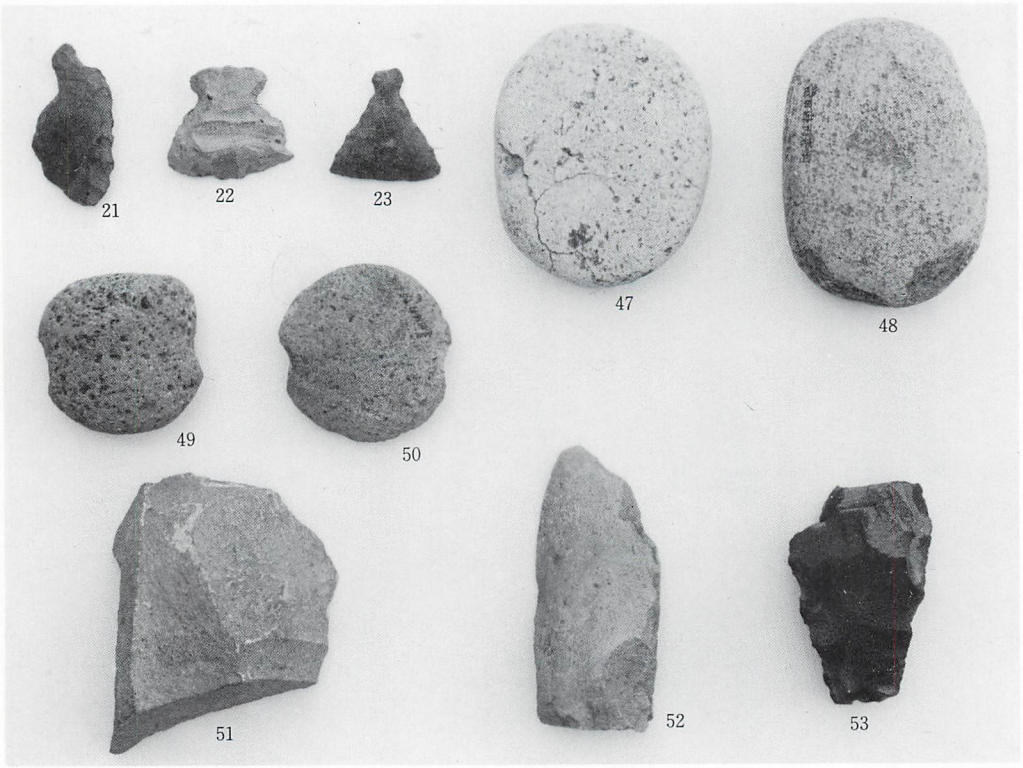
図版21　縄文時代石器



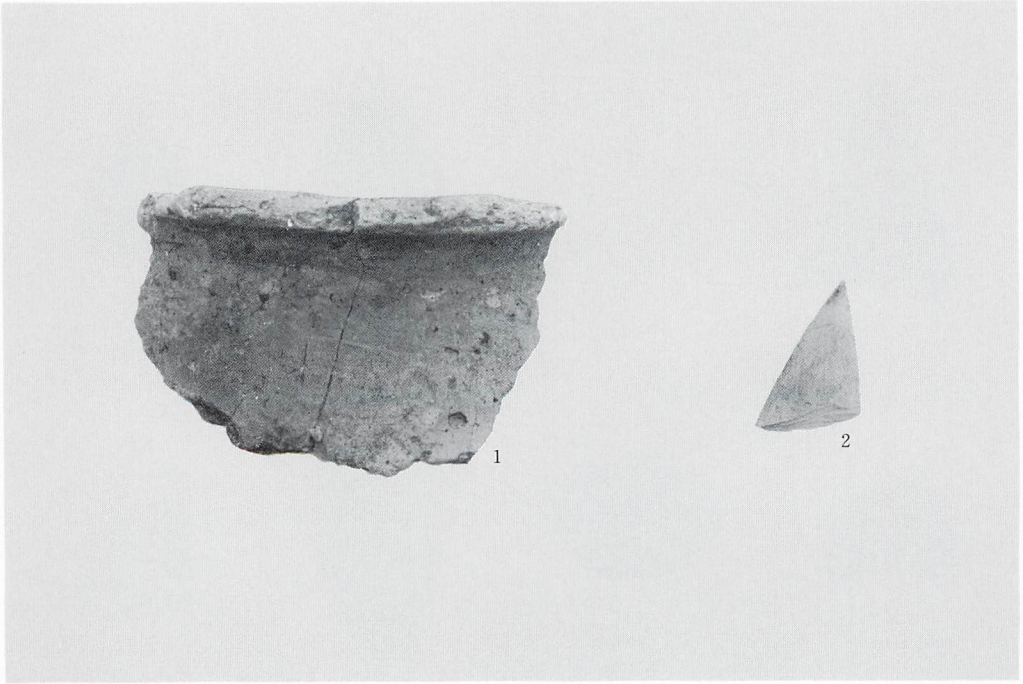
第34図24～46

(約×1/1)

図版22　縄文時代石器、弥生時代出土遺物



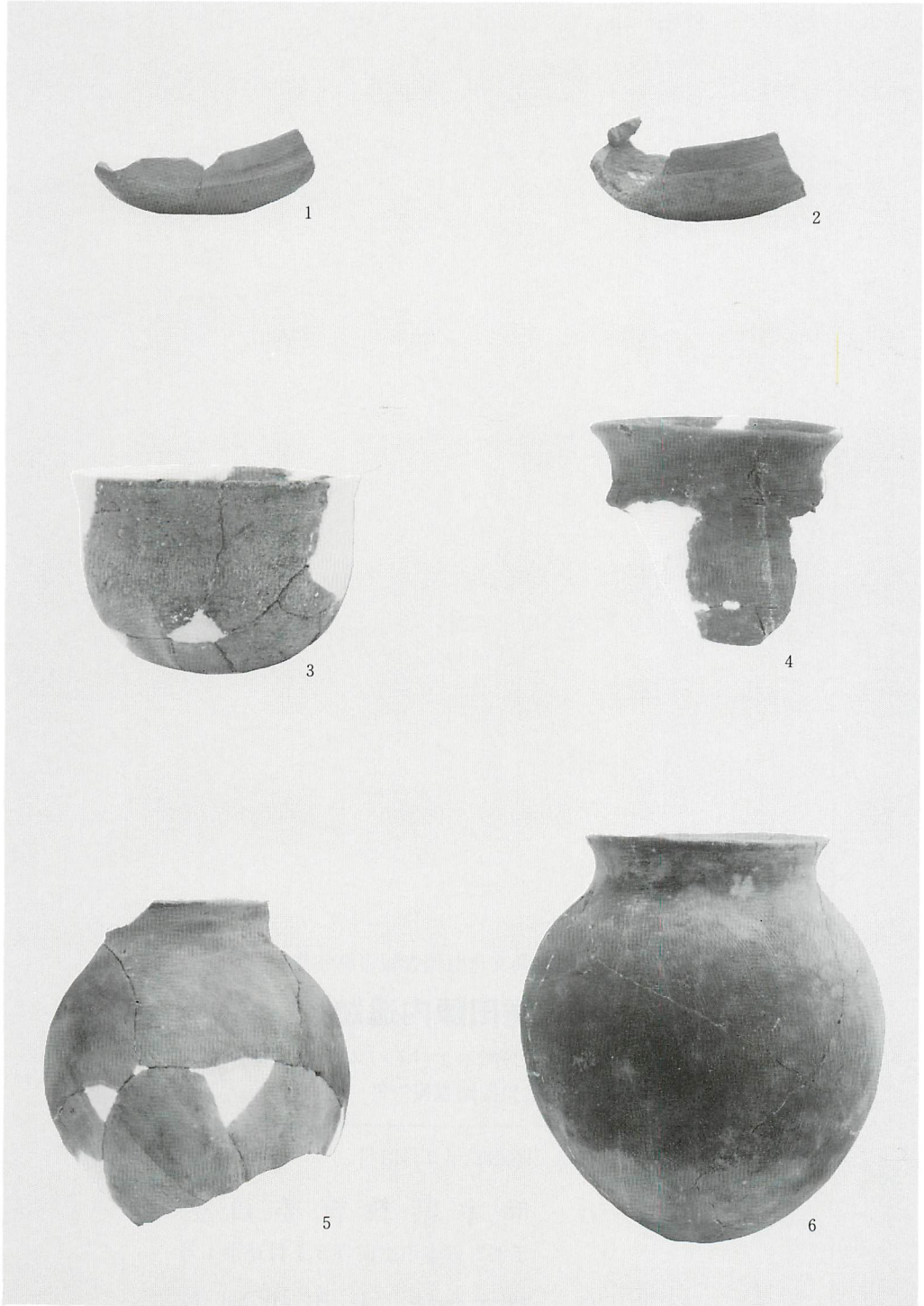
（×約1/3）



（上）21～23は第33図、47～53は第35図（下）第37図１．２

（×約2/3）

図版23　住居址内出土遺物



1号住居址出土遺物１～４（第40図２．５．６．９）　２号住居址出土遺物５.6(第43図１．２）　（１～３×約1/3　４～６×約1/6）

熊本県文化財調査報告第98集

〔竜田陳内遺跡〕

一般国道３号熊本北バイパス建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　昭和63年３月31日

発　行　熊本県教育委員会
〒862 熊本市水前寺６丁目18番１号

印　刷　株式会社　大和印刷所
〒862 熊本市新南部町190-8

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 98 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：竜田陳内遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。
熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/